

2025年10月期 通期

決算説明資料

株式会社pluszero (証券コード:5132)

2025年12月10日

2025年10月期 通期 発表要旨

26/10月期
業績予想

・売上成長率30%、営業利益率37%が目標

- ・ 今までと同様の確度でチャレンジできる目標設定とする。
- ・ 売上高成長率30%(20億円)、営業利益成長率44%(7.4億円)を目指す。

25/10月期
通期

・営業利益率33.4%達成・売上成長率27%

- ・ 売上15.46億円、営業利益5.16億円(前年比106%:倍増)、純利益3.66億円での着地。
- ・ AEI拡大・拡販に向けて投資を実施した中で、当初目標の収益率を実現

中期
経営
目標
の
棚卸
し

成果

課題

・AEI関連サービスの立上成功

- ・ 【AIオペレーター】 導入準備中企業が5社(プライム上場3社、スタンダード1社、スタートアップ1社)と順調に進捗。商談中企業は66社に増加。今期中に利用料課金開始予定。
- ・ 【AIによる営業シミュレータ】 利用料課金開始済。大規模PoC実施中。
- ・ 【AEIDESH(人とAIがコラボするためのプラットフォーム)】 利用料課金開始済。

- ・ 売上のスケーラビリティのスピード感向上
- ・ 営業利益率の更なる向上

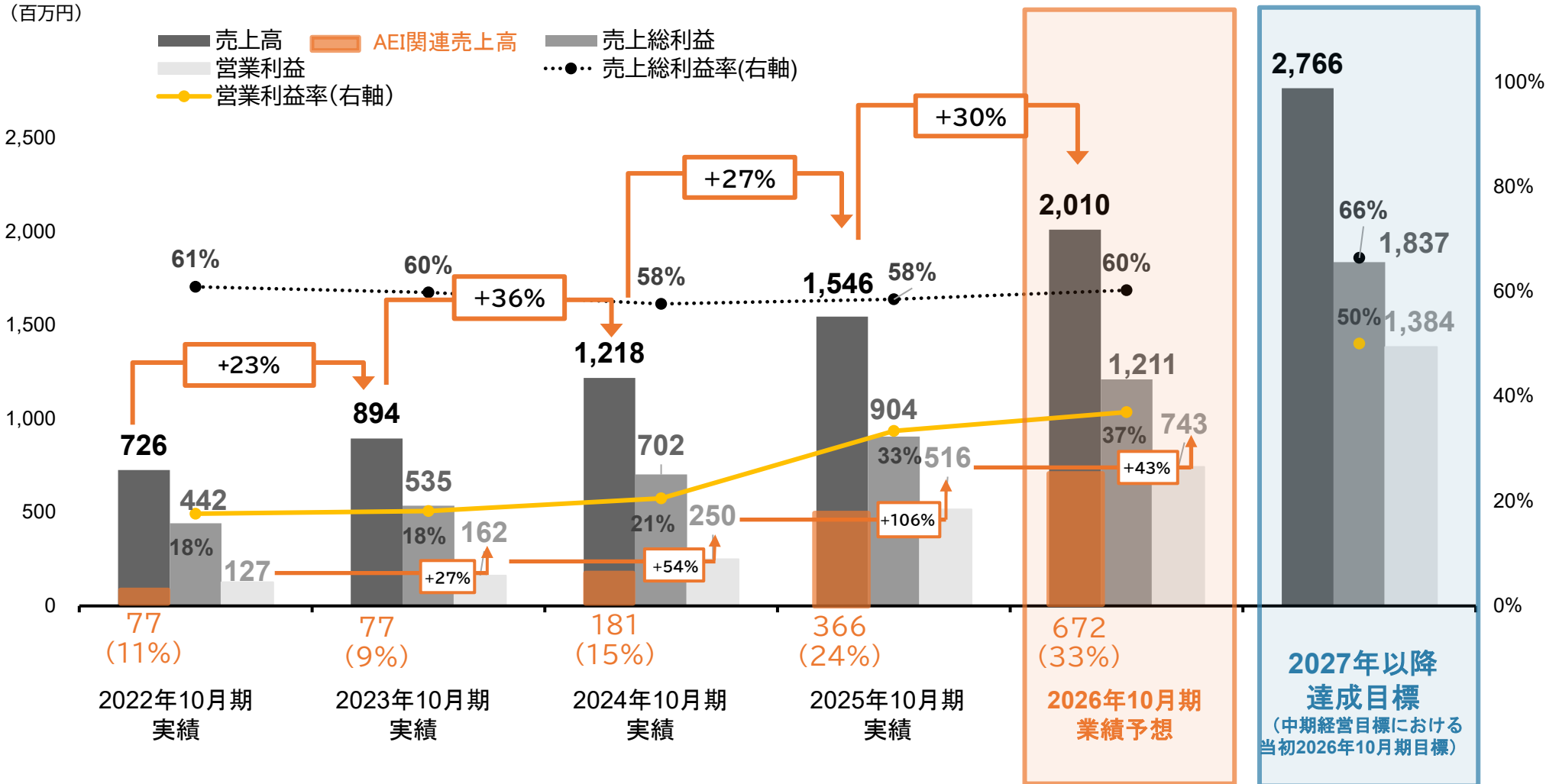
新計画

- ・ 2027/10期～2029/10期対象の新中期経営目標を策定(2027/1までに発表)

2026年10月期業績予想と当初公表の業績目標について

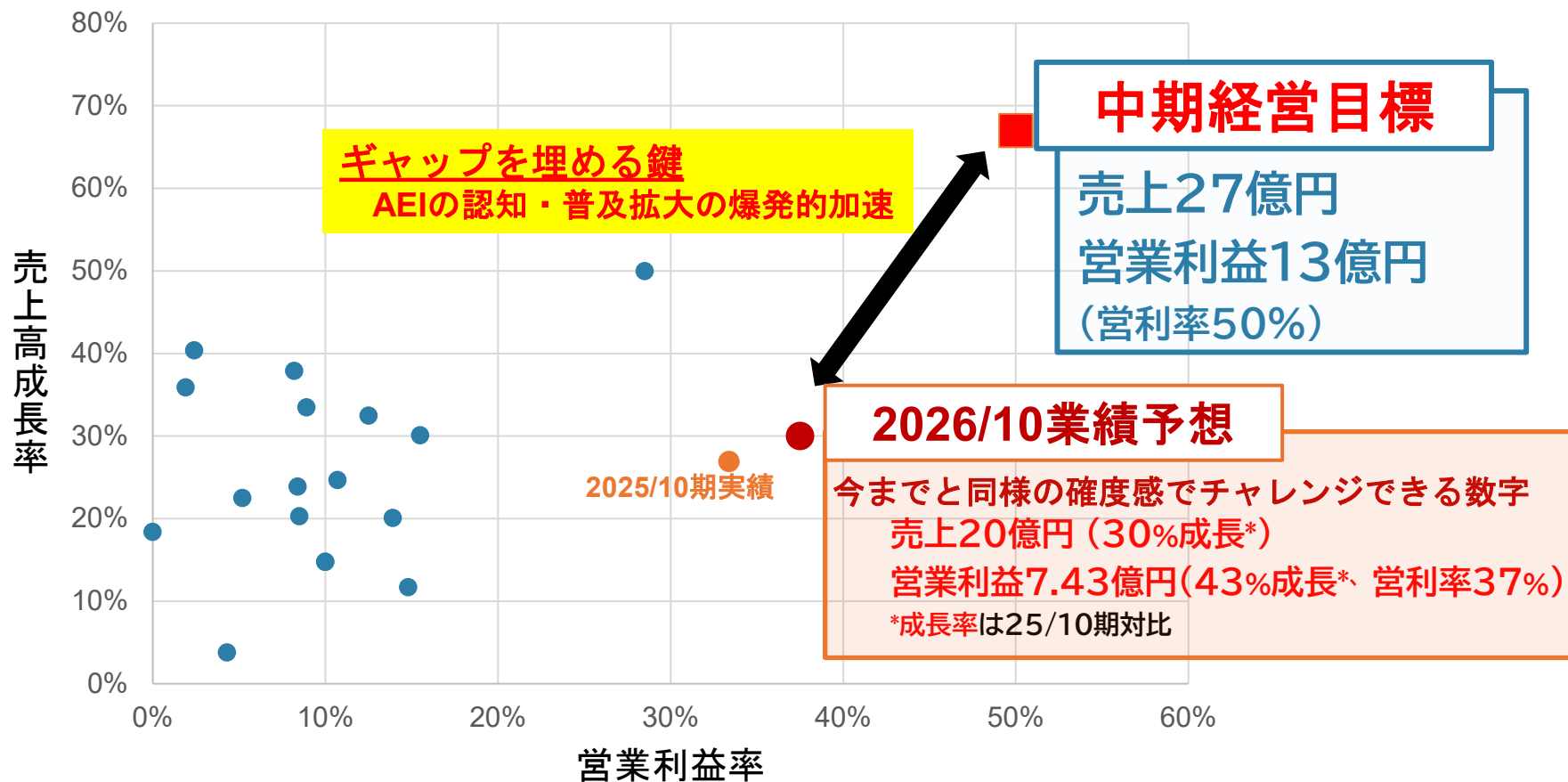
- 業績予想の売上成長率は30%、営業利益の成長率は43%
- 営業利益率37%、売上総利益率60%は、経年で見ても順調に成長。

(百万円)



中期経営目標の進捗状況概要

- 中期経営目標の最終年度であり、最後まで目標を見据えて、中長期の収益最大化を図る。
- そのために、現在、PoCの最終段階に入っている営業分野におけるAEIの本格適用のプロジェクトを成功させることに注力し、その後のAEIの認知・普及拡大の起爆剤とする。

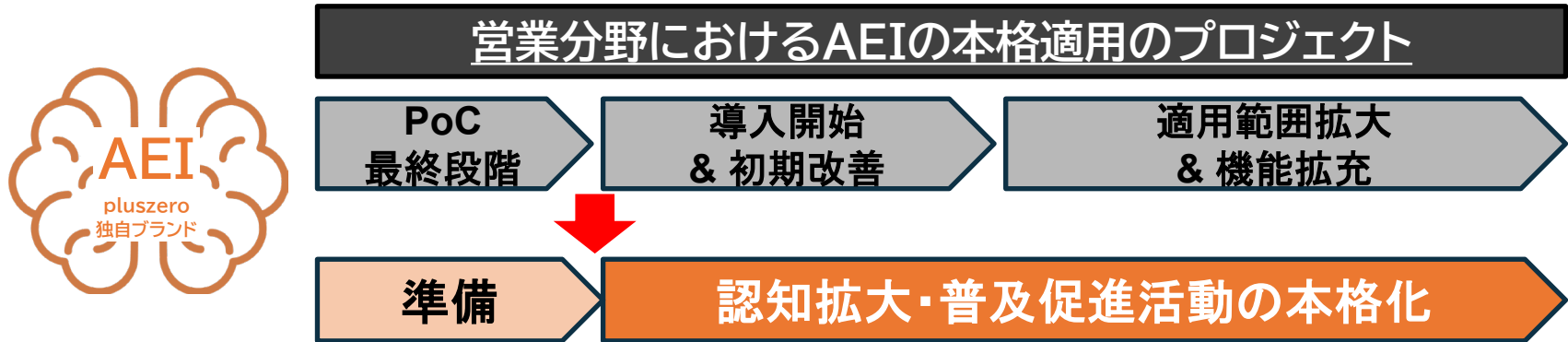


(注) 類似企業は当社が事業内容に基づき選定した企業の内、営業利益が赤字の企業を除外したもの。
営業利益率と売上高成長率は最新の発表済業績予想の数字を使用。

中期経営目標と業績予想のギャップを埋めるための方策

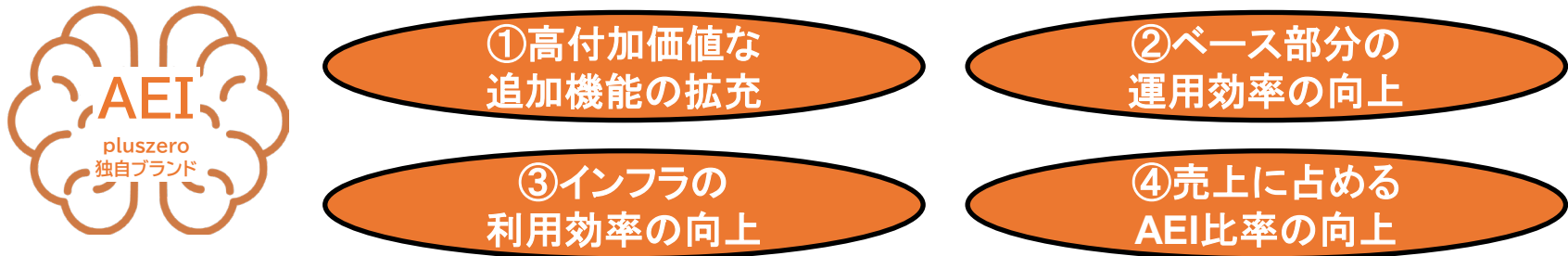
・ 売上のスケーラビリティのスピード感向上

AEIの最重要プロジェクトと連動して本格的なPR&広告宣伝等のマーケティング活動を開始予定



・ 営業利益率の更なる向上

AEI関連の機能拡充や運用、インフラなどの各種効率向上、AEIの社内売上シェア拡大が有効

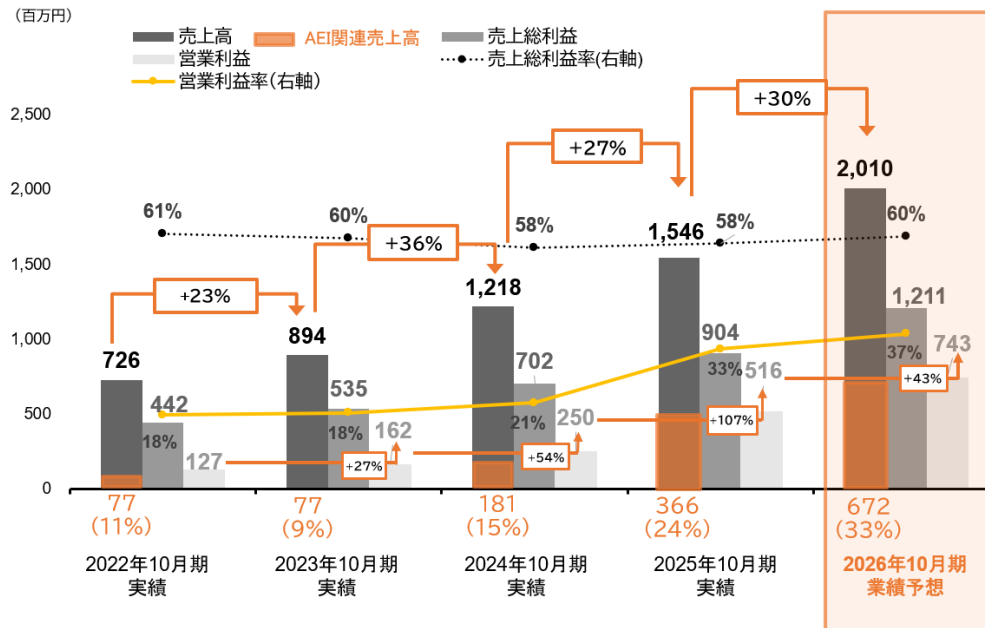


・ 共通

全社挙げて取組中のAIコーディング(AIによるプログラミング効率化)が有効

新中期経営目標について

- 2027/10期～2029/10期対象の三年間の新中期経営目標を策定する
 - 発表時期は未定。遅くても2027/1には発表
- 目的は、「**桁違いの成長への基盤作り**」
- チャレンジ内容(現時点見通し)
 - AEIのEはElasticから、Elastic+Enterprize+Evolvingへ
 - Enterprise エンタープライズAI
 - Evolving 自己成長するAI



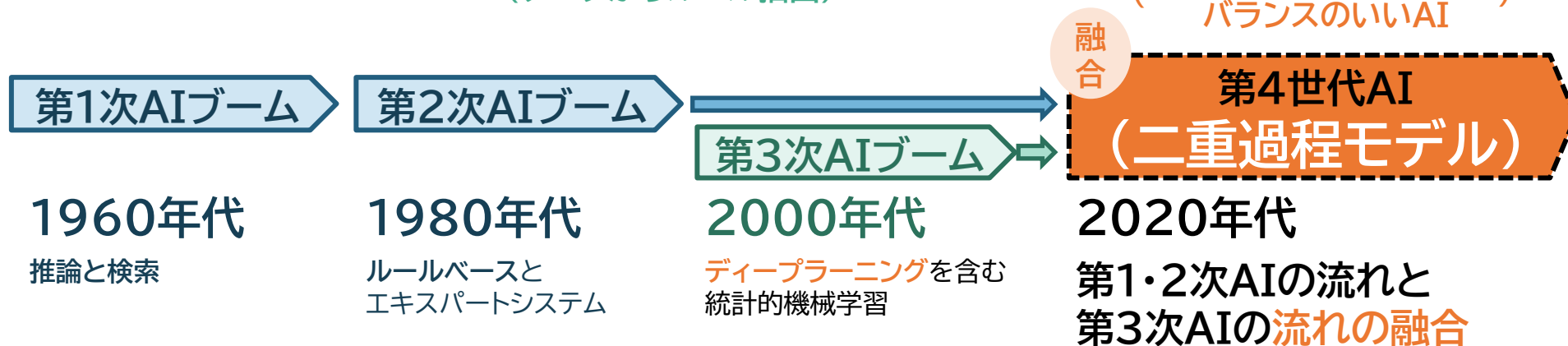
+ zero

新中期経営目標
(発表時期は未定。遅くても
2027/1には発表)

2027年10月期 2028年10月期 2029年10月期

pluszeroは「第4世代AI」カンパニー

AEIはArtificial Elastic Intelligenceの略であり、
pluszeroが実装している二重過程モデルのAIのブランド名。



AEIの勝負領域

1. 信頼性の必要性

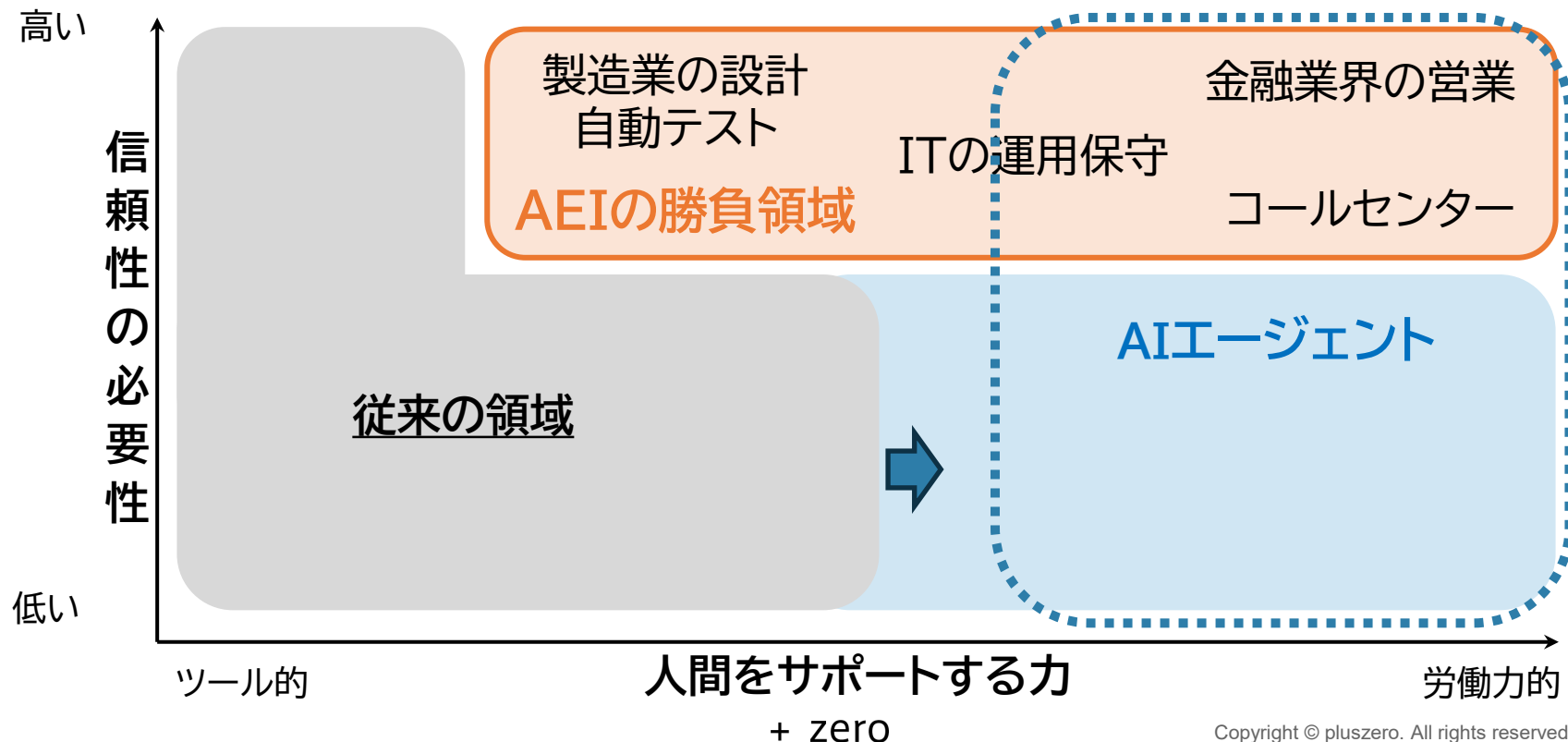
信頼性・・・確率的・統計的な対応では無く、**高い確実性や説明責任を求められるかどうか。**

2. 人間をサポートする力

ツールの・・・ごく一部を代替。一部の作業の後方支援。

労働力的・・・**ある範囲においては自立的・自律的に業務実行可能。人と対話ベースで協働可能。**

AEI=高信頼性の労働力提供

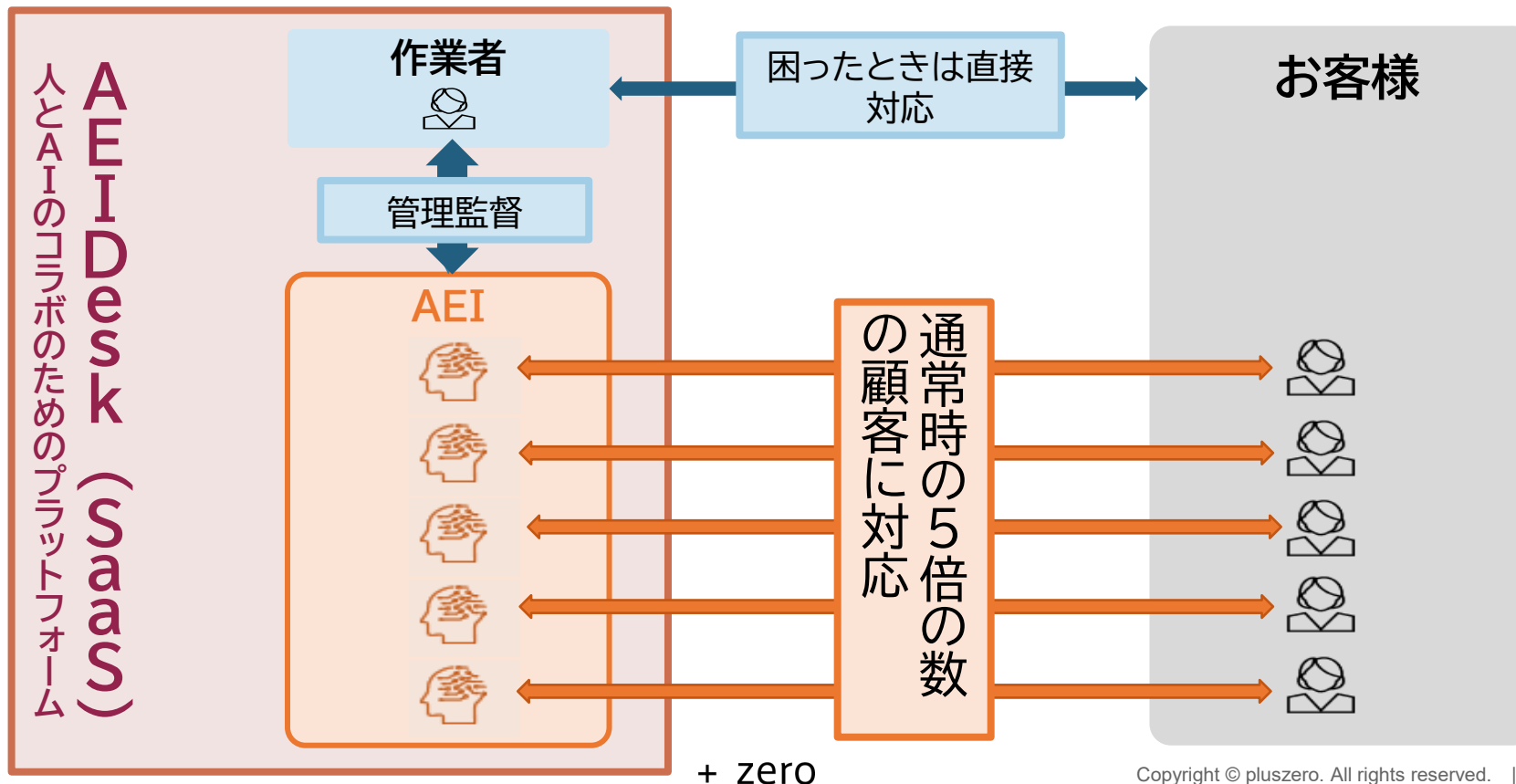


AEIが目指すゴール

AEIが目指すゴールは、「人間1人あたりの生産性」の向上。

理想のイメージ

イメージとして、人間の作業者が1人でさばいていた業務を人間の作業者1人に加えAEI5人でさばくことで、対応できるキャパシティが5倍になるような状態を創り出すことが理想だと考えている。
この場合、「人間一人あたりの生産性」は5倍になったと考えることができ、労働人口不足に対応可能。



2025年10月期 通期業績

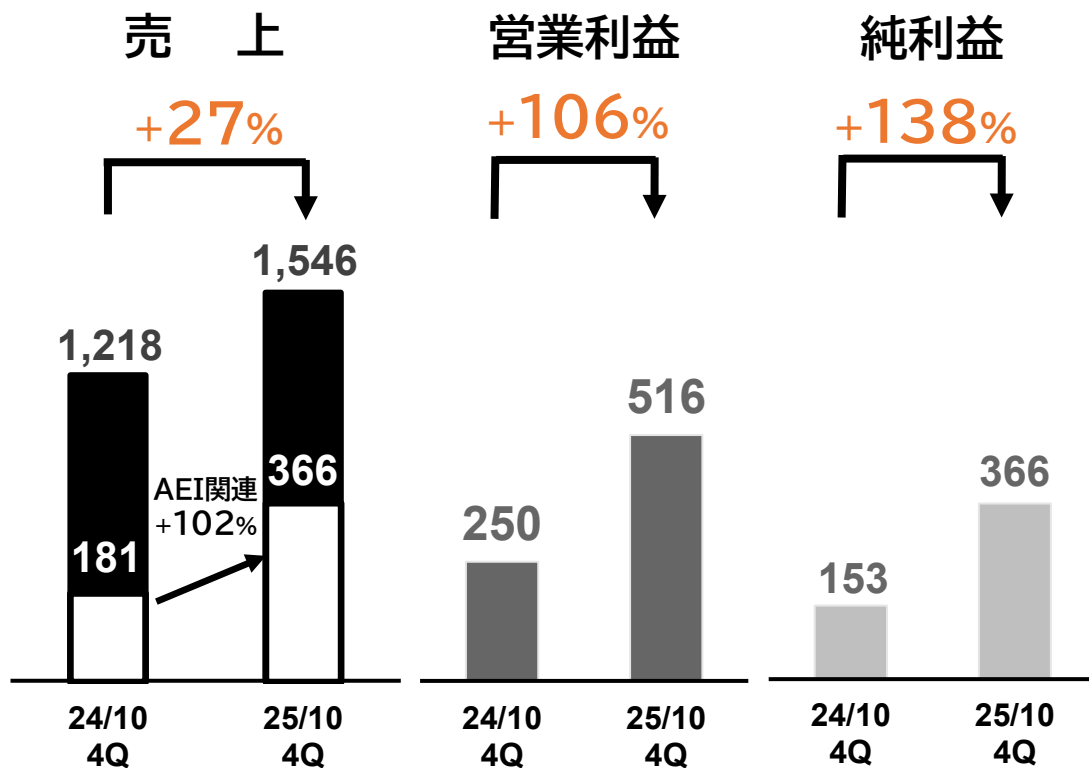
売上／コスト／バランスシート
AEIロードマップの進捗状況

2025年10月期 通期決算ハイライト

PL 前年同期比

- 売上は前年同期比+27%成長。
- 営業利益は前年同期比+106%と倍増。

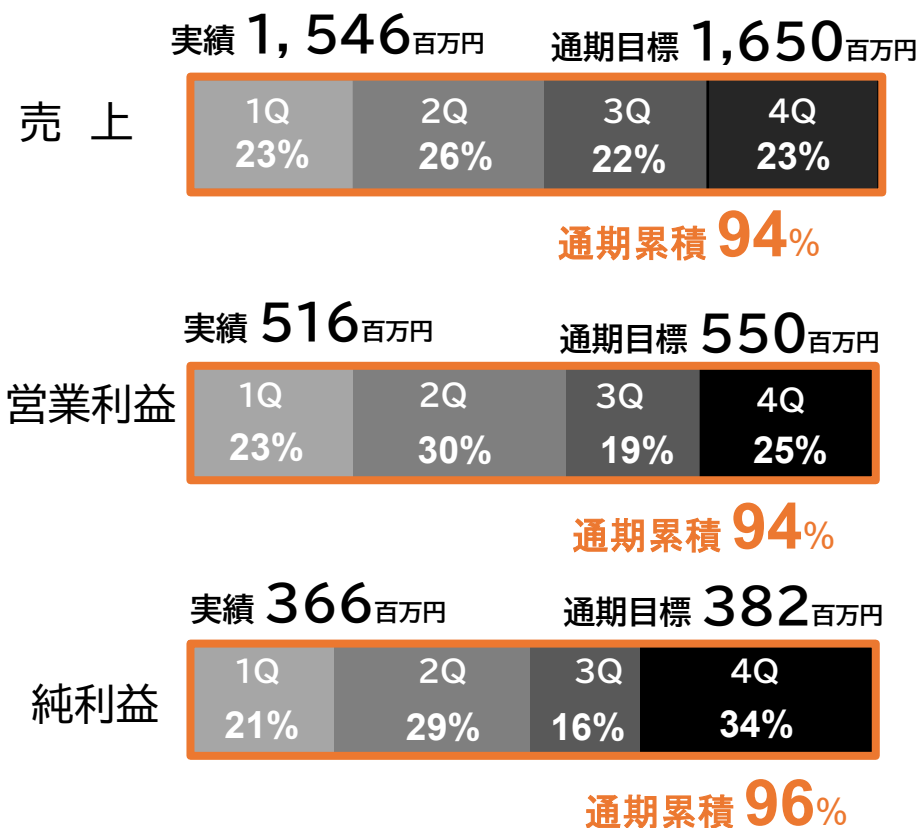
(百万円)



+ zero

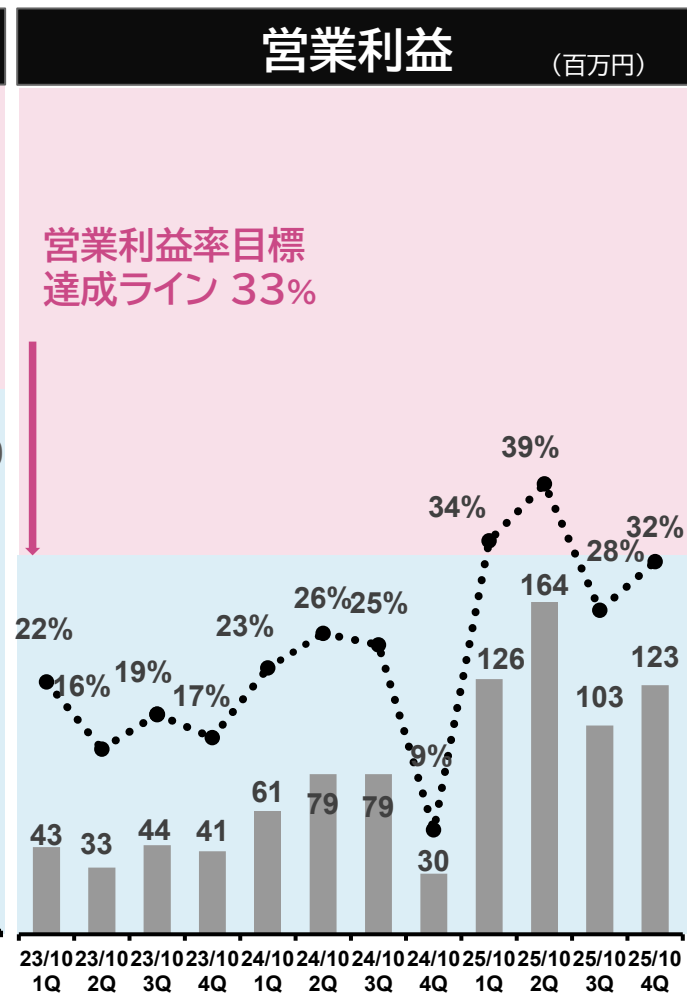
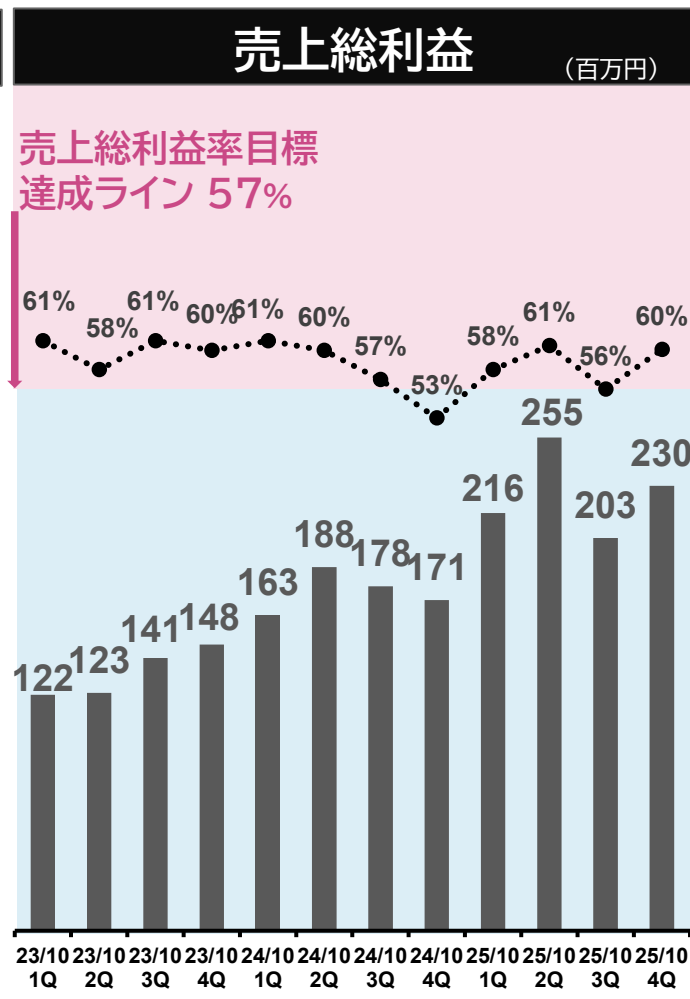
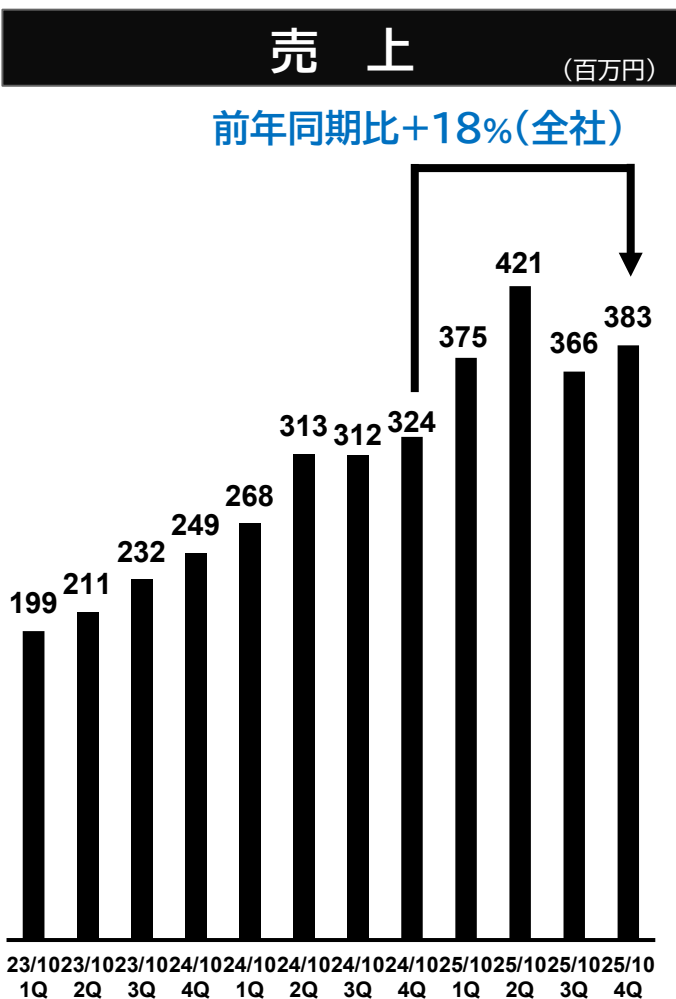
PL 進捗率

- 通期累計進捗率は売上94%、営業利益94%、当期純利益96%



2025年10月期 四半期会計期間別業績推移

- ・ 売上に関しては、AEIに対する重点投資に伴い、前年同期比18%で推移。
- ・ 売上総利益率に関しては、通期業績予想の57%を上回る60%にて着地。
- ・ 営業利益率に関しては、AEIに対する重点投資に伴い32%で推移。



2025年10月期 通期決算ハイライト

(百万円)	実績・前年対比			業績予想対比		状況
	24/10 4Q	25/10 4Q	前年 同期比 増減率	通期		
				業績 予想	進捗率	
売上高	1,218	1,546	+27%	1,650	94%	・前年同期比+27%成長 ・AIオペレーターも、導入準備5社と順調に推移。 ・通期進捗率94%での着地。
売上総利益	702	904	+29%	932	97%	
(売上総利益率)	(58%)	(58%)		(57%)		
営業利益	250	516	+106%	550	94%	・営業利益率は33.4%と、通期業績予想(33%)と同水準での着地
(営業利益率)	(21%)	(33%)		(33%)		
経常利益	251	519	+107%	550	94%	
(経常利益率)	(21%)	(33%)		(33%)		
当期純利益	153	366	+138%	382	96%	・通期業績予想23%に比して+1ポイントでの着地。
(当期純利益率)	(13%)	(24%)		(23%)		

2025年10月末時点におけるAEIの重点対象

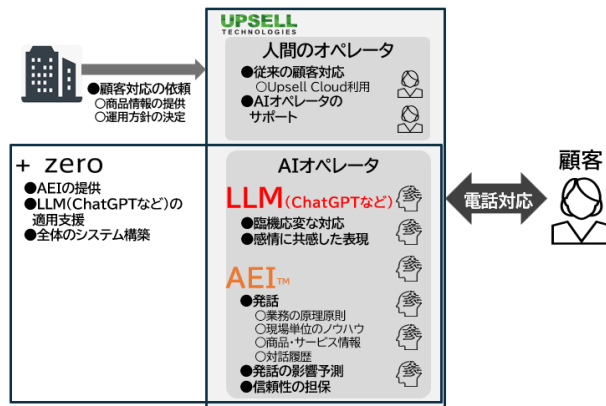
①コールセンター型に関しては2025年4月に販売開始。実導入に向けて、導入準備企業も着々と増加。②AIと人間の協働プラットフォームは産業適用開始済み。③製造業の設計効率化は複数のパートナーとサービス開発中。

いずれも、提携パートナーや業界関係者やメディアなどの評価が高く、今後の展開が期待大。

上記3つのソリューション以外にも業界カットやソリューションカットで新規ソリューションを開発中。

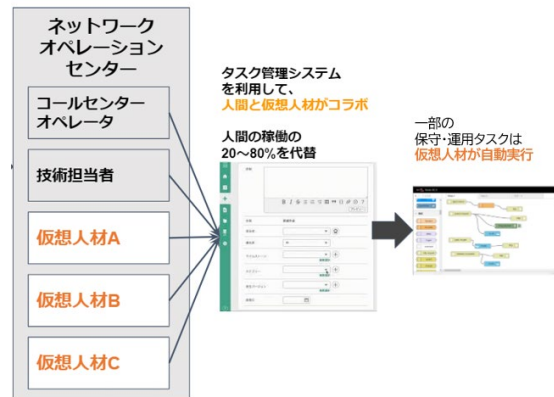
①コールセンター型のAEIの洗練・拡販(AIオペレータ)

複数のエンドクライアントが利用を目指して開発中。システム連携の最終調整中。コールセンター各社、エンドクライアントからのプロトタイプの評価が高い状況。



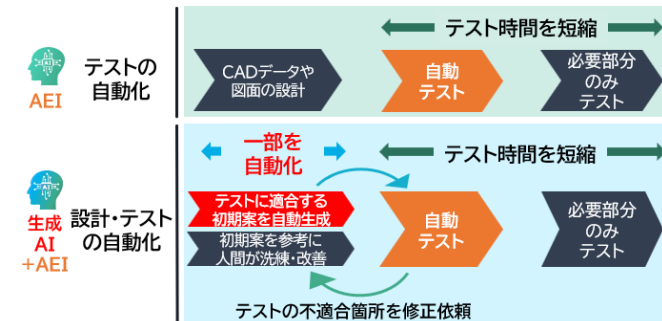
②AIと人間の協働プラットフォームの産業適用(AEI Desk)

稼働開始済み。丸紅グループ内へ順次展開中。他の企業に対しての外販についても商談中。



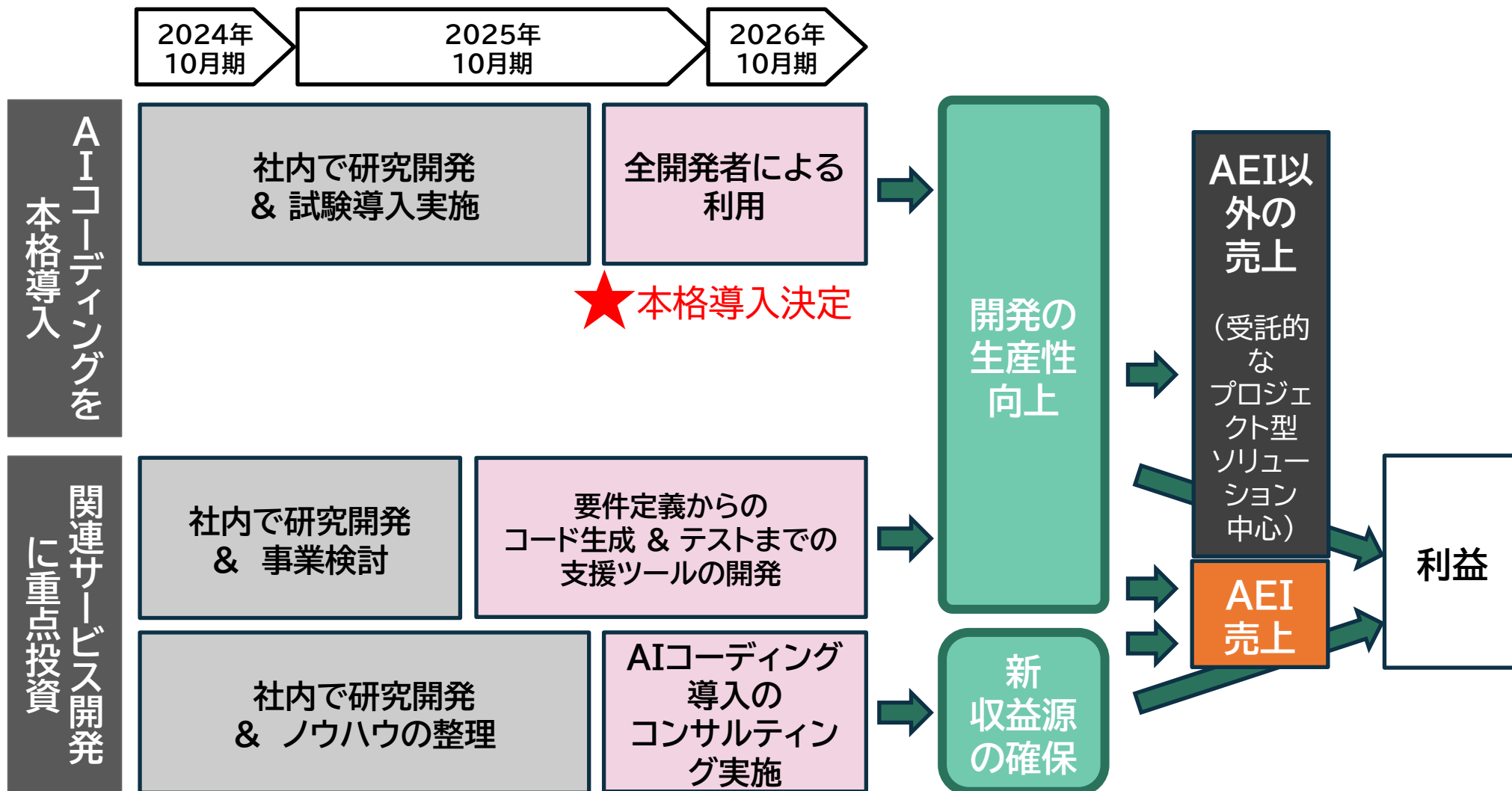
③生成AIを用いた製造業の設計の効率化

早期の産業適用に向けて開発進捗中。2023年10月に日経XTech、日経ものづくりに掲載。先進事例として紹介。



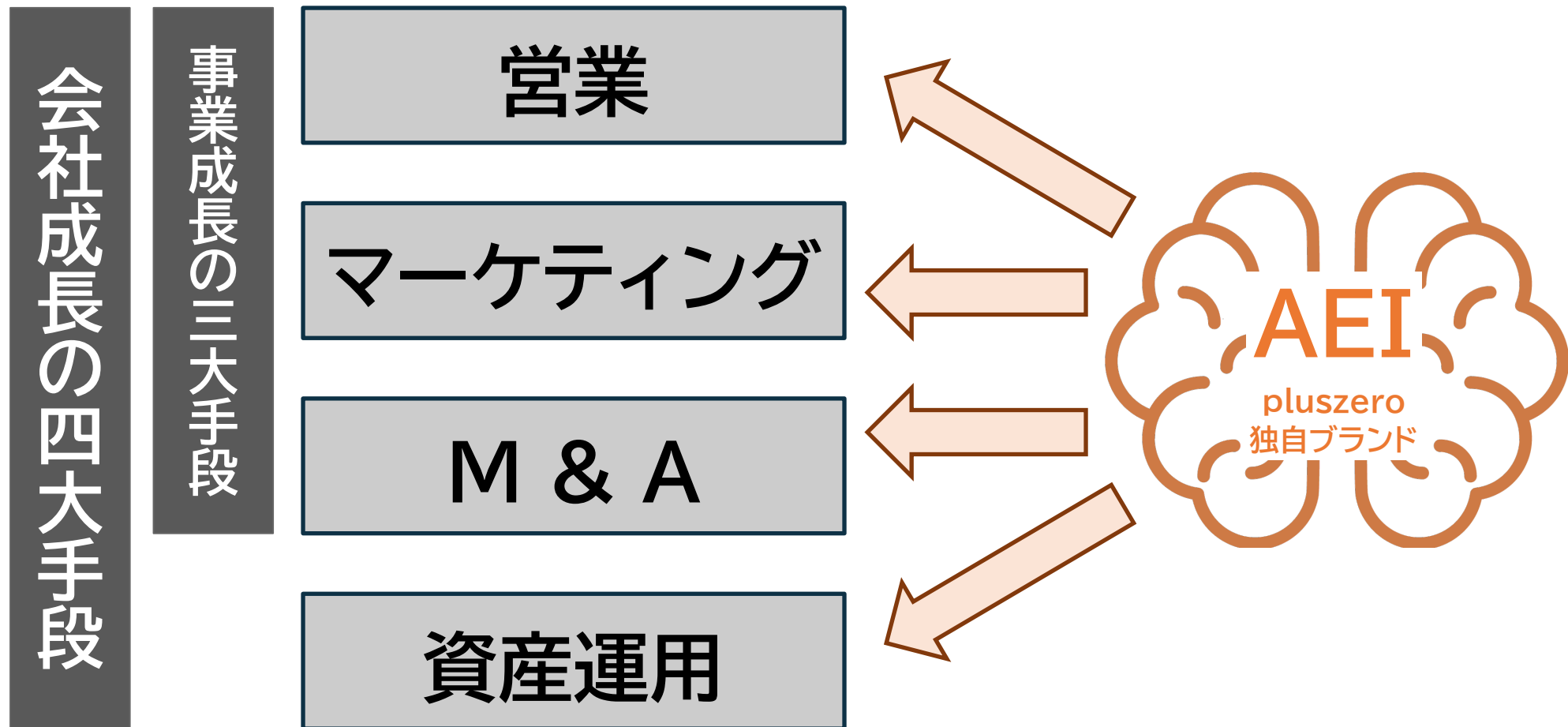
AIコーディングに対する取組み

開発生産性の向上や新収益源の確保に寄与し、全社売上の大部分を占めるAEI以外のプロジェクトへの影響が大きく、**売上・利益の両面で、全社業績への寄与度が極めて高くなる**ことが想定される。



高戦略性AIエージェントのサービス開発の本格開始

会社や事業の成長へのインパクトが大きい4分野に対して、AEIを本格導入。各分野毎に戦略的なパートナーとAEIによる事業開発・展開を実施中。



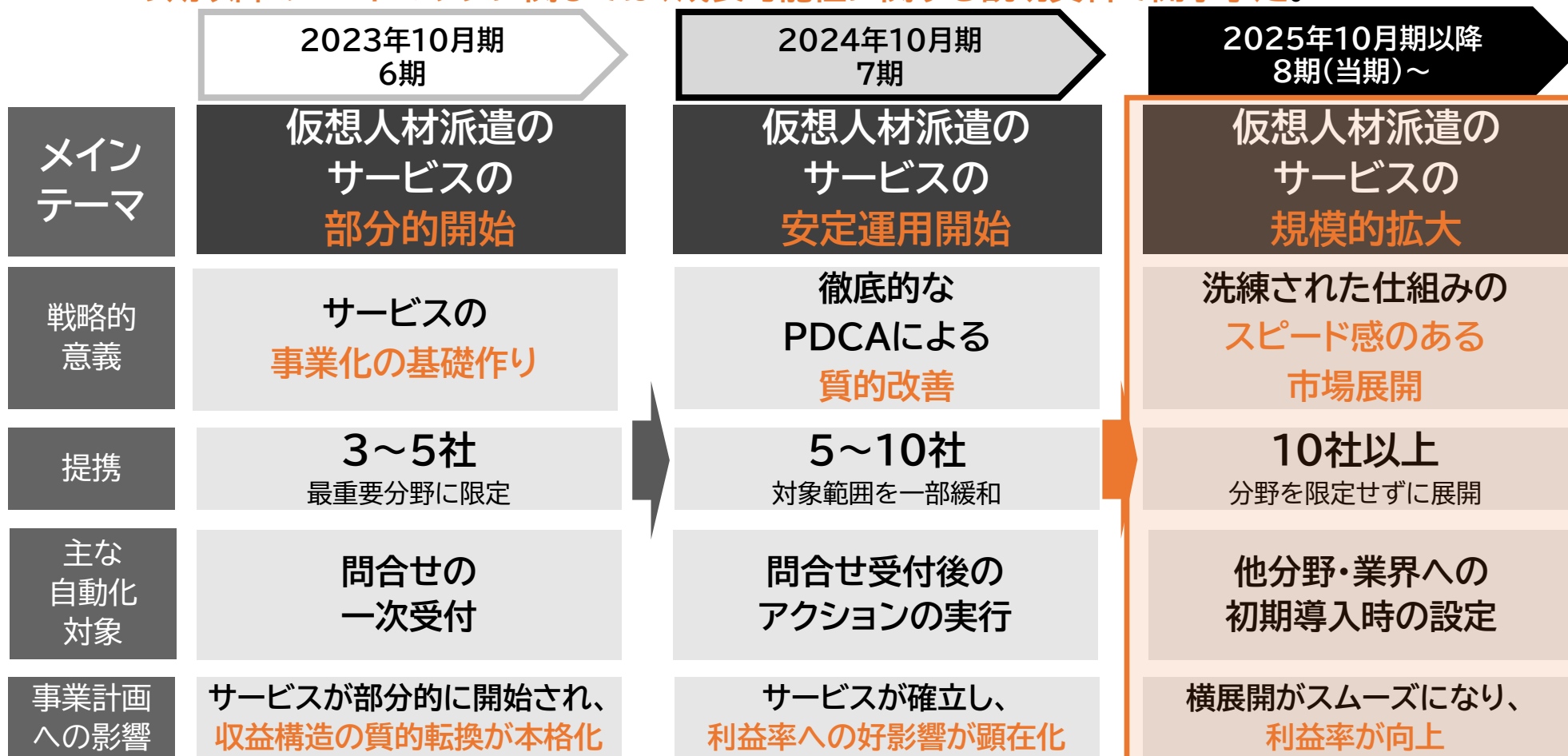
仮想人材派遣の適用範囲の更なる拡大

- ・5社(プライム上場3社、スタートアップ1社、ホリイフードサービス社)が導入準備中となり、AIオペレータの産業適用が本格化。5社の導入準備開始で導入事例の増加が確実になったことにより、AIオペレータの業績へのインパクトは拡大傾向へ。5社以外へのAIオペレータ技術のエンタメ等領域への適用も進捗。
- ・金融業界への営業支援を中心として3大テーマ以外のAEIの取組みが活発化。詳細は次ページ以降参照。

サービス区分	提携/利用/開発中社数 (25/7比)		導入準備中	商談中社数		詳細
	パートナー	ユーザー	ユーザー	パートナー	ユーザー	
①コールセンター型 (AIオペレータ)	1	0	5 (+2)	3	66 (+15)	・アップセルテクノロジー株式会社(UT社)と提携中 ・5社(プライム上場3社、スタートアップ1社、ホリイフードサービス社)が導入準備中 ・UT社経由中心に66社と商談中 ・△1社に関しては、コールセンターからその他へ区分を変更
②協働プラットフォーム(AEI Desk)	1	3	-	-	1	・丸紅I-DIGIOホールディングス株式会社(丸紅I-DIGIO社)と提携中 ・丸紅I-DIGIO社経由の顧客含め利用・開発中
③製造業テスト・設計自動化	2	1	-	1	1	・株式会社アビスト/株式会社ミスミグループ本社と開発中 ・複数の部品メーカー向けに開発中
その他	5	2	1 (+1)	7 (+2)	1	・営業支援、ハードウェア保守だけでなく幅広い分野で提携実施 ・金融業界への営業支援、高度専門人材のAI化支援、デジタルマーケティング、人材ビジネスやエンタメ領域などに展開中
合計	9	6	6 (+3)	11 (+2)	69 (+15)	

中期経営目標達成に向けたAEIの技術ロードマップ

- ・ 今期はサービスの規模的拡大がテーマ。
- ・ AIオペレーター・AEI Deskを横展開して導入企業を増やしていく予定。
- ・ スケーラビリティを高めるために、特に初期導入時の設定の効率化に集中的に取り組む中。
- ・ 9期以降のロードマップに関しては、成長可能性に関する説明資料で開示予定。

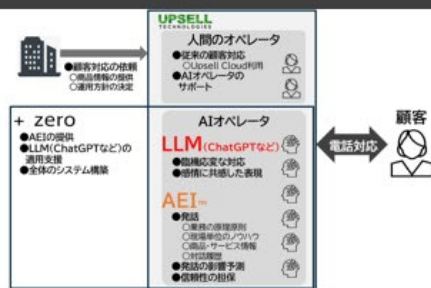


AEIの取組状況のまとめ

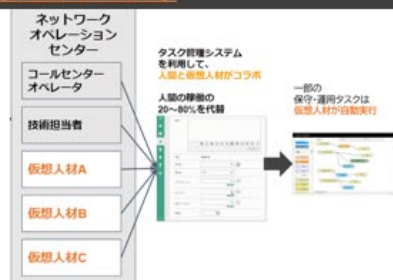
中期経営目標の最終年度である2026年10月期における売上・利益の両面で特にインパクトのある対象は、AIオペレータ、AIコーディング、営業関連のAEIサービスとなります。

重点対象

①コールセンター型のAEIの洗練・拡販(AIオペレータ)



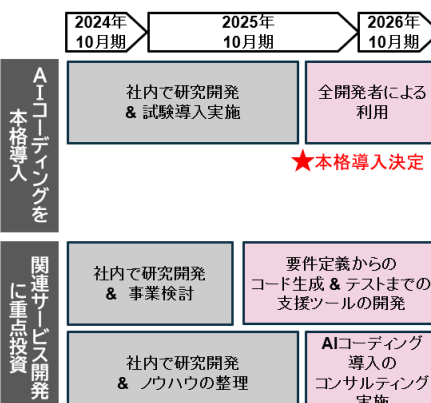
②AIと人間の協働プラットフォームの産業適用(AEI Desk)



③生成AIを用いた製造業の設計の効率化



AIコーディング



高戦略性AI

会社成長の四大手段

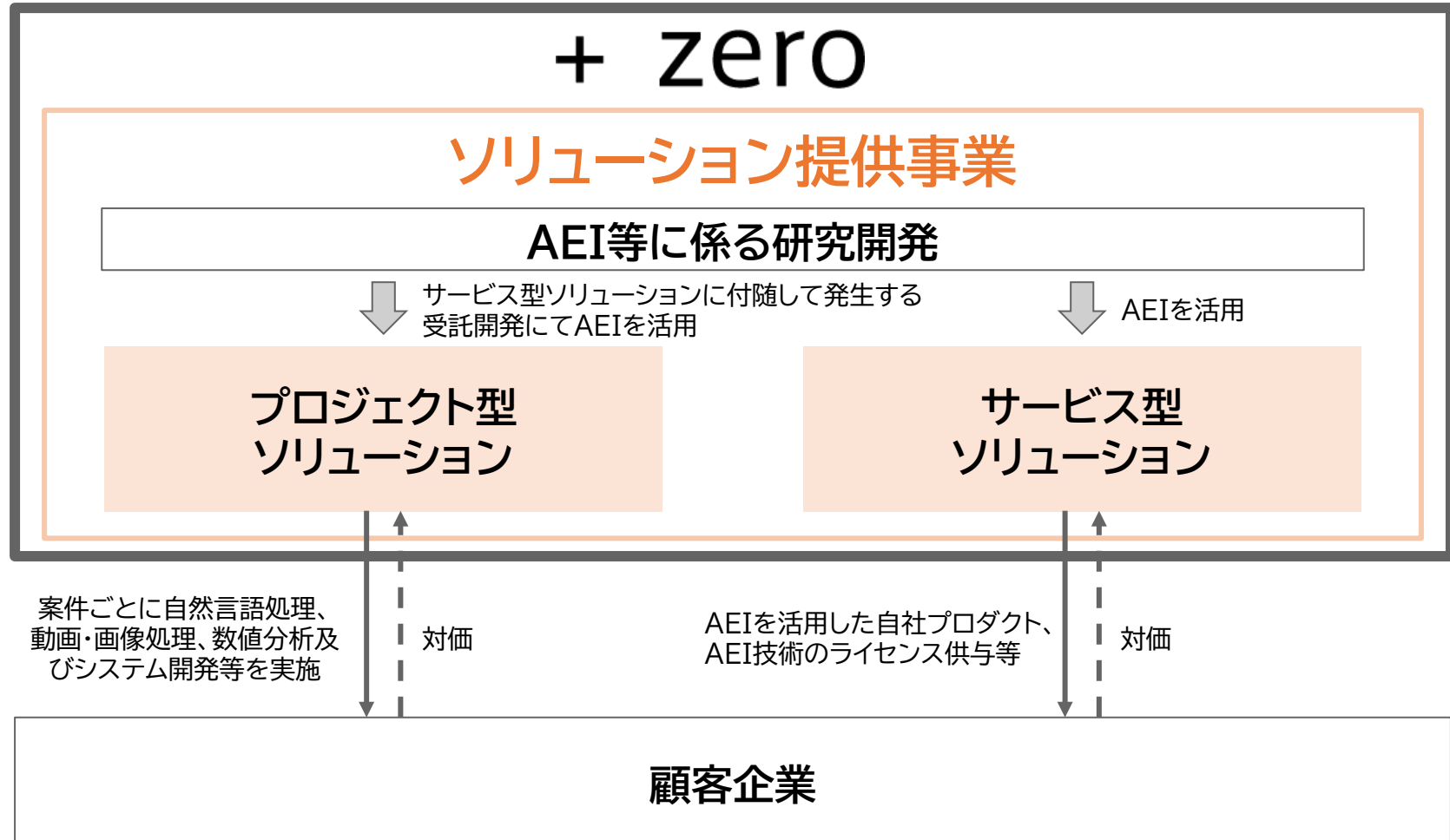
事業成長の三大手段



その他
未公開

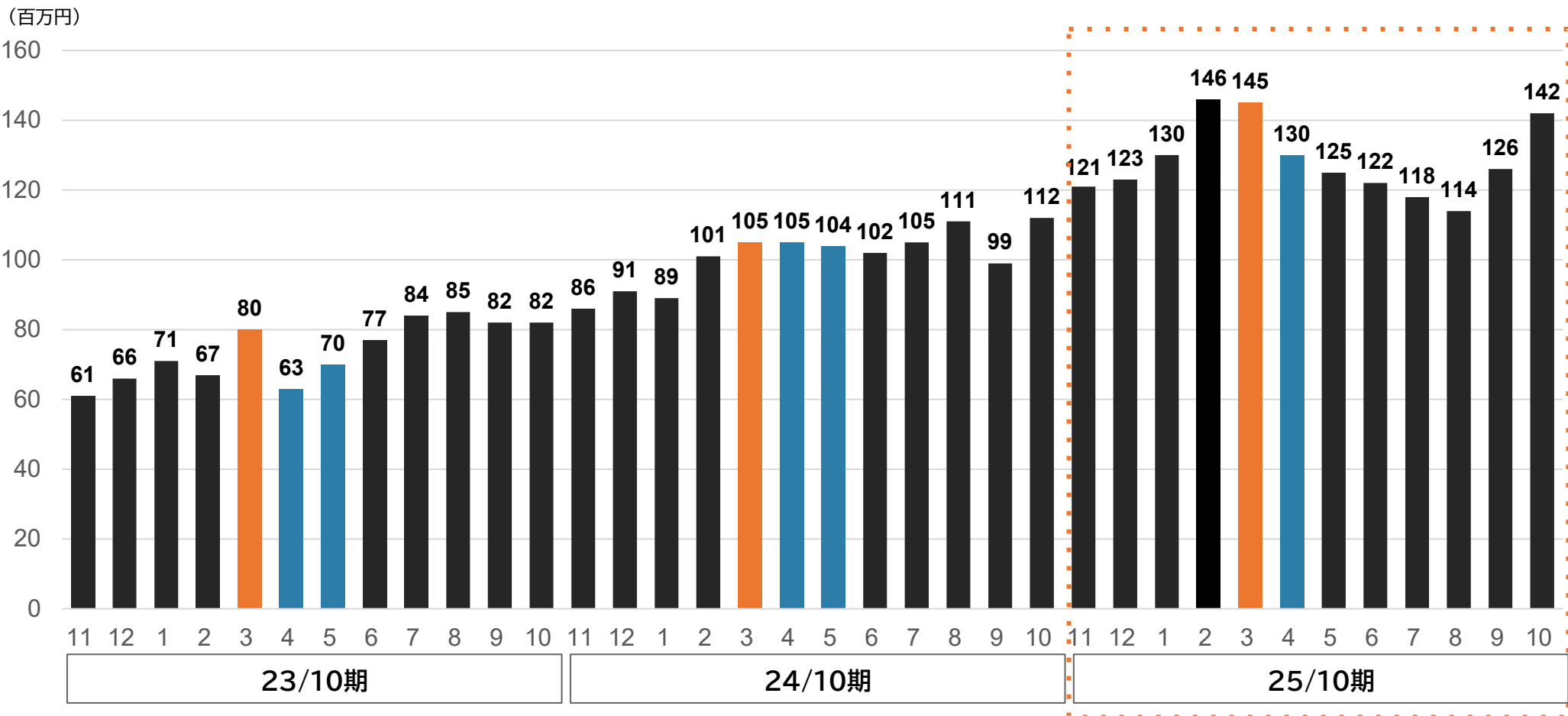
ソリューション提供事業の単一セグメントの会社

AI/ITソリューションを提供する「ソリューション提供事業」の単一セグメントで事業を展開。ソリューションの提供形態に応じて大きく「プロジェクト型」と「サービス型」の二つに大別される。プロジェクト型は業務提携中の顧客に対してAEIを利用し、サービス型はAEIを全面的に利用している。



売上の月次季節性

- 3月決算の顧客の駆け込み需要のため、年度末に当たる2～3月の売上が大きくなり、年度初めの4月の立ち上がりが遅くなる傾向がある。今第3四半期に、**来期以降のスケラビリティを重視してAEIへの重点投資を実施したが、当第4四半期の売り上げは右肩上がりで推移した。**

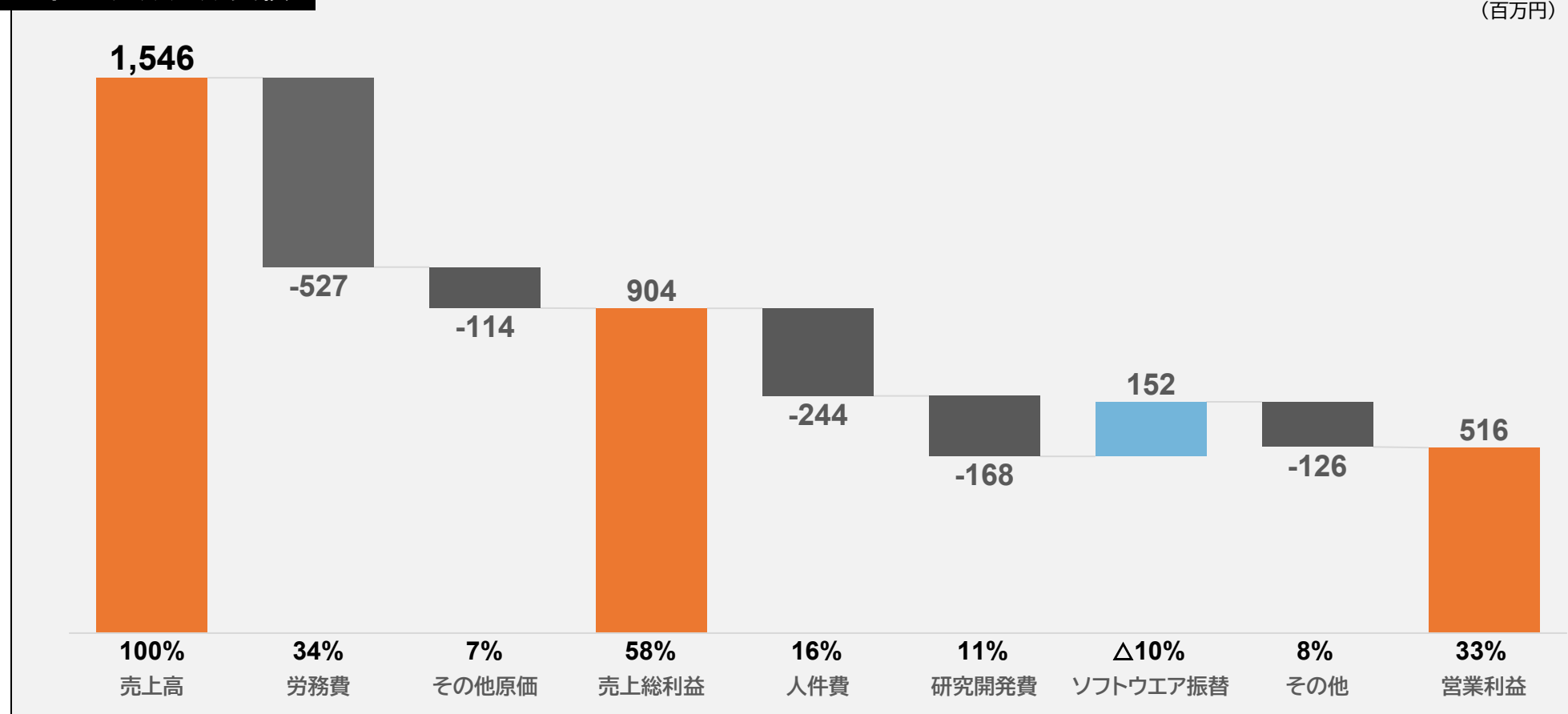


2025年10月期通期のコスト構造

- 概ね通期目標どおりのコスト構造で推移し、**営業利益率は通期目標比と同様の着地。**

25年10月期通期実績

(百万円)

(参考)
通期
目標比率

100%

36%

7%

57%

14%

9%

△7%

8%

33%

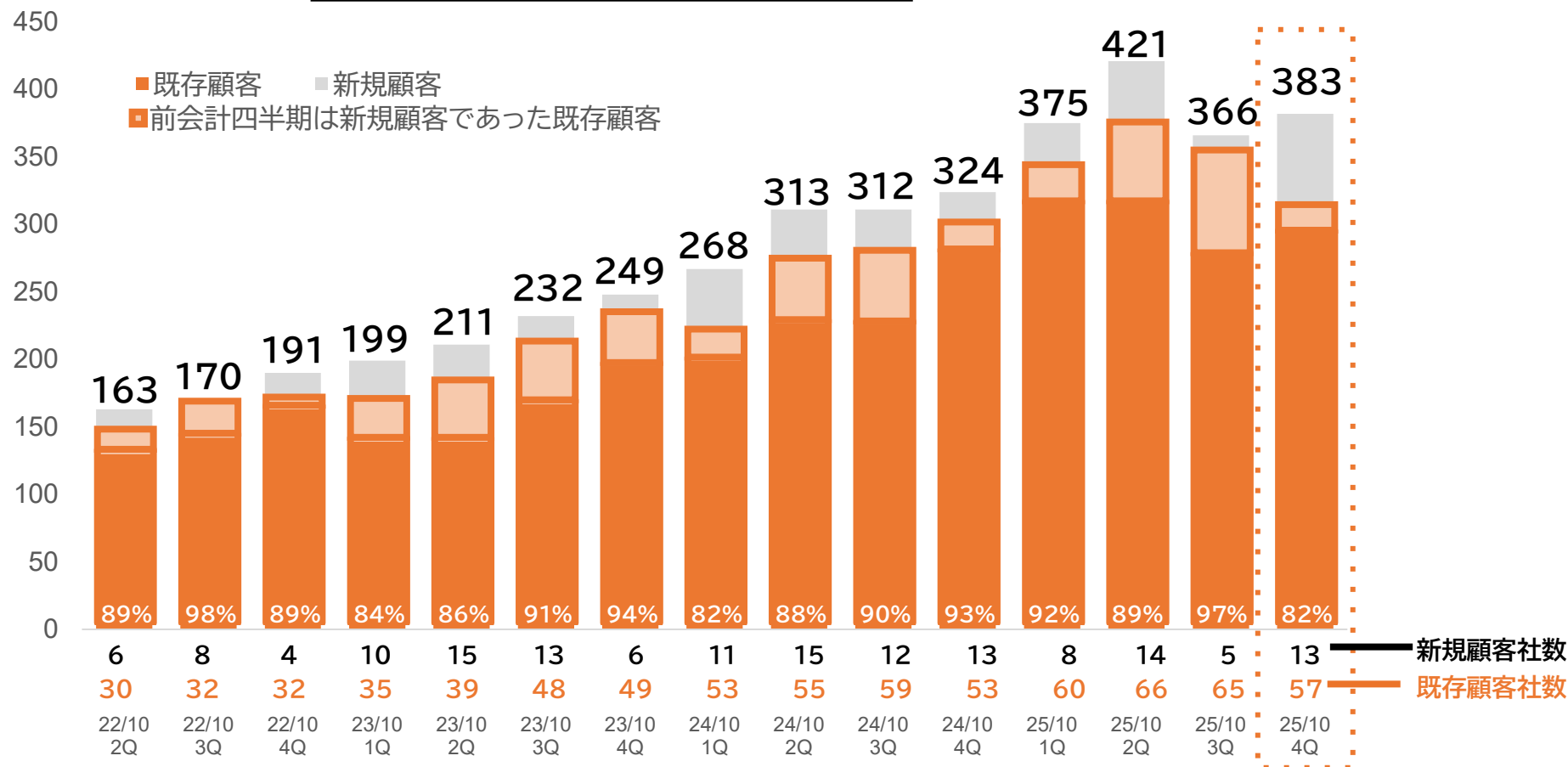
+ zero

多様なソリューション提供による収益の継続的成長

- 「既存顧客」を直近四半期会計期間までに売上を計上している顧客として定義。
- 当会計年度の新規顧客が既存顧客として定着したことで既存顧客への売上は安定的に推移。

(百万円)

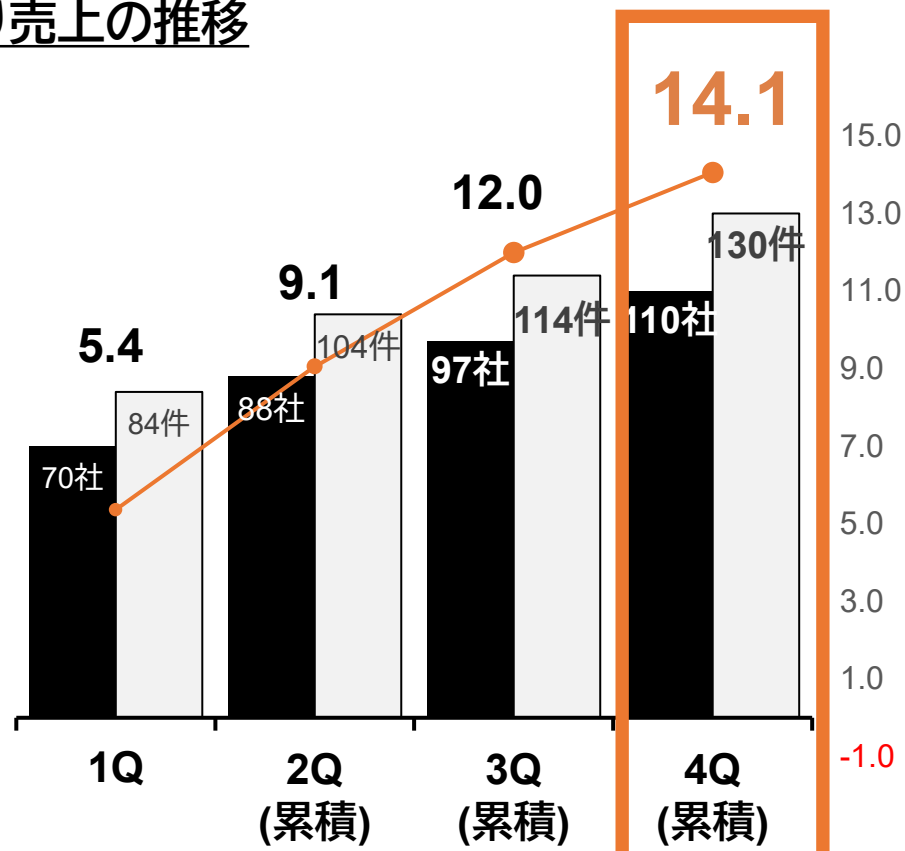
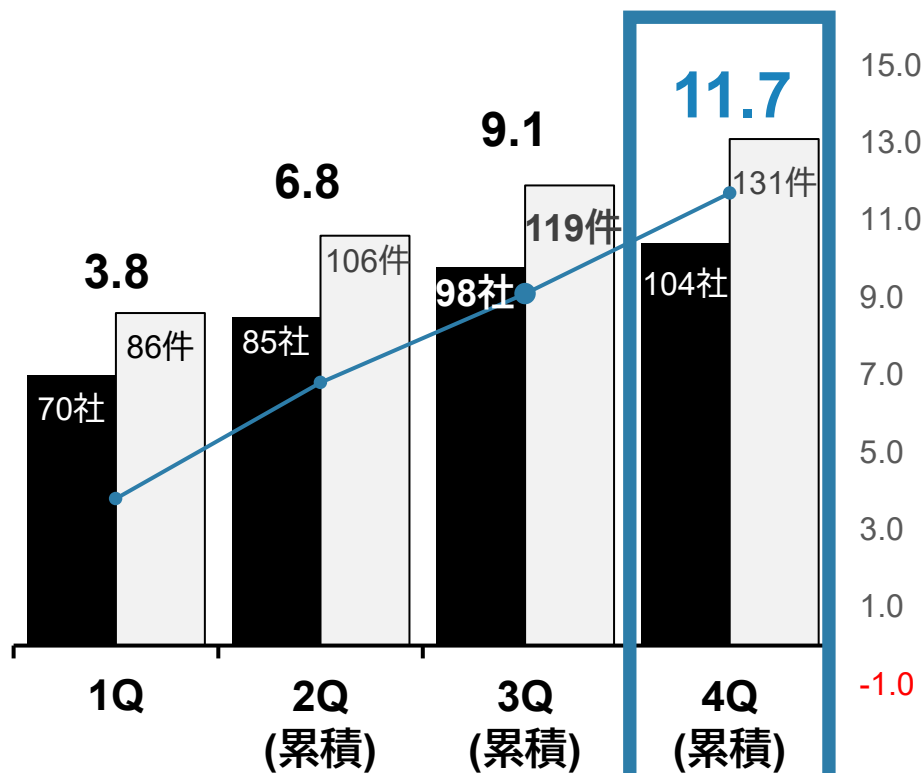
全社売上に占める既存顧客への売上の割合



取引先社数・1社当たり売上の推移

- 取引先社数、案件数は共に前年と同水準で推移。
- 1社当たり売上は前年同期から20%向上し推移。

取引社数と1社当たり売上の推移



■ 取引社数

□ プロジェクト数

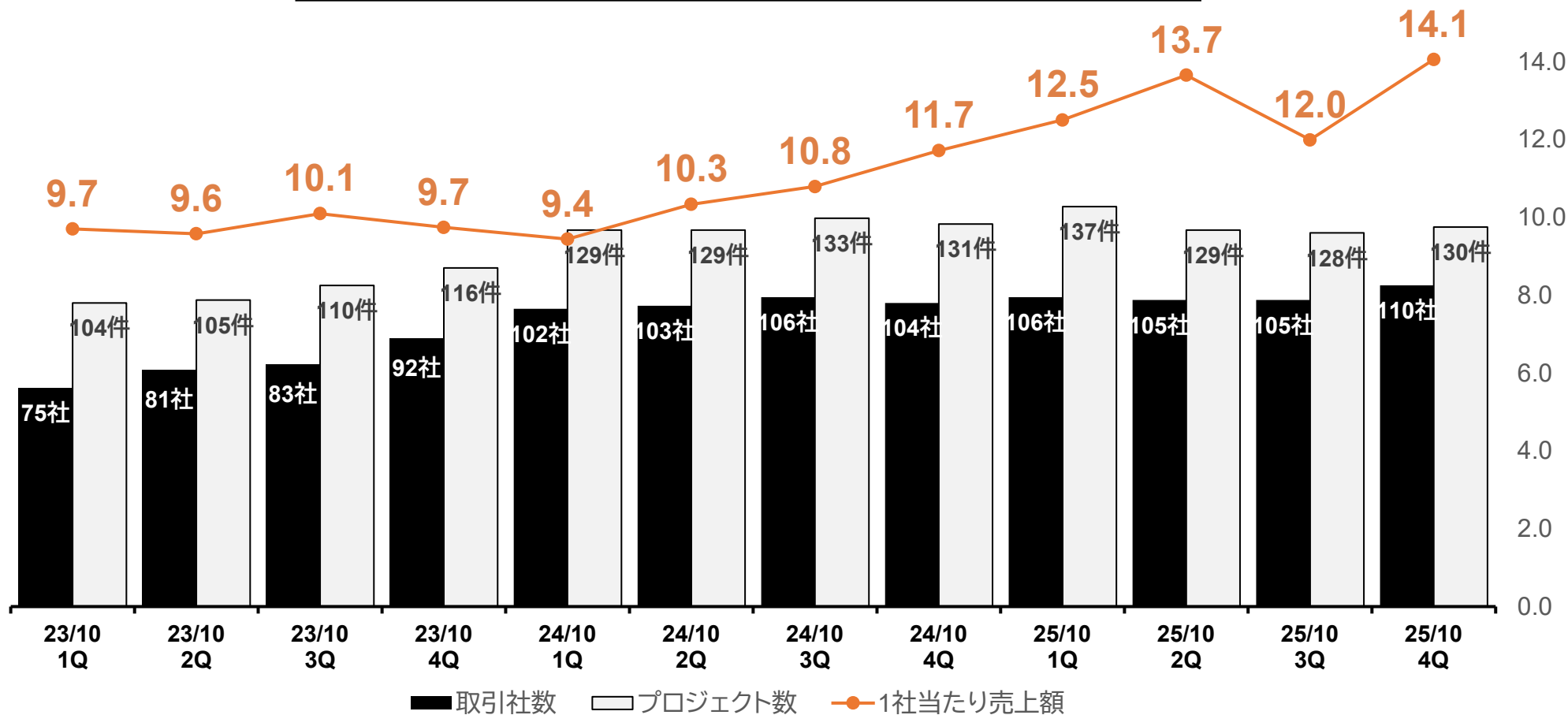
— 1社当たり売上額

+ zero

取引先社数・1社あたり売上の推移②

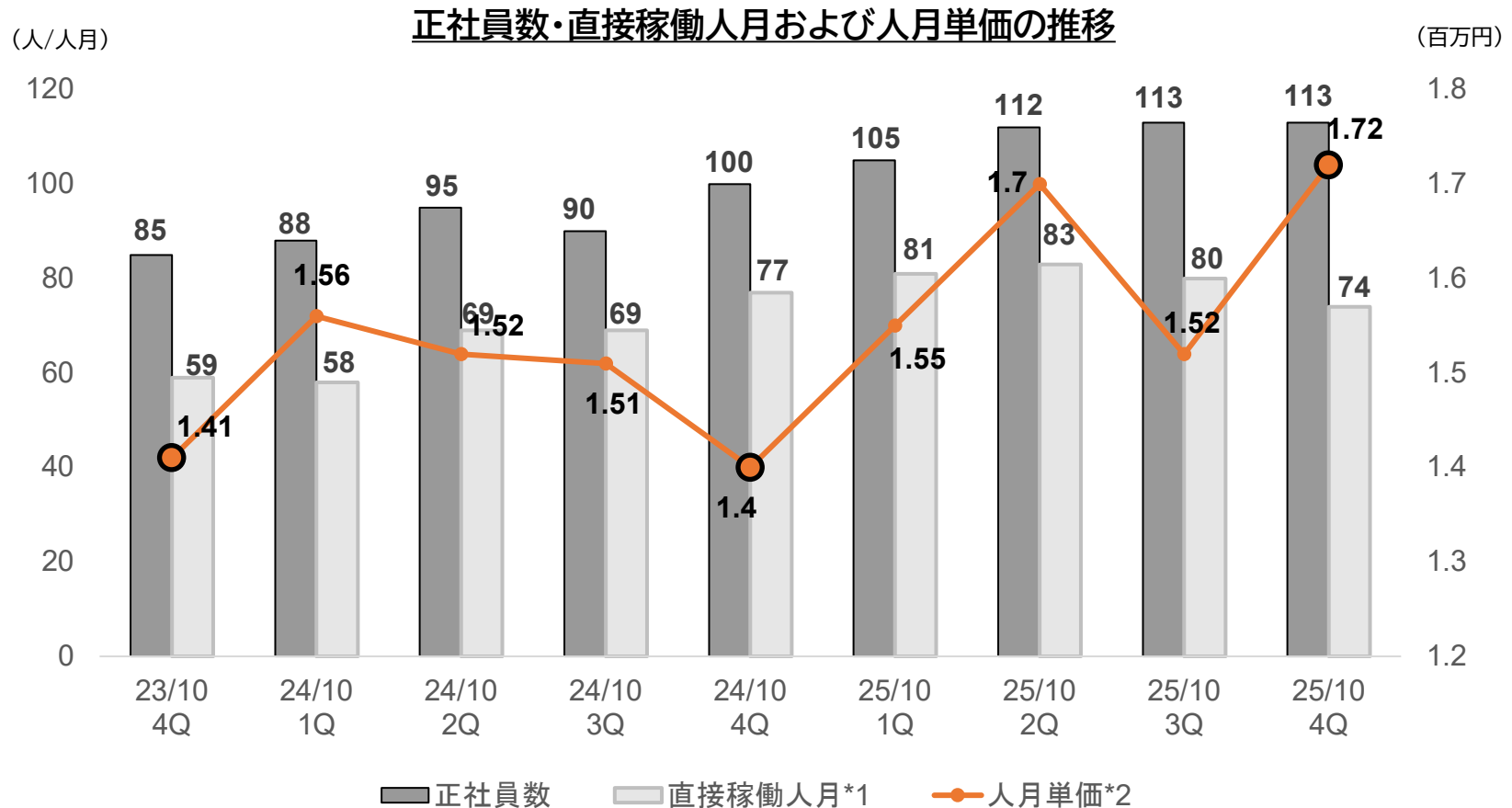
- ・「会計期間末から直近1年間」の取引社数とプロジェクト数、1社あたりの平均売上高の推移。
- ・ 1社あたり平均値は14百万円台で着地。

会計期間末から直近1年間の取引社数とプロジェクト数



正社員数・稼働人月・人月単価推移

- 正社員数は113名。
- 人月単価は170万円代まで上昇。



*1 役社員四半期直接稼働時間/3ヶ月/150hで算出

*2 四半期売上額/(直接稼働時間×3ヶ月)で算出

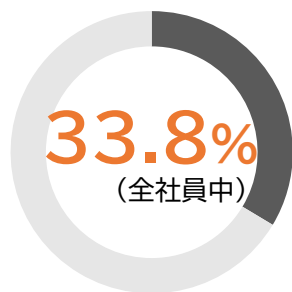
技術力が高い人材を安定的に採用・継続雇用

- ・ 技術力が高い人材が140名程度在籍。
- ・ 人材を安定的に採用・保持し続ける仕組みを確保。

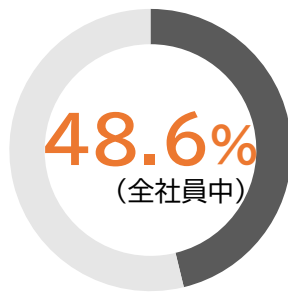
インターン含め約140名の人材プール

(2025年10月末日時点)

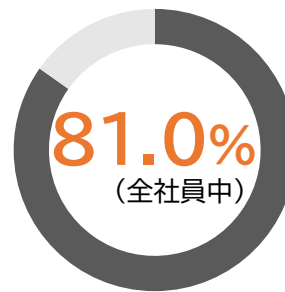
東大生/東大卒



大学院生/大学院卒



エンジニア比率



正社員数

113名
前年同期比+28名

採用手法

インターンからの採用

当社社員等からの紹介

求人媒体経由での採用

労働環境(正社員)

平均年齢

31.1才

平均残業時間

6.7h

2025年10月期通期実績に基づくKPI

各指標の位置づけ

- ①「売上高成長率」ならびに「高成長性」の水準を一定レベル以上に維持
- ②「売上総利益率」の水準を維持しながらAEIへの投資を継続することで、「AEI関連売上比率」、「サービス型売上比率」を向上させ、中長期的に「高成長性」を実現

			24/10期	25/10期 実績	25/10期 予想	概況
重要指標	売上高成長率 (前年同期比)	全社	+36%	+27%	+35%	全社として通期成長率目標は下回るものの、軟調に推移
		AEI以外のソリューション提供	+27%	+14%	+22%	
		AEI関連	+135%	+102%	+110%	
	売上総利益率		58%	58%	57%	当期目標と同水準で推移
参考指標	AEI関連売上比率		15%	24%	23%	AEI関連サービス拡充により、比率は上昇
	サービス型売上比率		3%	1.5%	結果のみ開示	初期開発割合増加によりライセンス比率は低下

2025年10月期 通期 貸借対照表

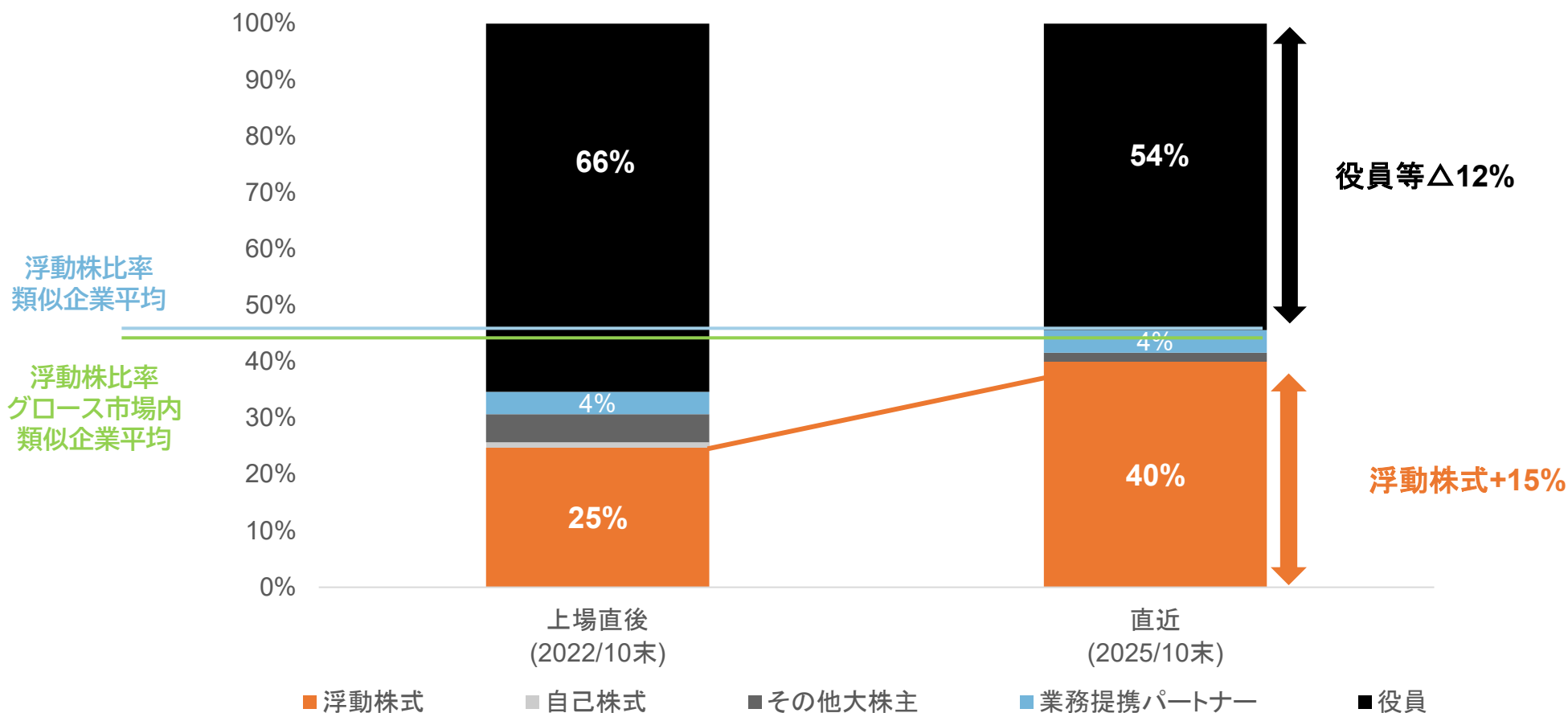
2025年10月期の期末時点で、**1,193百万円の現預金を保有**。さらに無借金経営のため、**財務基盤は強固である**。今後の主な投資としては、**①人材投資、②研究開発投資、③AEIの拡販・拡大**を想定。

(単位:百万円)

2024年10月期		2025年10月期 通期	2024年10月期		2025年10月期 通期
(資産の部)			(負債の部)		
流動資産	1,173	1,532	流動負債	287	338
現金及び預金	901	1,193	固定負債	-	-
固定資産	241	322	負債合計	287	338
有形固定資産	6	6	(純資産の部)		
無形固定資産	149	247	株主資本	1,127	1,515
投資その他の資産	85	68	資本金	25	36
資産合計	1,415	1,854	資本剰余金合計	785	795
			利益剰余金	317	683
			自己株式	△0	△0
			純資産合計	1,127	1,515
			負債純資産合計	1,415	1,854

上場後の株主構成推移

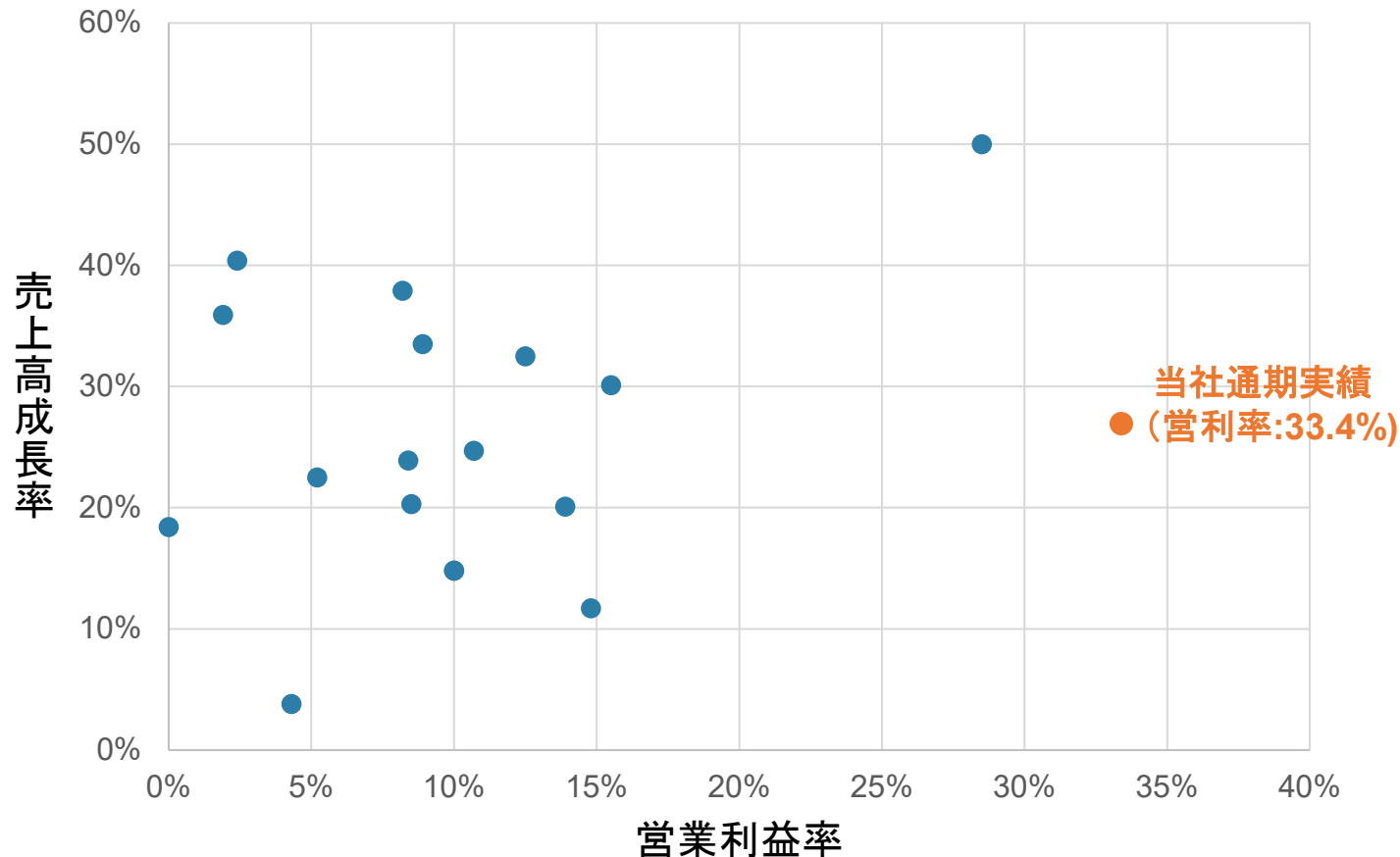
- ・ 浮動株比率は上場直後の約1.5倍に拡大。流動性の向上を通じて、**当社を投資対象とし得る投資家層の拡大に寄与。特に海外機関投資家による投資検討の可能性も見据えた対応を推進。**
- ・ 同時に、経営の継続性および安定的な事業運営を可能とする役員持株比率を確保。



(注) 類似企業は当社が事業内容に基づき選定したもの。

類似企業の営業利益率と売上高成長率

- 通期累積の実績において、類似企業※と比較して**営業利益率は最も高く、売上高成長率についても高水準**を示している。
- 今後のAEI関連サービスの拡大により、さらなる高収益・高成長を目指す。



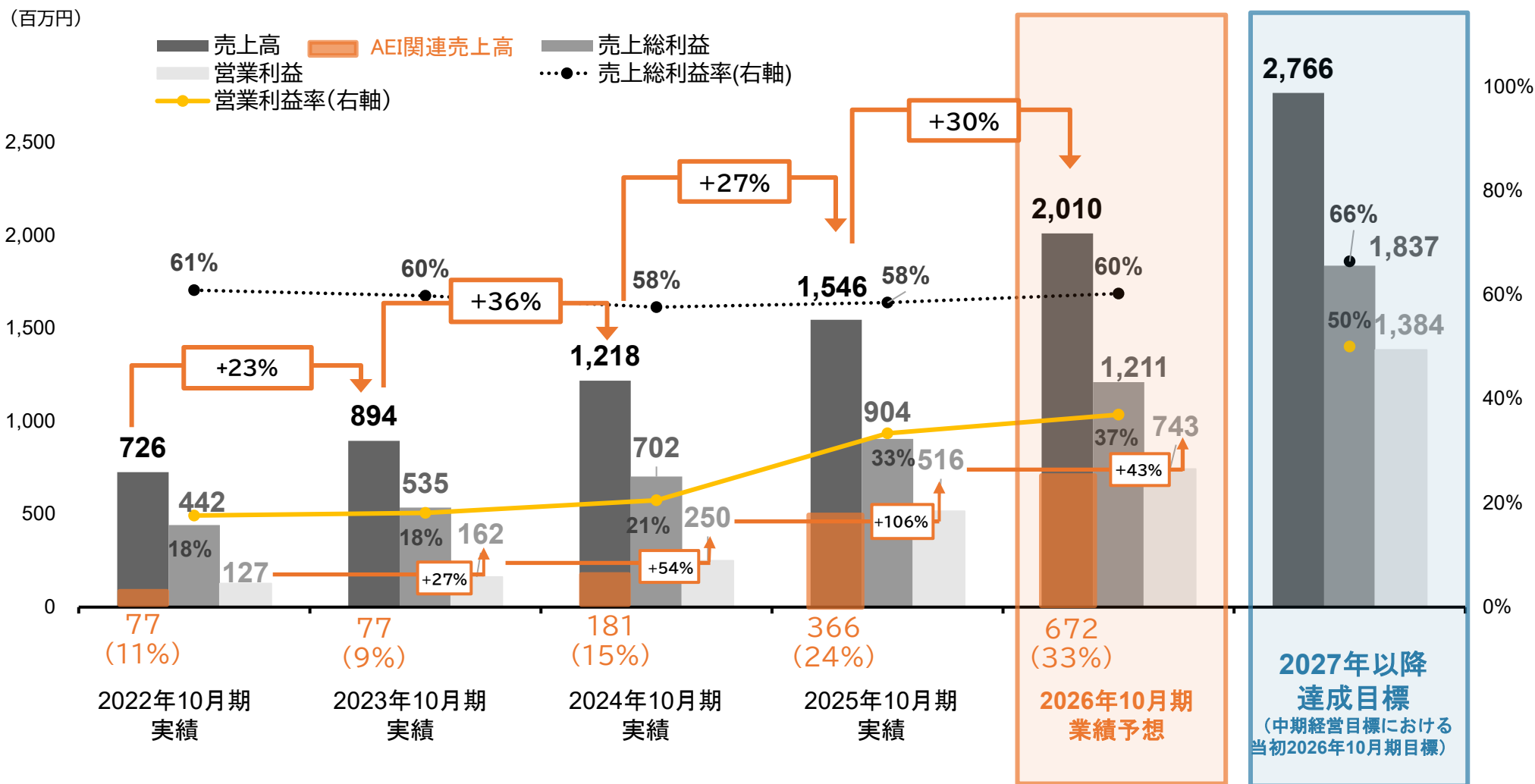
(注) 類似企業は当社が事業内容に基づき選定した企業の内、営業利益が赤字の企業を除外したもの。
営業利益率と売上高成長率は最新の発表業績予想の数字を使用。

2026年10月期 業績予想

成長戦略／業績予想

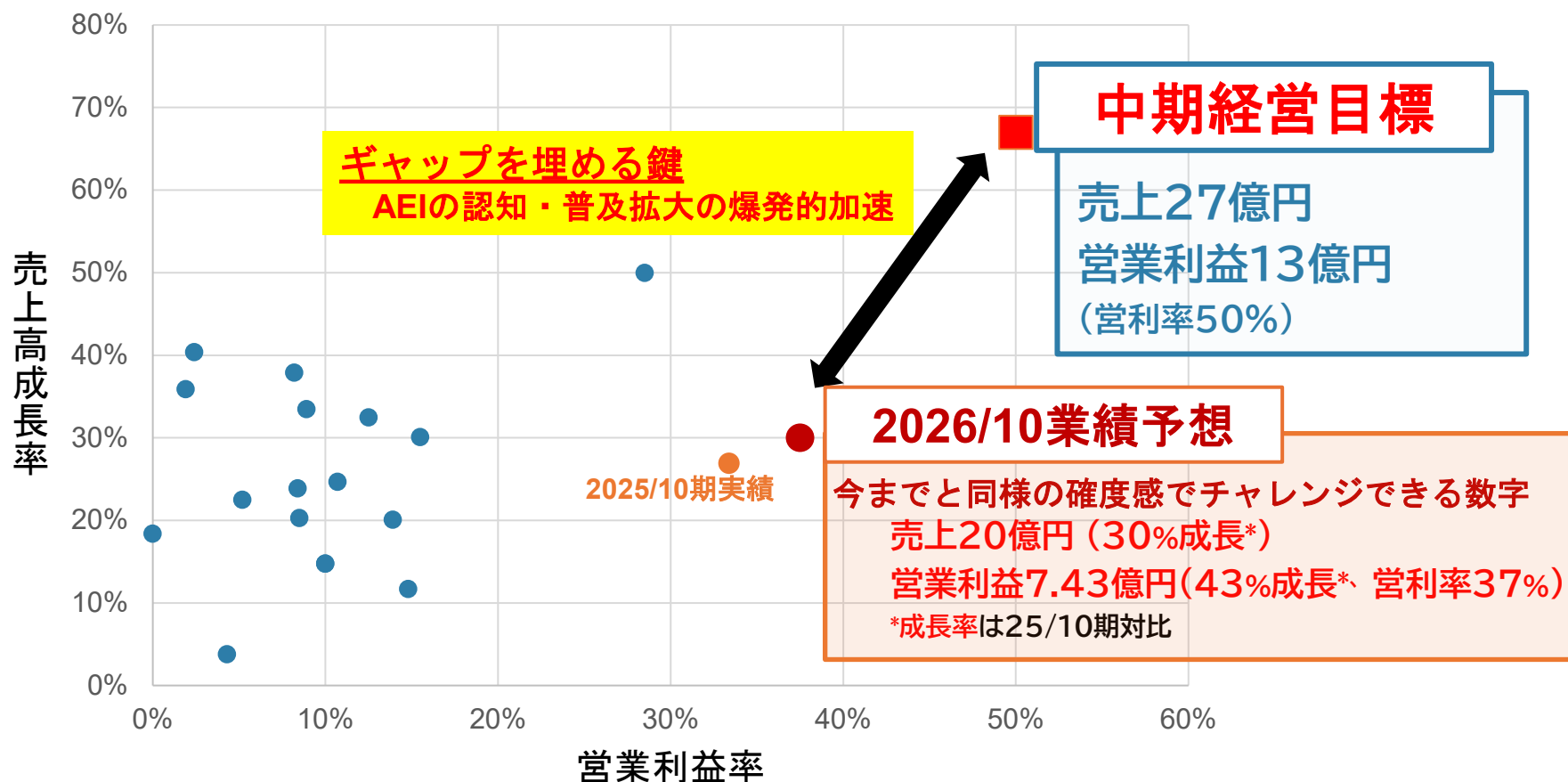
2026年10月期業績予想と当初公表の業績目標について

- 業績予想の売上成長率は30%、営業利益の成長率は43%
- 営業利益率37%、売上総利益率60%は、経年で見ても順調に成長。



中期経営目標の進捗状況概要

- 中期経営目標の最終年度であり、最後まで目標を見据えて、中長期の収益最大化を図る。
- そのために、現在、PoCの最終段階に入っている営業分野におけるAEIの本格適用のプロジェクトを成功させることに注力し、その後のAEIの認知・普及拡大の起爆剤とする。



(注) 類似企業は当社が事業内容に基づき選定した企業の内、営業利益が赤字の企業を除外したもの。
営業利益率と売上高成長率は最新の発表済業績予想の数字を使用。

2026年10月期業績予想

- 売上成長率30%、営業利益率37%(25年10月期は33.4%)が目標
- 今までと同様の確度でチャレンジできる目標設定とする。
- 売上高成長率30%(20億円)、営業利益成長率44%(7.4億円)を目指す。

(百万円)

	25/10期 実績		26/10期 業績予想				増減率	
	金額	売上比率 (%)	上期目標	上期進捗率 (%)	通期目標	通期売上比率 (%)	金額	前年増減比率 (%)
売上高	1,546	100.0	865	43.0	2,010	100.0	463	30.0
売上総利益	904	58.5	512	42.3	1,211	60.3	307	33.9
営業利益	516	33.4	260	35.0	743	37.0	227	44.0
経常利益	519	33.6	260	35.0	743	37.0	224	43.2
当期純利益	366	23.7	147	31.1	476	23.7	109	29.9

KPIの定義

「継続性」と「高成長性」を重視

- ① 既存顧客の比率を一定以上に維持しながら、「**売上高成長率**」を一定以上にし、「継続性」、「高成長性」の水準を一定レベル以上に維持
- ② 「**売上総利益率**」の水準を維持しながらAEIへの投資を継続することで、「**AEI関連売上比率**」、「**サービス型売上比率**」を向上させ、中長期的に「高成長性」を実現
- ③ 「営業利益」に関しては、額・率ともに中長期的な最大化を目標とし、短期的にはAEIへの投資計画に合わせて柔軟に対応

重要指標

売上高成長率

全期間に亘る「高成長性」の結果水準のモニタリング

売上総利益率

中長期の「高成長性」、「継続性」のための投資余力のモニタリング

参考指標

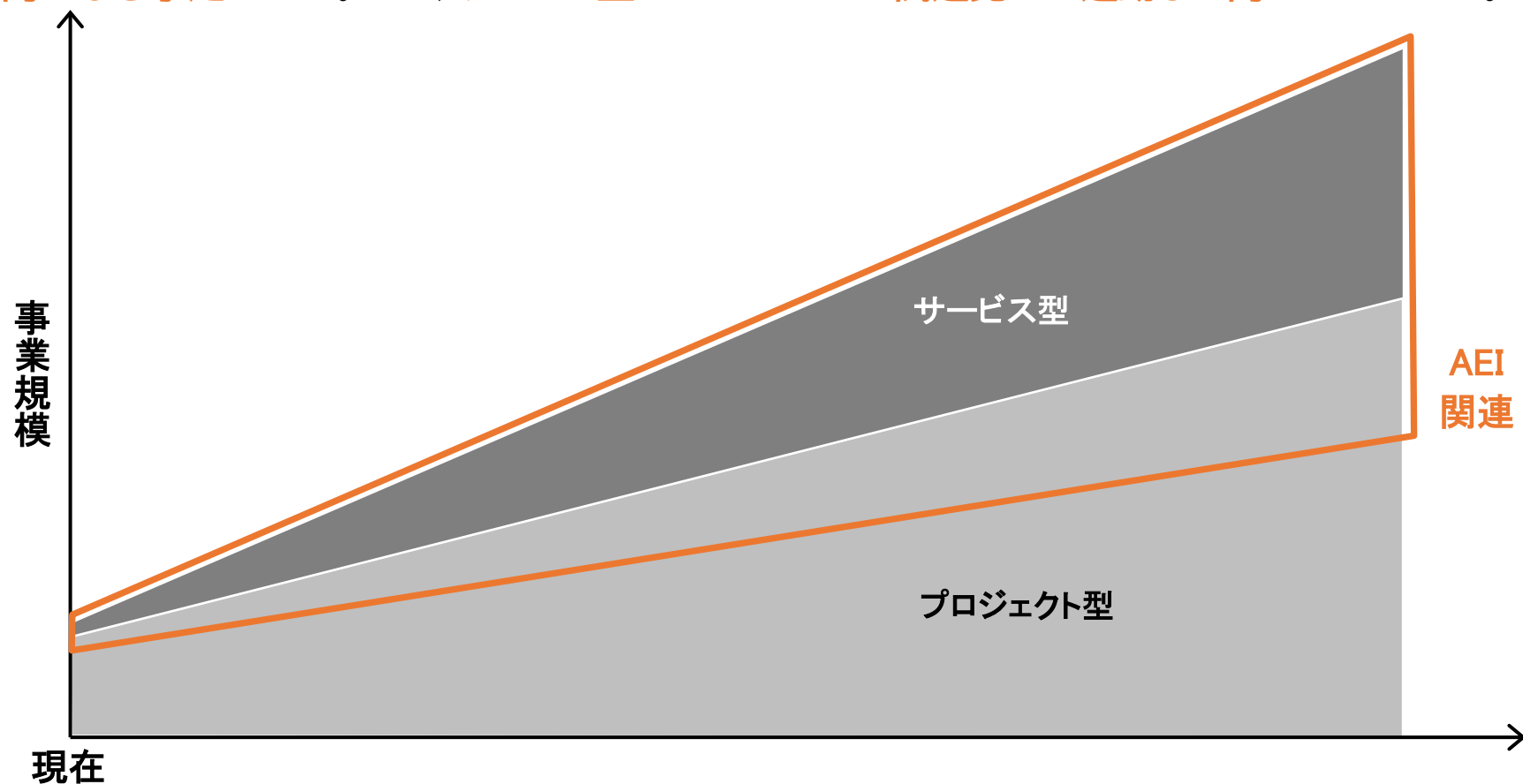
AEI関連売上比率

中長期の「高成長性」の結果水準のモニタリング

サービス型売上比率

中長期的な成長イメージ

スケーラビリティが高い仮想人材派遣などのAEI関連サービスの積極展開により、AEI関連売上高が向上。2025年10月期末時点でのAEI関連売上高は全体24%であり、今後は、更に上昇傾向になる予定である。また、サービス型についてもAEI関連売上と連動して向上させていく。



(注) 中長期的な成長イメージは、あくまで経営上の目標を示したものであり、その実現を保証するものではなく、また実現の時期を示唆するものでもありません。

2026年10月期業績予想に基づくKPI

実績と推移

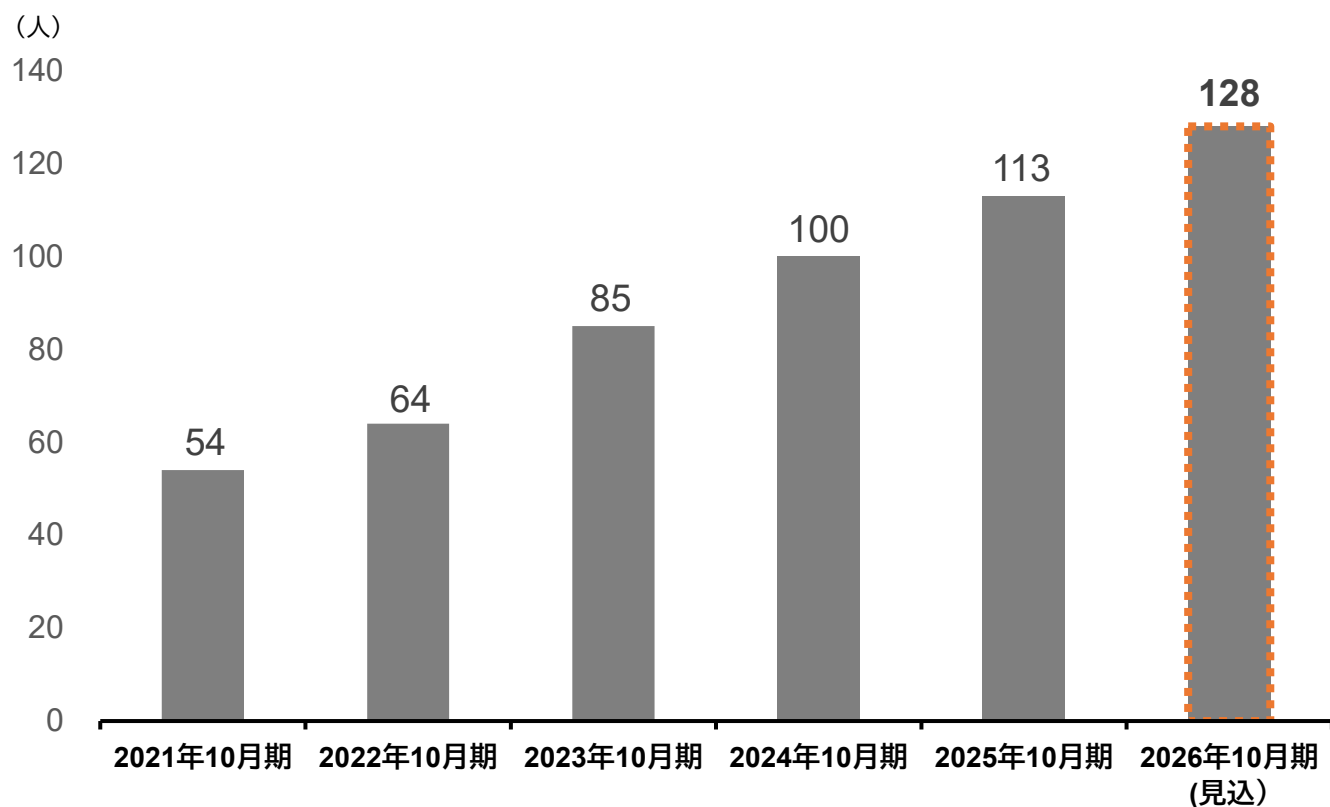
- ①既存顧客の比率を一定以上に維持しながら、「**売上高成長率**」を一定以上にし、「継続性」、「高成長性」の水準を一定レベル以上に維持
- ②「**売上総利益率**」の水準を維持しながらAEIへの投資を継続することで、「**AEI関連売上比率**」、「**サービス型売上比率**」を向上させ、中長期的に「高成長性」を実現

		22/10期	23/10期	24/10期	25/10期	26/10期予想
重要指標	売上高成長率	43%	23%	36%	27%	30%
	売上総利益率	61%	60%	58%	58%	60%
参考指標	AEI関連売上比率	11%	9%	15%	24%	33%
	サービス型売上比率	2%	3%	3%	2%	結果のみ 開示

採用見通し

- 2025年10月期末時点の社員数は**113名**。
- 2026年10月期においても社員数は**堅調に増加の見込み**。

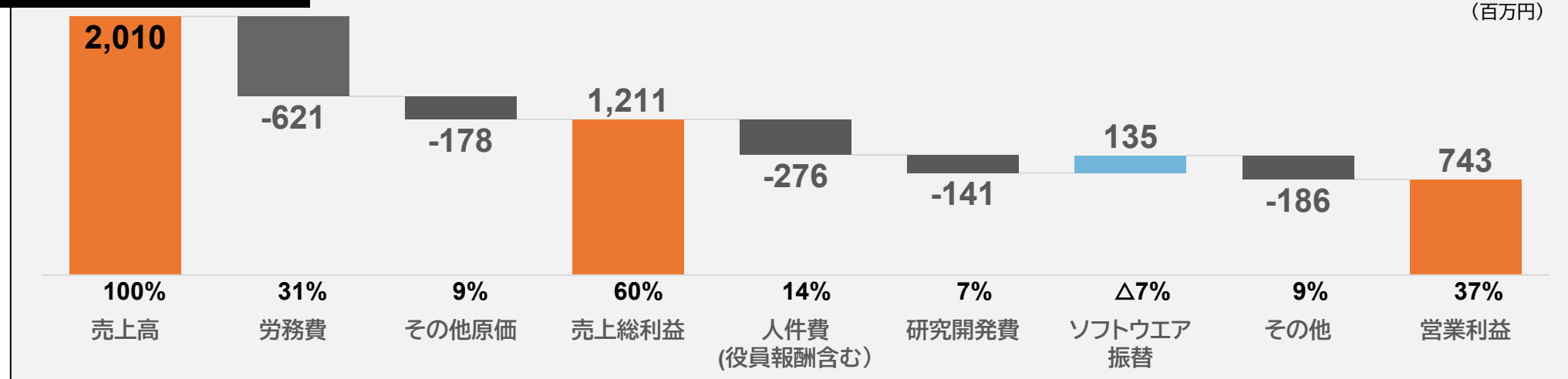
期末社員数の推移



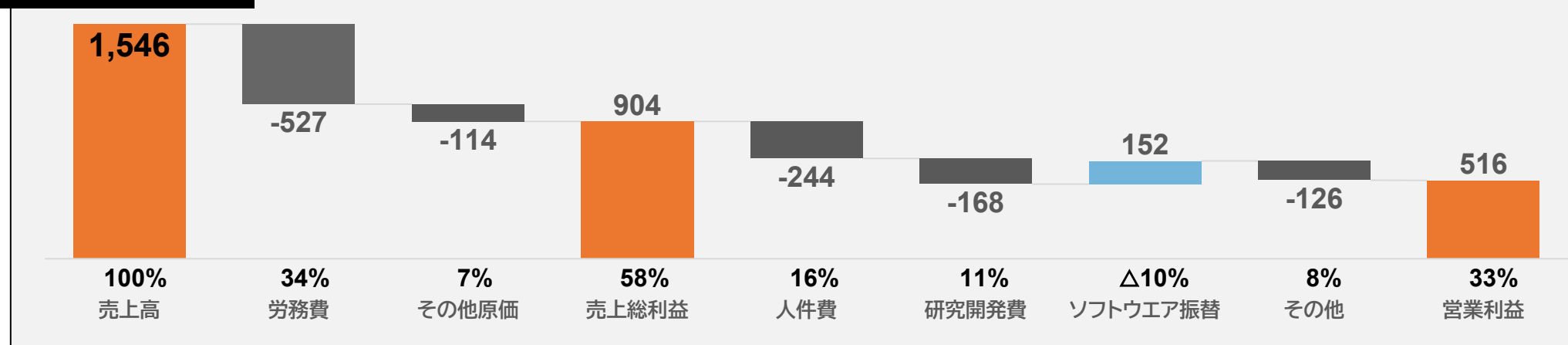
2026年10月期のコスト構造

- 研究開発内容の顧客案件化・資産化や経費の効率化で販管費を圧縮。
- 25/10期比で4ポイント高い営業利益率37%達成を目指す。

26年10月期業績予想

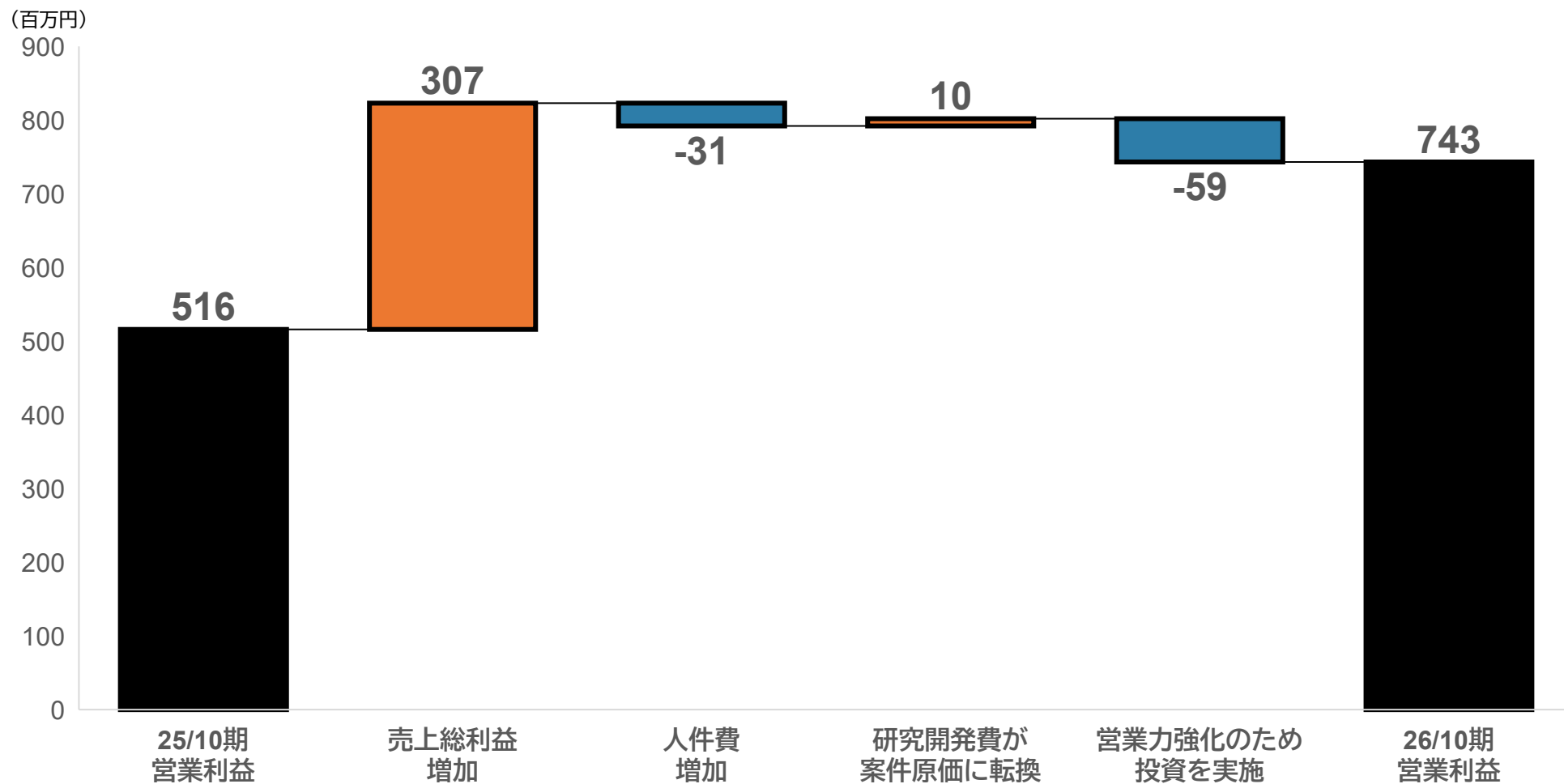


25年10月期実績



2026年10期営業利益目標と2025年10月期営業利益比較

- コストの増加は必要最小限にとどめ、高収益体質へ転換。



Appendix

①全体

エグゼクティブサマリー

会社概要

- ✓ 小代・森・永田の3トップ体制
- ✓ 東大出身者を中心とした若手主体の組織
- ✓ 「第4世代AI」であるAEI*1に注力

プロジェクト型ソリューションの特徴

- ✓ 上流から下流まで
ワンストップでソリューションを提供
- ✓ 多様なソリューションの提供により、
顧客との継続的な取引関係を構築
- ✓ 他社対比でも高い売上総利益率を実現

サービス型ソリューションの特徴

- ✓ AEIを活用したサービスを展開
- ✓ 2021年9月、AEIを活用した
「仮想人材派遣」に係る特許を取得
- ✓ 上記技術を用いた「シェパードHR」を展開
(求人広告に係る法令等の順守状況自動チェックツール)
- ✓ 「仮想人材派遣」技術を用いた新事業を
複数社と立上準備中

事業環境

- ✓ 文部科学省と経済産業省はともに、
第4世代AIが次のAIのトレンドとの見方
- ✓ 特に文部科学省系のCRDSでは、日本が
次の10年で戦うべき領域として位置づけ
- ✓ AI(及びIoT)には巨大な経済効果が
期待され、社会的にニーズが高い
- ✓ AEIは技術的難易度が高い分、
ターゲットとなるTAMも巨大

成長戦略

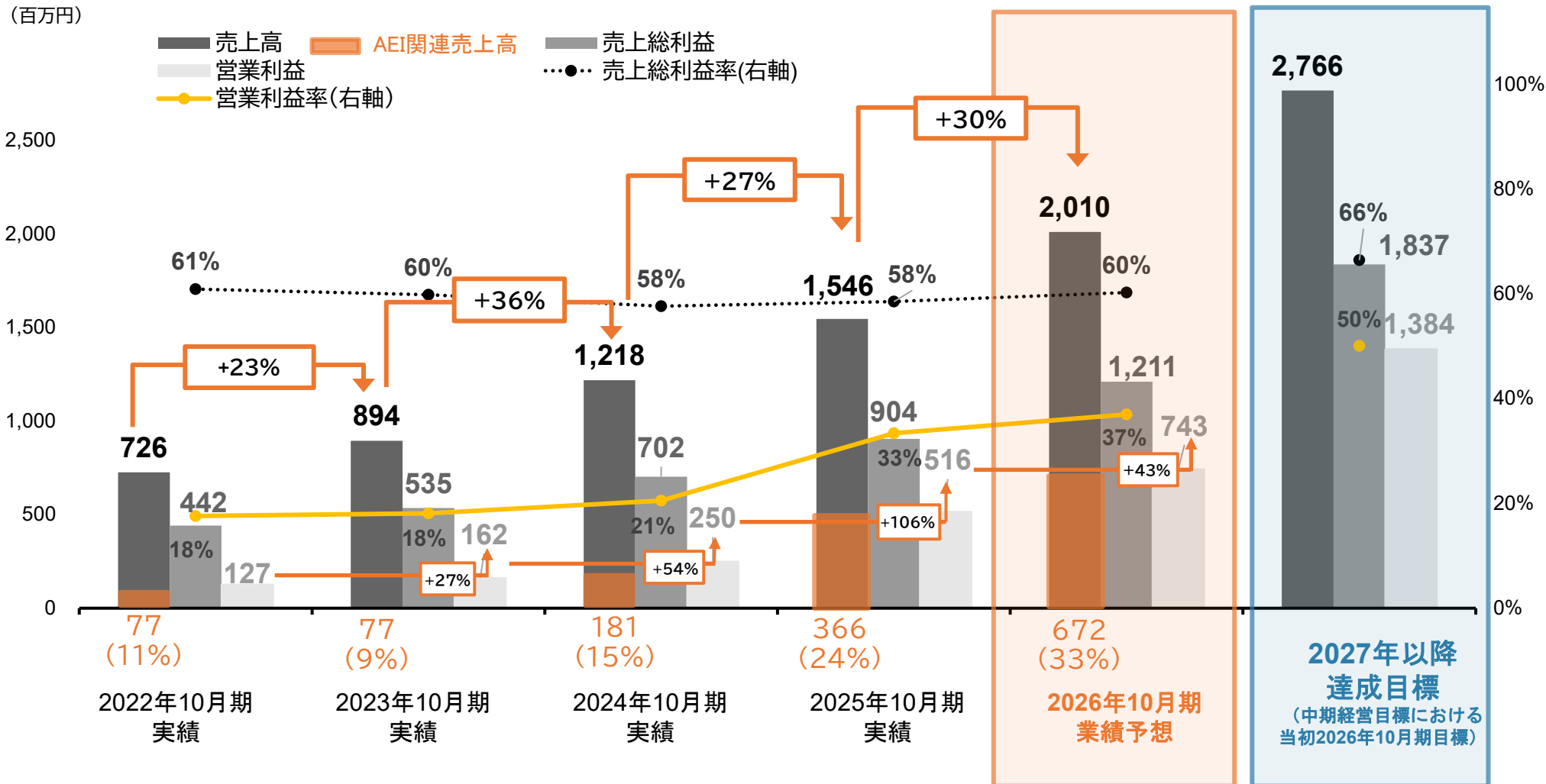
- ✓ プロジェクト型とAEIの2軸で成長を計画
- ✓ プロジェクト型は全期間通じて
一定以上の成長率の維持を目指す
- ✓ AEIでは「シェパードシリーズ」や「仮想人材
派遣」のサービスとしての確立を目指す
- ✓ 更に、AEIのSaaSやPaaSとしての提供や
OEMでの提供を目指す

*1:AEIはpluszeroの造語です。Artificial Elastic Intelligenceとして商標登録しています。

2026年10月期業績予想と当初公表の業績目標について

- 業績予想の売上成長率は30%、営業利益の成長率は43%
- 営業利益率37%、売上総利益率60%は、経年で見ても順調に成長。

(百万円)



Appendix

②会社概要

pluszeroの世界観と価値観: 知を結集して革新を起こす

世界観

少子高齢化を好機として捉えAIやロボットの導入率を世界最高水準に引き上げ、
日本の生産性を世界一にして人々の可処分時間や可処分所得を増やす

Vision

- 人の可能性を広げる
Expand the human potential.

Mission

- 知の創発により、新しい選択肢を生み出す
We are innovative, to bring new possibilities into the world.

Values

- ユニークなプロフェッショナルであれ
Be Professional and unique.

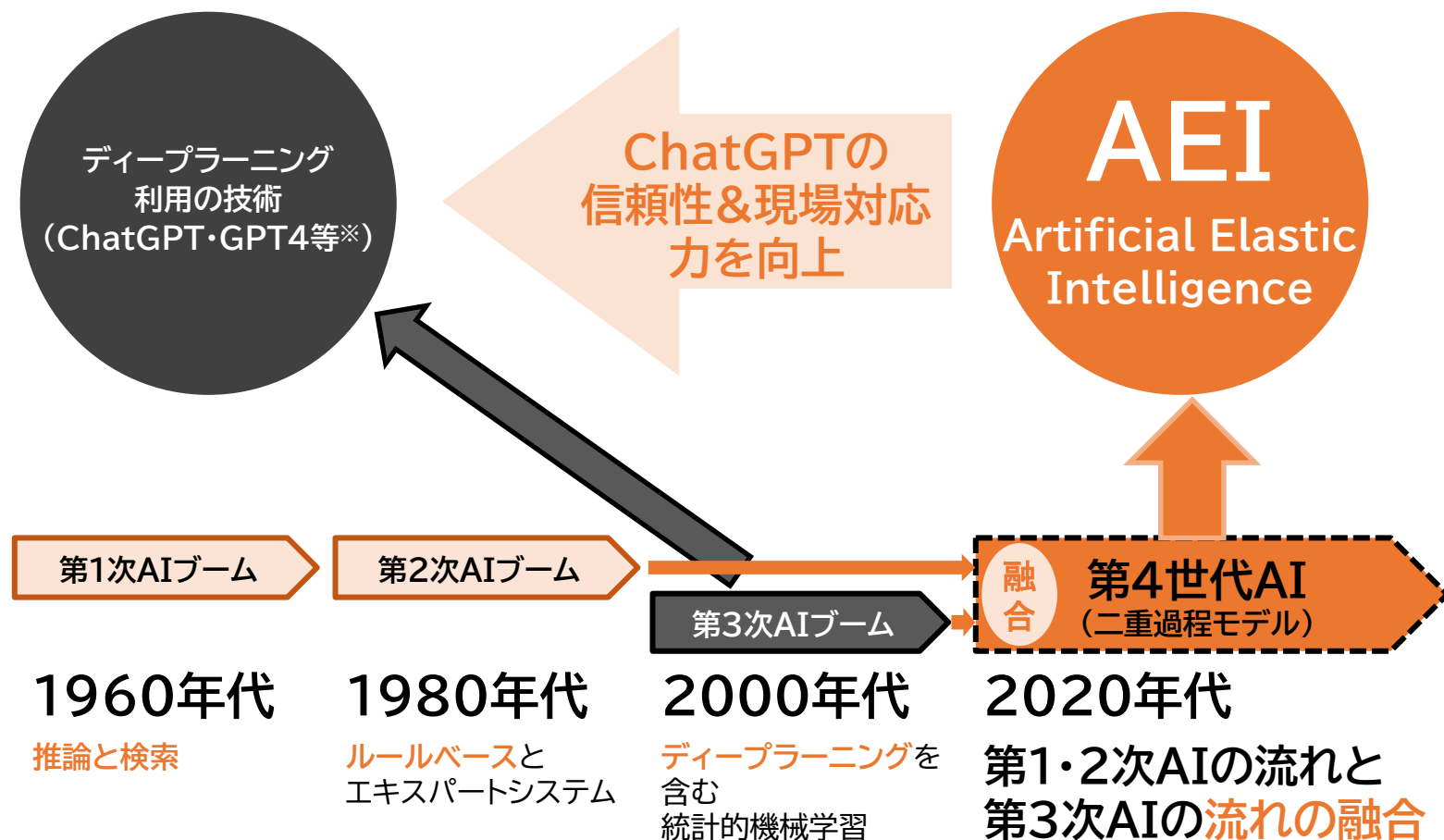
チャレンジをためらわない
Be a challenger.

クイック＆正確なレスポンス
Be quick and sharp.

夢中になれることを学ぼう
Dig into your passion.

pluszeroは「第4世代AI」カンパニー

AEIはArtificial Elastic Intelligenceの略であり、
人間のように意味を理解できる技術の開発を目指す上での実装可能な技術コンセプトである。
AEIはディープラーニングの課題を解決して、より実用的な産業適用を実現する技術である。



会社の概要

会社名	株式会社 pluszero(プラスゼロ)	
住所	〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-6-10 仙田ビル4F	
設立	2018/7/10	
資本金	35百万円	
事業内容	AI・自然言語処理・ソフトウェア・ハードウェア等の各種テクノロジーを統合的に活用したソリューション提供・開発・保守・運用および販売、ならびに受託及びそれらに付帯するコンサルティング業務	
経営陣	代表取締役会長/CEO 代表取締役社長/COO 取締役副社長/CIO 取締役CGO 取締役CFO 社外取締役 社外取締役 常勤監査役 非常勤監査役 非常勤監査役 小代 義行 森 遼太 永田 基樹 大澤 遼一 浅川 耀佑 宇陀 栄次 影山 泰仁 岡本 司 棟田 裕幸 小川 隆史	

沿革	2017年 6月	株式会社automate設立
	2018年 7月	株式会社pluszeroを株式会社automateからの新設分割により設立
	2019年 2月	株式会社アビストとの同社におけるAIソリューション事業立ち上げに関する業務提携を開始
	2019年12月	株式会社アビストと資本提携
	2020年 3月	株式会社automateを株式会社pluszeroに合併して解散
	2020年 3月	株式会社ユニプロのITソリューション事業を事業譲受により取得
	2021年 7月	「情報処理システム及び仮想人材(特許番号:第6951004号)」の特許取得
	2022年 4月	丸紅情報システムズ株式会社とネットワークオペレーションセンターの自動化に向けた業務提携を開始
	2022年10月	東京証券取引所グロース市場上場

取締役



小代 義行

代表取締役会長兼CEO

- ・ 東京大学工学部卒業
- ・ NTTDATA、Microsoft、INSPIREを経て起業
- ・ IT、AI、遺伝子医療、次世代教育など、先端技術を活かした事業立上に従事してきた連続起業家
- ・ 18年以上の経営者のキャリアを通じて30人以上の若手経営者を輩出



森 遼太

代表取締役社長COO／博士(科学)

- ・ 東京大学新領域創成科学研究科卒業
- ・ 産総研CBRCにて統計や人工知能を活用した生物情報解析に従事
- ・ 数理モデルによる能力・疾病リスク・価格の推定、画像認識等の案件を主導



永田 基樹

取締役副社長CIO／博士(情報理工学)

- ・ 東京大学情報理工学系研究科卒業
- ・ 電力系統や金融システムの安定性解析や自然言語処理、自動オークションの期待収益最大化、自動査定といった人工知能関連のプロジェクトを主導



大澤 遼一

取締役副社長CGO

- ・ 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻修士課程修了
- ・ 野村総合研究所のコンサルティング事業本部に入社し、物流会社・メカなどの戦略策定・実行支援プロジェクトに参加
- ・ 経営コンサルとしての知見を活かし、営業担当の取締役に就任



浅川 耀佑

取締役CFO

- ・ 東京大学工学部社会基盤学科卒業
- ・ 在学中から複数プロジェクトでプロジェクトマネージャーを経験
- ・ また、公認会計士試験短答式試験に在学中に合格
- ・ 技術・事業に対する理解と会計的知見を活かし、当社CFOに就任



宇陀 栄次

社外取締役

- ・ 日本IBM理事、ソフトバンクコマース代表取締役社長、EVP, Salesforce.com Inc 兼 日本法人代表取締役社長 CEO、それぞれの会社で世界最大のビジネスを実現
- ・ (現在)ユニファイド・サービス社 創業者、会長CEO、YEXT 日本法人代表取締役会長 他 複数社の社外取締役



影山 泰仁

社外取締役

- ・ 早稲田大学理工学部卒業後、外資系及び日系コンサルティング会社にてIT・経営・業務・リスク管理のコンサルティングに従事。また、外資系銀行のバックオフィスの責任者や日系IT会社の営業・ソリューション本部での統括等を歴任

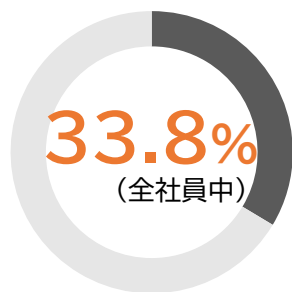
技術力が高い人材を安定的に採用・継続雇用

- ・ 技術力が高い人材が140名程度在籍。
- ・ 人材を安定的に採用・保持し続ける仕組みを確保。

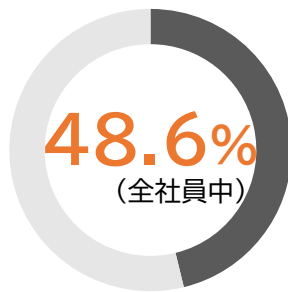
インターン含め約140名の人材プール

(2025年10月末日時点)

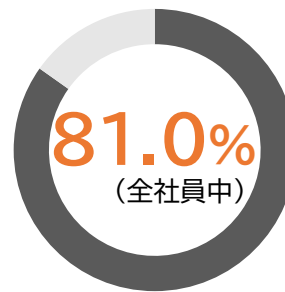
東大生/東大卒



大学院生/大学院卒



エンジニア比率



正社員数

113名
前年同期比+28名

採用手法

インターンからの採用

当社社員等からの紹介

求人媒体経由での採用

労働環境(正社員)

平均年齢

31.1才

平均残業時間

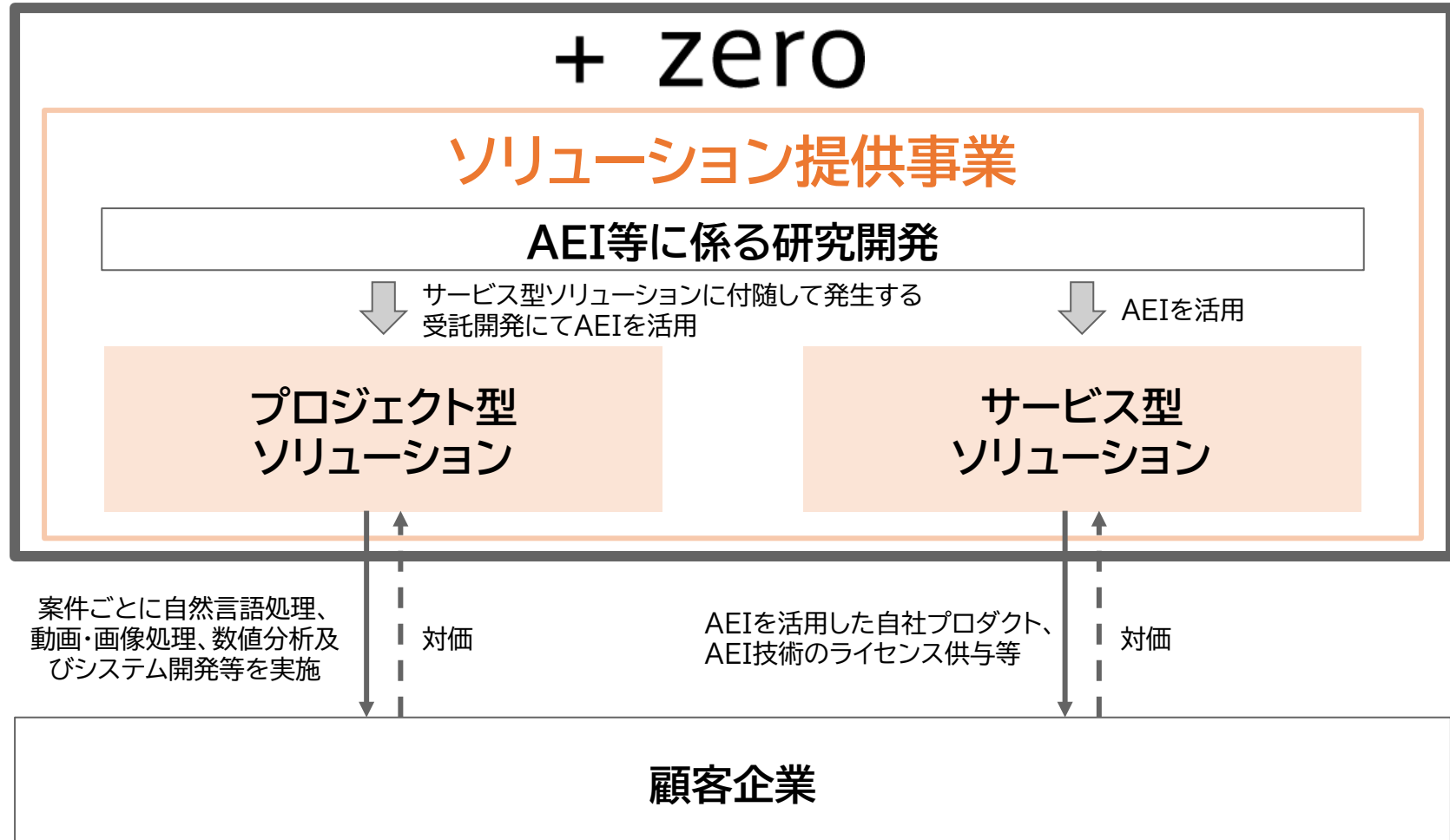
6.7h

Appendix

③事業概要

ソリューション提供事業の単一セグメントの会社

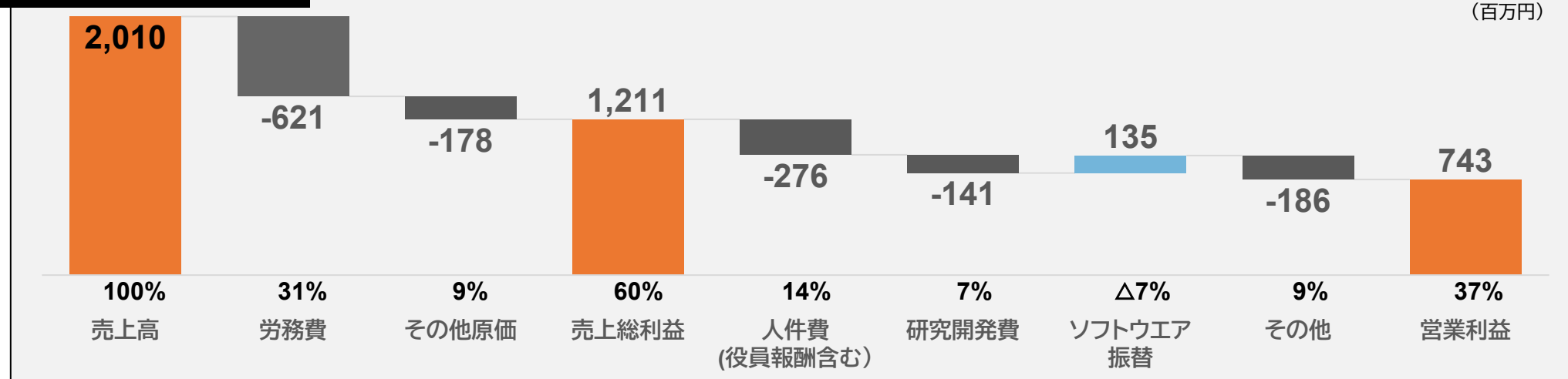
AI/ITソリューションを提供する「ソリューション提供事業」の単一セグメントで事業を展開。ソリューションの提供形態に応じて大きく「プロジェクト型」と「サービス型」の二つに大別される。プロジェクト型は業務提携中の顧客に対してAEIを利用し、サービス型はAEIを全面的に利用している。



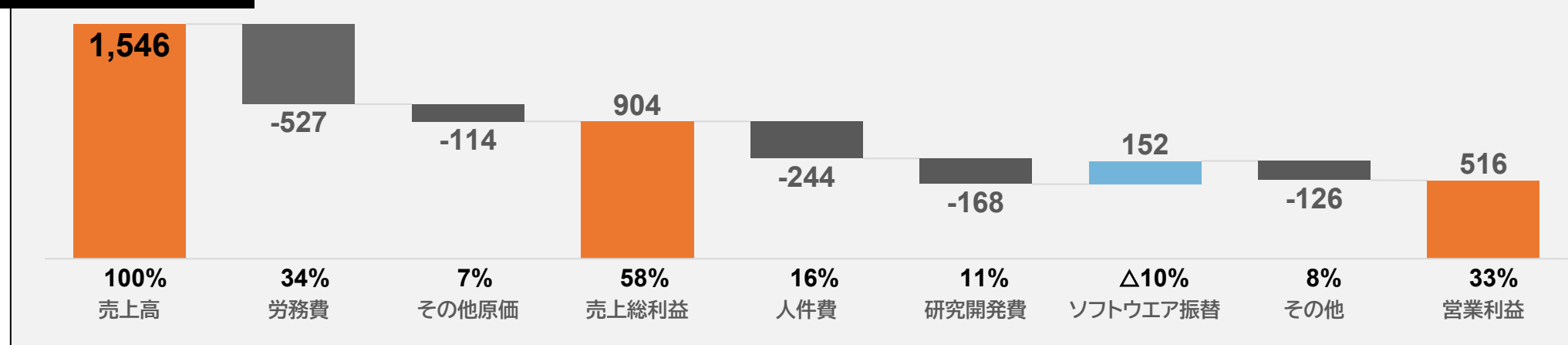
2026年10月期のコスト構造

- 研究開発内容の顧客案件化・資産化や経費の効率化で販管費を圧縮。
- 25/10期比で4ポイント高い営業利益率37%達成を目指す。

26年10月期業績予想



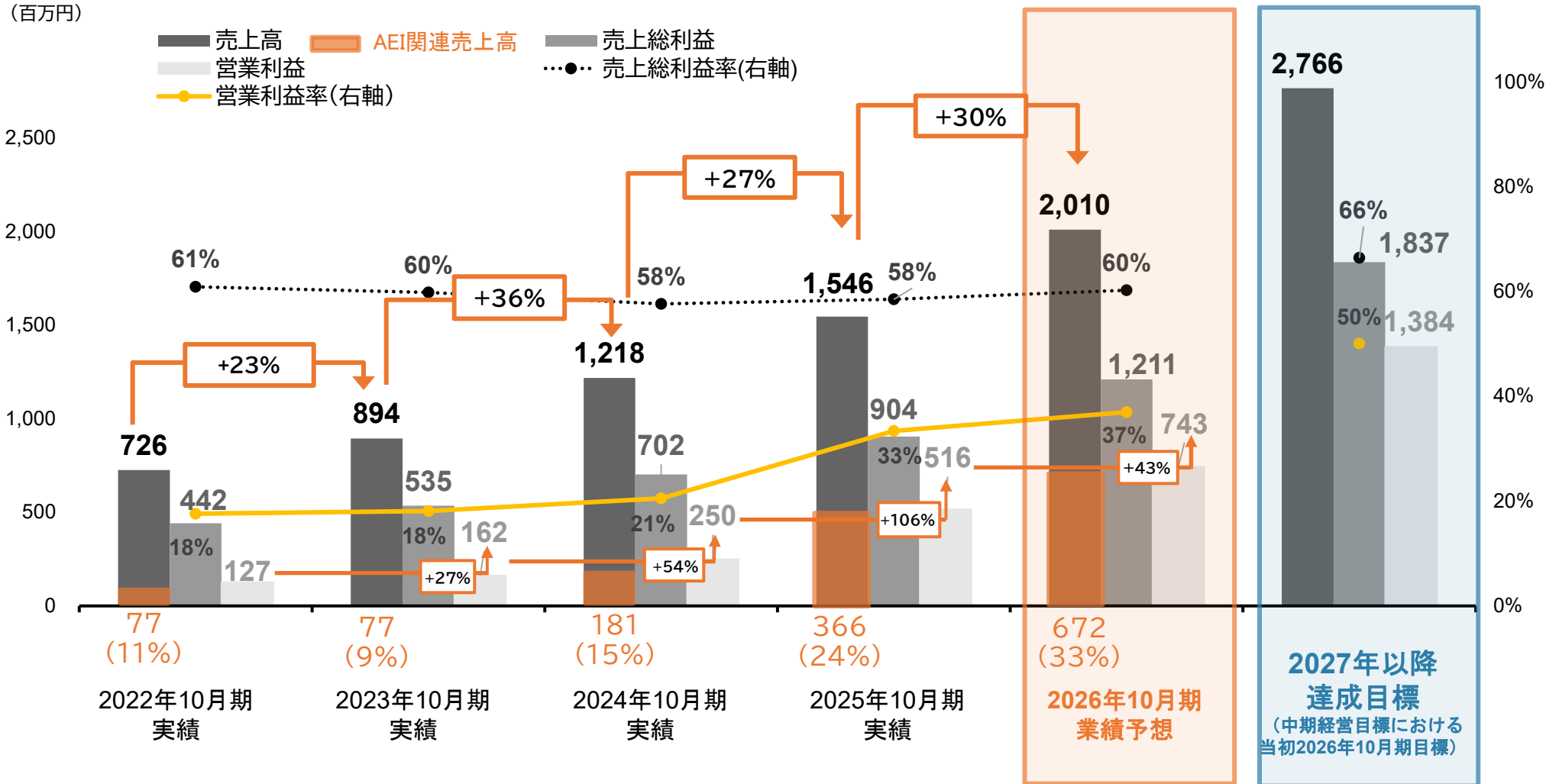
25年10月期実績



2026年10月期業績予想と当初公表の業績目標について

- 業績予想の売上成長率は30%、営業利益の成長率は43%
- 営業利益率37%、売上総利益率60%は、経年で見ても順調に成長。

(百万円)



プロジェクト型の事業の概要

プロジェクト型は、**請負契約・準委任契約により案件単位でAIやITに関連したソリューションを提供**。
また、仮想人材派遣の導入パートナーにAEIを活用したソリューションを提供している。プロジェクト型の**特長は人材基盤に基づいて上流から下流までをワンストップで提供できること**である。

プロジェクト型

✓ 顧客ニーズ・案件に応じて
AI関連ソリューションを提供

提供技術・ソリューション例

自然言語処理



画像・動画処理



KPI 最適化



価値分析・予測



pluszero

上流から下流までワンストップで提供可能

学生時代から役員経験を持つ役員及び部長陣の存在
AIとシステム開発の両方の技術に習熟しているエンジニア

特長

AEI

サービス型ソリューションに付随して
発生する受託開発にてAEIを活用

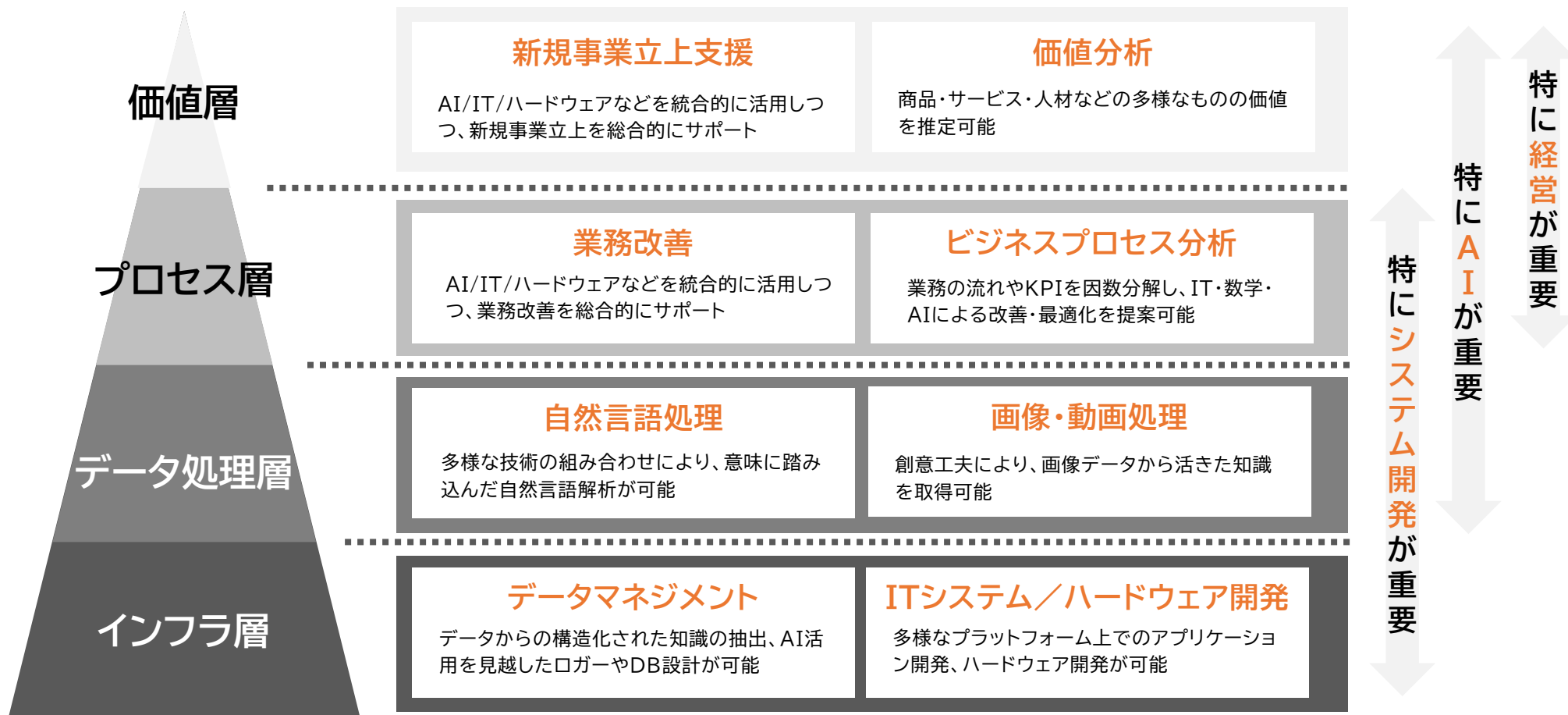
モデル
収益

請負契約: 成果物に応じた見積価格
準委任契約: 人・月単価×期間

*2022年10月時点

プロジェクト型の特徴:幅広い顧客に多様なソリューションを提供

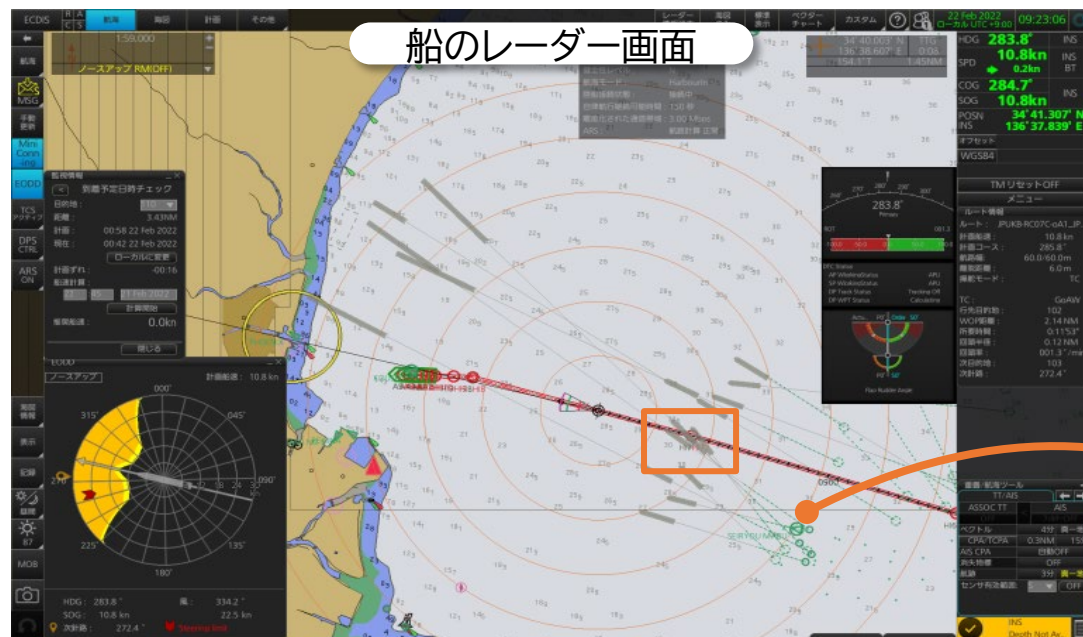
当社はAIのみに留まらず、経営・システム開発を含めた幅広い知見・技術を有しており、顧客ビジネスに対してインフラから事業立上まで多様なソリューションを提供可能。様々な分野の顧客とAI・システム開発を用いた新規事業創出や業務効率化を実施。



事例紹介:無人船の自動航行に向けたプロジェクト

古野電気株式会社と取り組む船の自動航行に向けたAI開発では、開発したアルゴリズムを船に搭載して実験した結果、高い精度で偽像検出を実施できていることが確認できた。

- 顧客: 古野電気株式会社^{*1}
- 開発内容: 船の自律航行に向けた、レーダー偽像^{*2}の検出アルゴリズム
- 意義: 偽像を避けるための無駄な避航操船を抑え、人が乗船しているときと同程度に効率的な航行が可能に



	目標値	試験結果 ^{*3}
検出率	95%以上	96%
誤検出率	2%以下	1.6%

^{*3}: 洋上試験後の検証結果となります。

開発したアルゴリズムを船に搭載して実験した結果、目標値を上回る精度で偽像検出を実施できていることが確認できた

破線円が偽像と判定され、
避航対象から外れている



^{*1}: (公財)日本財団が進める「無人運航船の実証実験にかかる技術開発共同プログラム」に参画する DFFAS(Designing the Future of Full Autonomous Ship)コンソーシアムの一環として、古野電気株式会社と当社がDFFASコンソーシアムに参加

^{*2}: 多重反射等によって生じる偽物のエコー

事例紹介:アダプティブ・ラーニング事業の立ち上げ

株式会社新興出版社啓林館とともに、教科書にリンクしたデジタル教材「AIチューターゼロ」を開発。
生徒が苦手を克服できるようAIによりサポート。（2022年3月29日プレスリリースより）

デジタル教材の概要

生徒は通常通り問題集(紙媒体)を解き、その結果をアプリで撮影することで、**AIが生徒の状況に合った問題を提案**します。その問題を解くことで、生徒が苦手を克服することをサポートするアプリとなっています。

利用するAI

AIチューターゼロには**文字認識、問題分析、レコメンド**の3つのAIエンジンを採用しております。



AI-1 文字認識

撮影した問題集にあるページ番号等の情報や、生徒が書いたチェックを、先端技術「ディープラーニング」を用いたAIで自動認識します。

AI-2 問題分析

それぞれの問題に含まれる「間違いの原因」の要素を、多くの先生のノウハウを基にしたAIで洗い出します。

AI-3 レコメンド

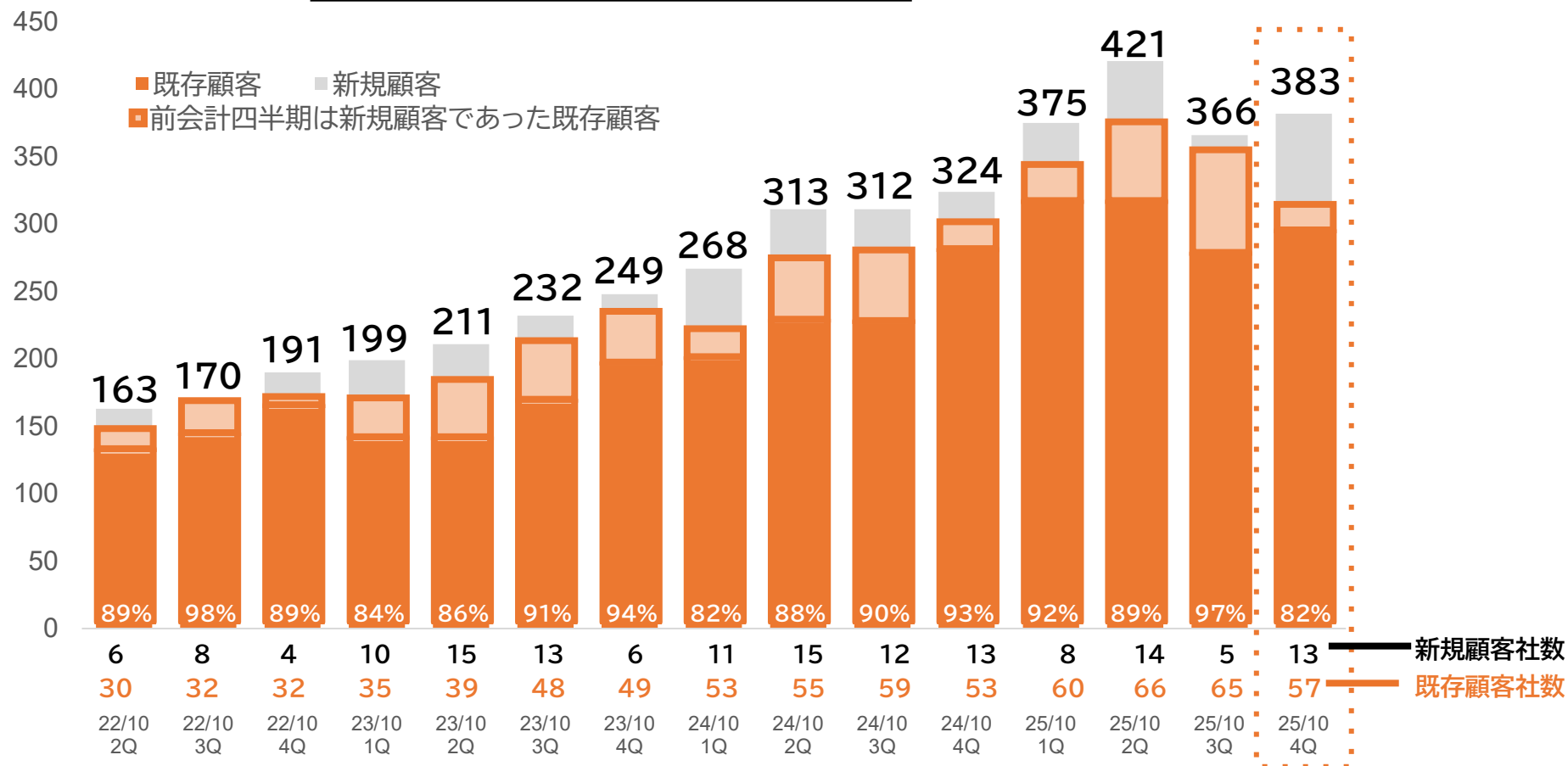
生徒が問題集で間違えた問題の要素や過去の学習履歴を基に、複数の問題集(数学I+Aをご採用の場合、中学数学の問題集を含む約5,000題)から、最適と推定される問題のみをAIが厳選し、提案します。

多様なソリューション提供による収益の継続的成長

- 「既存顧客」を直近四半期会計期間までに売上を計上している顧客として定義。
- 当会計年度の新規顧客が既存顧客として定着したことで既存顧客への売上は安定的に推移。

(百万円)

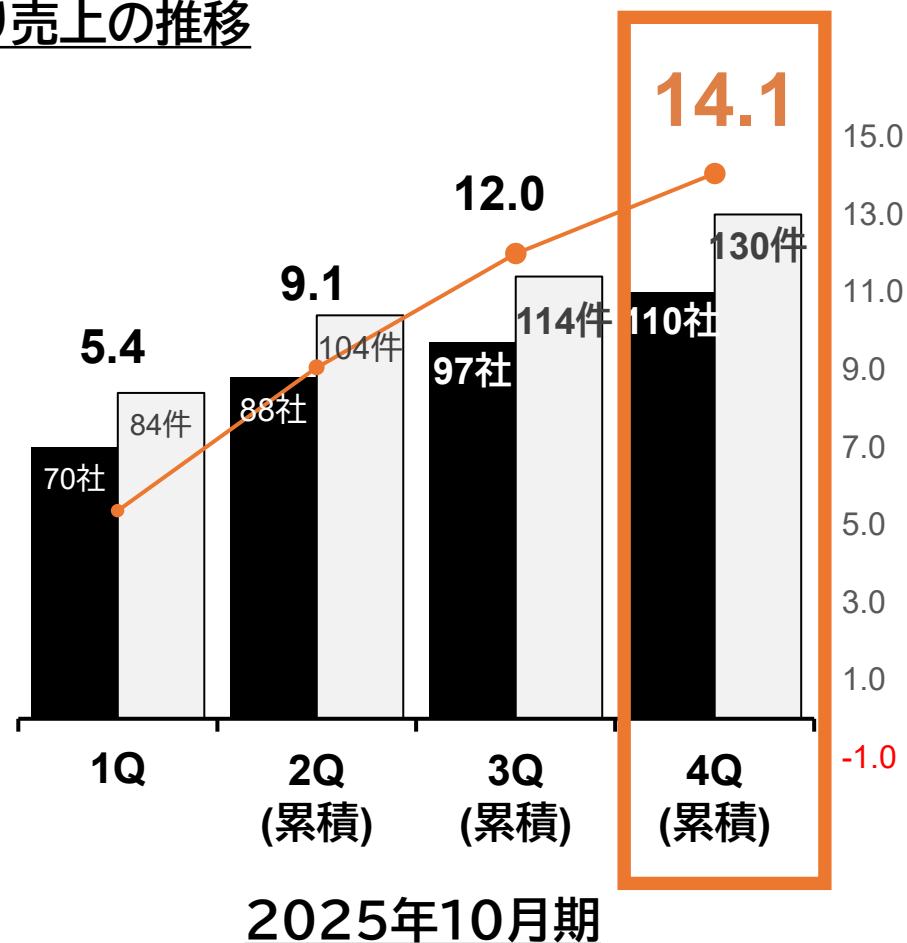
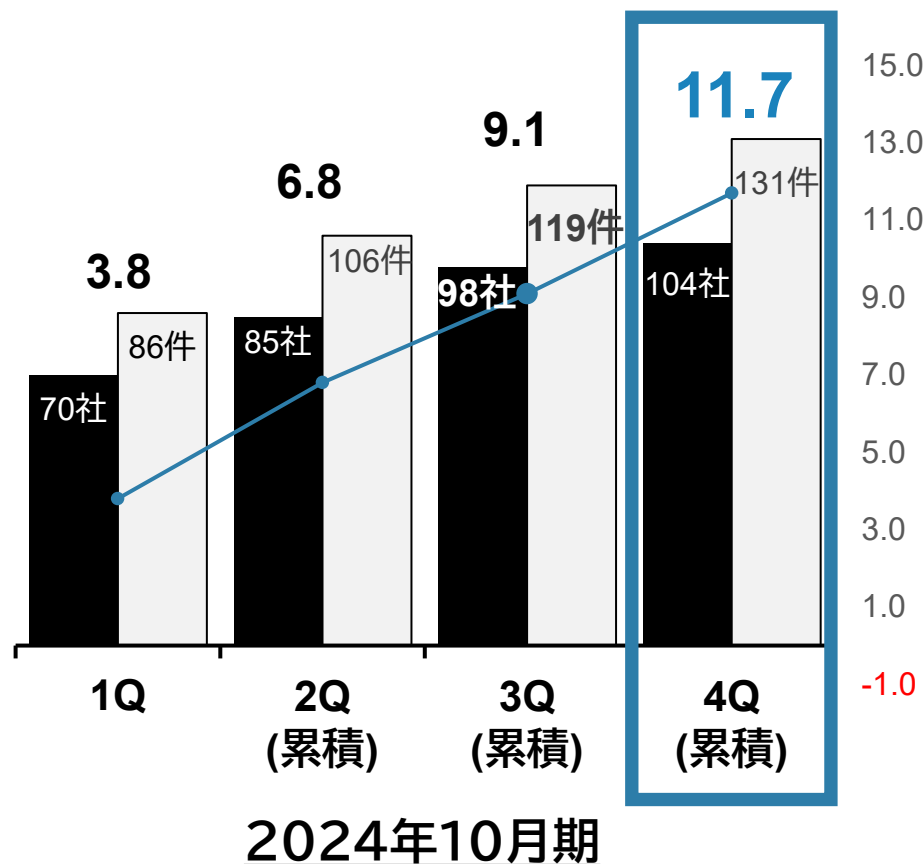
全社売上に占める既存顧客への売上の割合



取引先社数・1社当たり売上の推移

- 取引先社数、案件数は共に前年と同水準で推移。
- 1社当たり売上は前年同期から20%向上し推移。

取引社数と1社当たり売上の推移



■ 取引社数

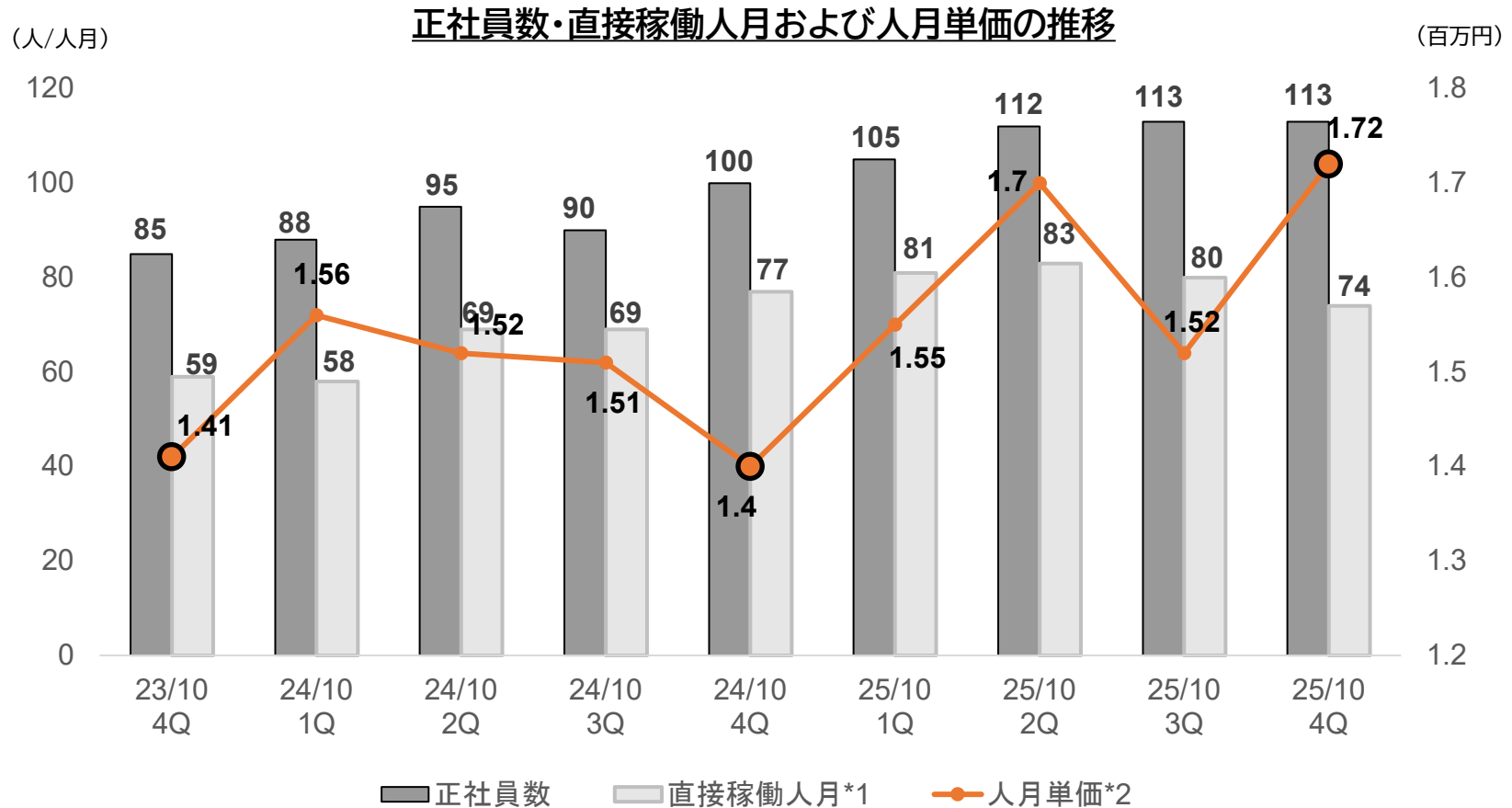
□ プロジェクト数

— 1社当たり売上額

+ zero

正社員数・稼働人月・人月単価推移

- 正社員数は113名。
- 人月単価は170万円代まで上昇。



*1 役社員四半期直接稼働時間/3ヶ月/150hで算出

*2 四半期売上額/(直接稼働時間×3ヶ月)で算出

サービス型の事業概要

サービス型は、**AEI技術を活用した自社プロダクトである仮想人材派遣**や、**AEIに関する要素技術のライセンス供与**によるソリューションを提供。

サービス型

仮想人材派遣(業務提携先と事業立上中)

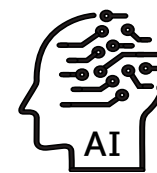
- ✓ 「仮想人材」とは「ユーザーから見て人間が対応しているように感じる対話システム」
- ✓ 特定のジャンル(限定された業界・業務範囲)において、仮想人材が意味を理解し回答することが可能
- ✓ 電話、メール、チャット等の形式で、仮想人材によるサービスを提供



問合せ者

特定ジャンル内
では全て対応

(電話、メール、チャット等)



仮想人材

概要

AEI

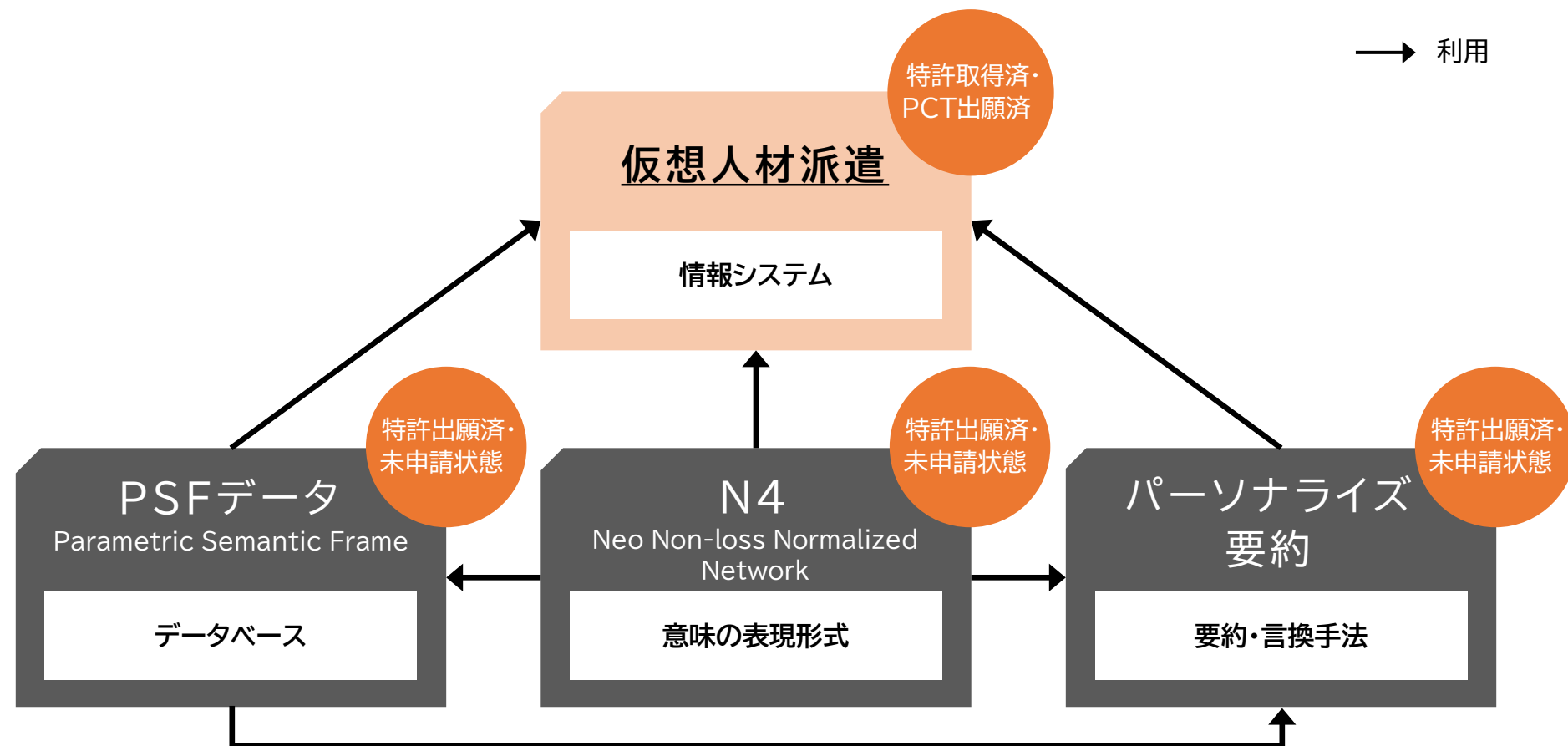
AEIを活用

モデル
収益

定額課金＋業績連動従量課金を想定
開発中も収益[開発and利用ライセンス課金、初期構築費用負担]が発生

AEIの知的財産戦略

3つの中核技術(N4、PSFデータ、パーソナライズ要約)を活かした**仮想人材派遣**についての特許を取得済。中核技術の個別特許については、今後、**分割出願・申請**により取得予定。^{*1}米国・EU・中国へ特許を国際展開する計画(PCT出願済)。^{*2}



*1: 出願済のものを申請するタイミングは戦略的に決定する予定

*2: 各国・地域へ国内移行するタイミングは戦略的に決定する予定

当社のAEIテクノロジーとビジネスへの活用

N4は、グラフ構造により意味を表現する形式。N4で表現した情報のデータベース(**PSFデータ**)を活用することで、相手に合わせた言い換えや要約が可能(**パーソナライズ要約**)。更に、特定ジャンルに限定して人間のような対話を通してユーザーにサービスを提供可能な**仮想人材派遣**を開発。

仮想人材派遣

情報システム

- ✓ (汎用AIではなく)特定ジャンルに限定し、
- ✓ 対話形式でユーザーにサービスを提供することが可能な情報システム

パーソナライズ要約

要約・言換手法

- ✓ N4で表現された情報を集約したPSFデータを用いると、様々な文章表現は、意味の欠落を抑えながら抽象的なパラメータ表現に変換可能
- ✓ そして、それと対象となる対話の相手が利用可能な語彙の情報があると、相手に合わせた言い換えや要約が可能

PSFデータ

Parametric Semantic Frame

データベース

- ✓ 知識・経験・個性など知性に関する情報を、
- ✓ N4の形で表現し、集計・集約したデータベース

N4

Neo Non-loss Normalized Network

意味の表現形式

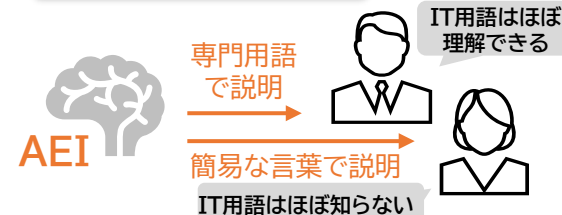
- ✓ 同義同形(同じ意味であれば、可能な限り同じ形)、
- ✓ マルチモーダル対応(文字・画像・音等の複数種の情報を統一的に表現)、
- ✓ 高解像度(細やかな意味表現)、
- ✓ 低欠落(情報処理の過程で意味が欠落しにくい)の
- ✓ グラフ構造に基づいた意味の表現形式

テクノロジーを活用

パーソナライズ要約等による
TEL/チャット等の対人対応

PSFデータにより
仮想人材を生成

顧客企業の業務マニュアルや
求める人材像をN4で表現

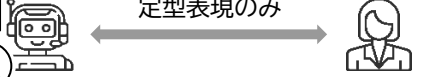
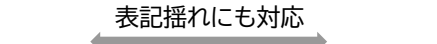
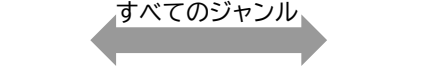


集計・集約



仮想人材派遣:コミュニケーションの自動化レベルと業務への利用

従来のボットとは異なり、当社のAEIによる仮想人材派遣は、**特定のジャンルにおいて、仮想人材が意味を理解した上で第三者へ伝達する能力が高まる**。コールセンターや保守・メンテナンス、マニュアル/学習支援等の**限定された業界・業務範囲で一定のアウトプットが求められる業務への導入**を想定。

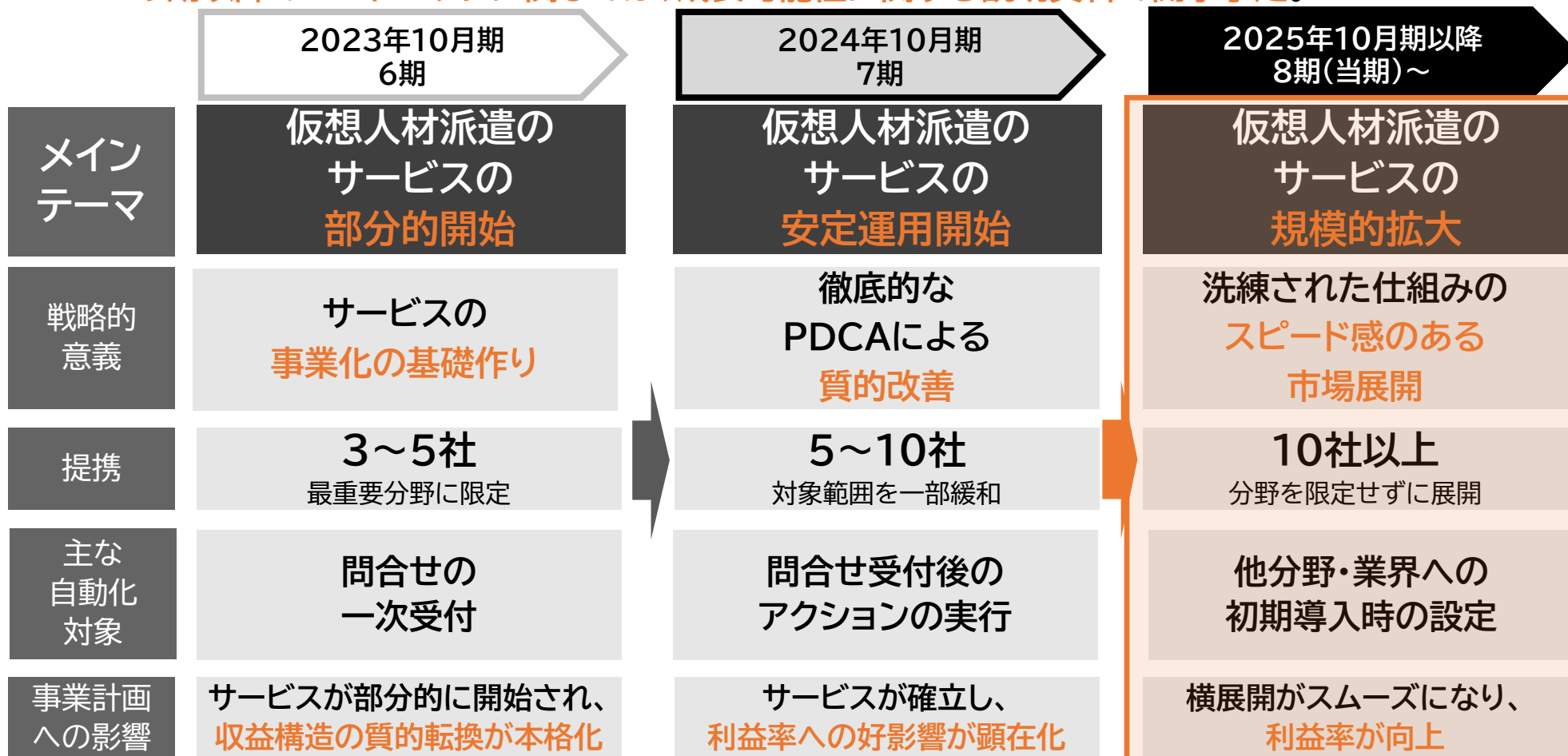
コミュニケーションの自動化レベル*1		人間の関与度合いと対応内容	仮想人材が持つ理解度レベル*2	ボットが対応可能な業務
既存のサービス (弱いAI)	0	ボットはなし 		・ 無し
	1 選択肢提示型	選択肢のみ表示 		
	2 定型表現対応型	ボットは一部のみのみ。 その他は人がフォロー 定型表現のみ 	発話された言葉の類似性により、用意された定型的なフローチャートを流している。	・ チャットボット ・ 音声認識を付けたチャットボット ・ 音声アシスタント ・ 既存ロボット
	3 定型外表現対応型	表記揺れにも対応 		
仮想人材 (AEI)	4 自律型専門ボット	ボットが全て対応 特定ジャンル専門 	(仮想人材が意味を理解したうえで) 第三者に伝えることができる。	・ 保守・メンテナンス ・ コールセンター ・ セールス/マーケティング ・ マニュアル/学習支援
汎用人工知能 (強いAI)	5 自律型汎用ボット	すべてのジャンル 	(仮想人材が意味を理解したうえで) 第三者に教えることができる。	

*1: 「コミュニケーションの自動化レベル」は、自動車における自動運転の基準に相当するコミュニケーションの自動化の度合いを測るための当社の独自基準であります。

*2: 「理解度レベル」は、ある限定された物事に対する理解の深さの度合いを測るための当社の独自基準であります。

中期経営目標達成に向けたAEIの技術ロードマップ

- ・ 今期は**サービスの規模的拡大がテーマ**。
- ・ **AIオペレーター・AEI Deskを横展開して導入企業を増やしていく予定**。
- ・ スケーラビリティを高めるために、特に**初期導入時の設定の効率化に集中的に取り組む中**。
- ・ **9期以降のロードマップに関しては、成長可能性に関する説明資料で開示予定**。



2025年10月末時点におけるAEIの重点対象

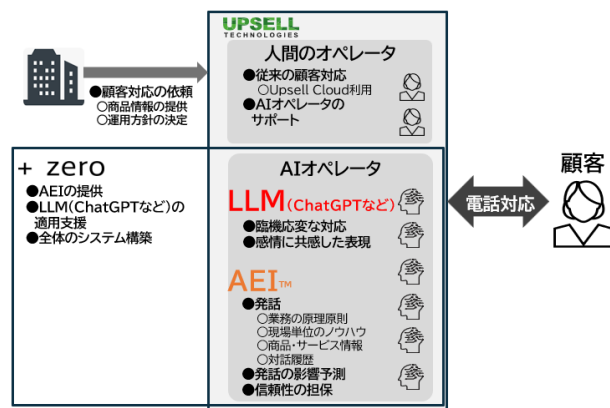
①コールセンター型に関しては2025年4月に販売開始。実導入に向けて、導入準備企業も着々と増加。②AIと人間の協働プラットフォームは産業適用開始済み。③製造業の設計効率化は複数のパートナーとサービス開発中。

いずれも、提携パートナーや業界関係者やメディアなどの評価が高く、今後の展開が期待大。

上記3つのソリューション以外にも業界カットやソリューションカットで新規ソリューションを開発中。

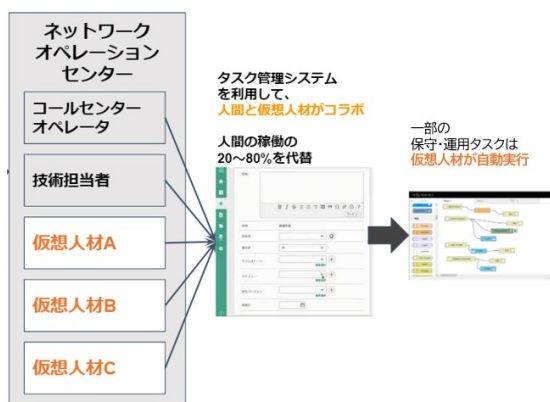
①コールセンター型のAEIの洗練・拡販(AIオペレータ)

複数のエンドクライアントが利用を目指して開発中。システム連携の最終調整中。コールセンター各社、エンドクライアントからのプロトタイプの評価が高い状況。



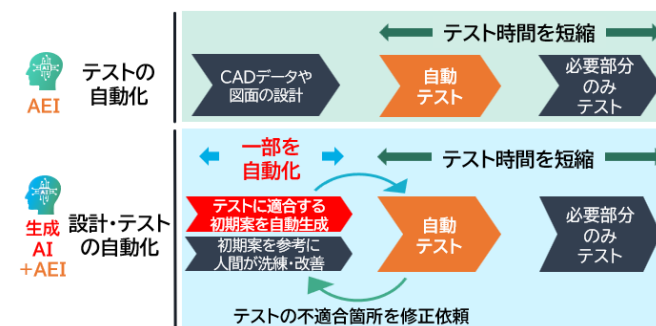
②AIと人間の協働プラットフォームの産業適用(AEI Desk)

稼働開始済み。丸紅グループ内へ順次展開中。他の企業に対しての外販についても商談中。



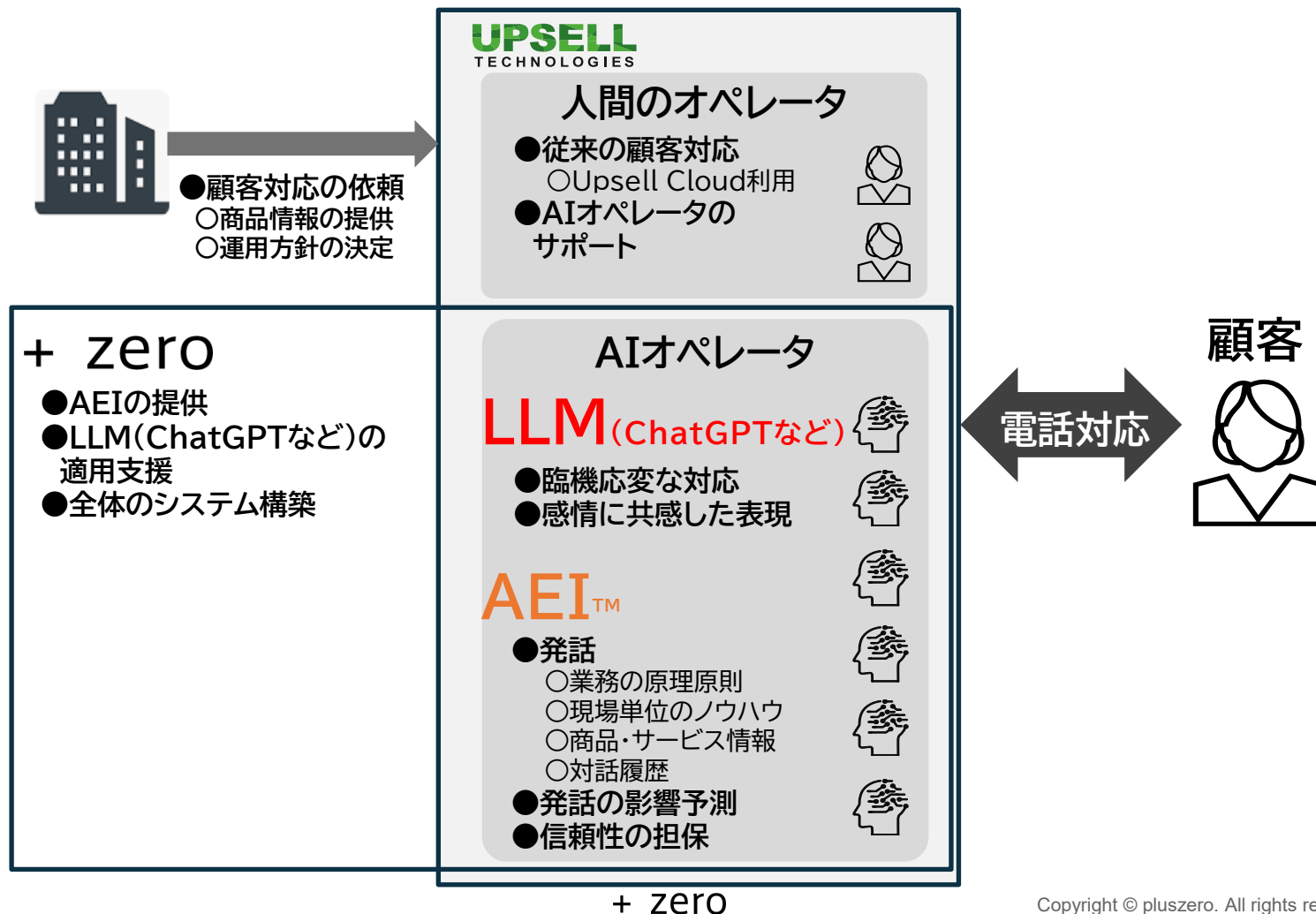
③生成AIを用いた製造業の設計の効率化

早期の産業適用に向けて開発進捗中。2023年10月に日経XTech、日経ものづくりに掲載。先進事例として紹介。



業務提携: アップセルテクノロジー株式会社とAIオペレータの実現

- ・ アップセルテクノロジー株式会社との資本業務提携により、**人とAIのコラボレーション**により、**高度なコールセンターの運用**を実現を目指す。
- ・ 2024年10月期中に複数のエンドクライアントが利用を目指して開発中。



AEIの勝負領域

1. 信頼性の必要性

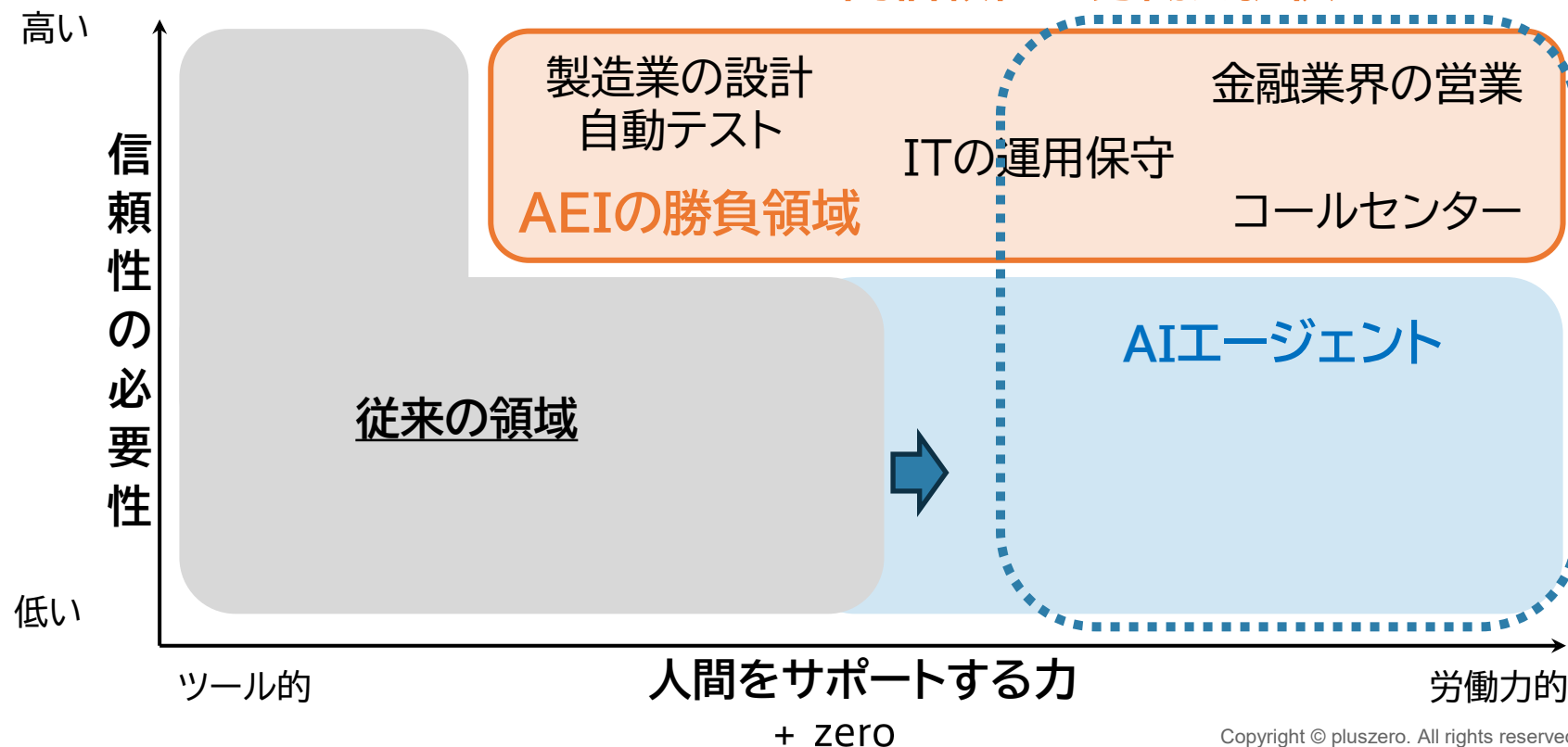
信頼性・・・確率的・統計的な対応では無く、**高い確実性や説明責任を求められるかどうか。**

2. 人間をサポートする力

ツールの・・・ごく一部を代替。一部の作業の後方支援。

労働力的・・・**ある範囲においては自立的・自律的に業務実行可能。人と対話ベースで協働可能。**

AEI=高信頼性の労働力提供

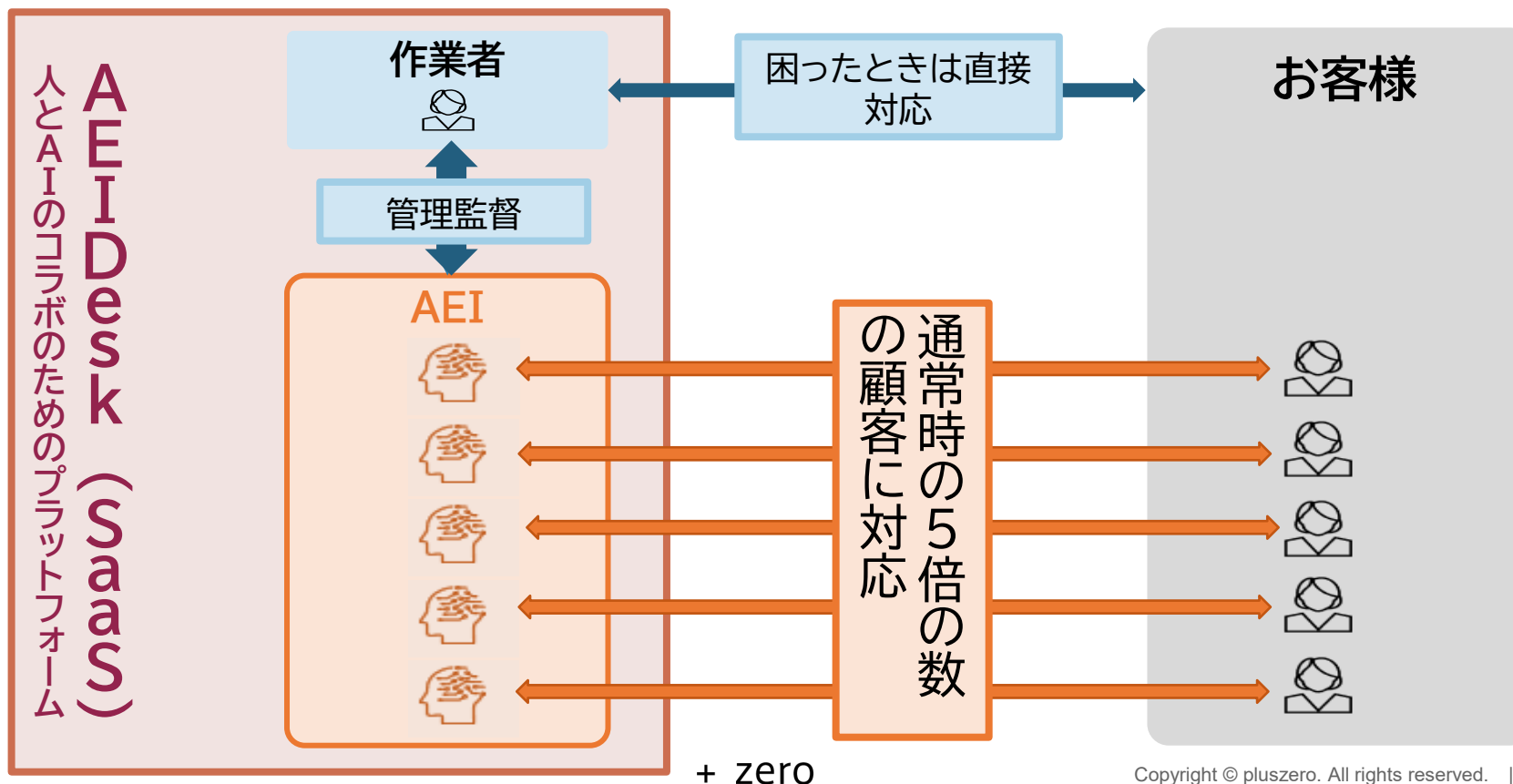


AEIが目指すゴール

AEIが目指すゴールは、「人間1人あたりの生産性」の向上。

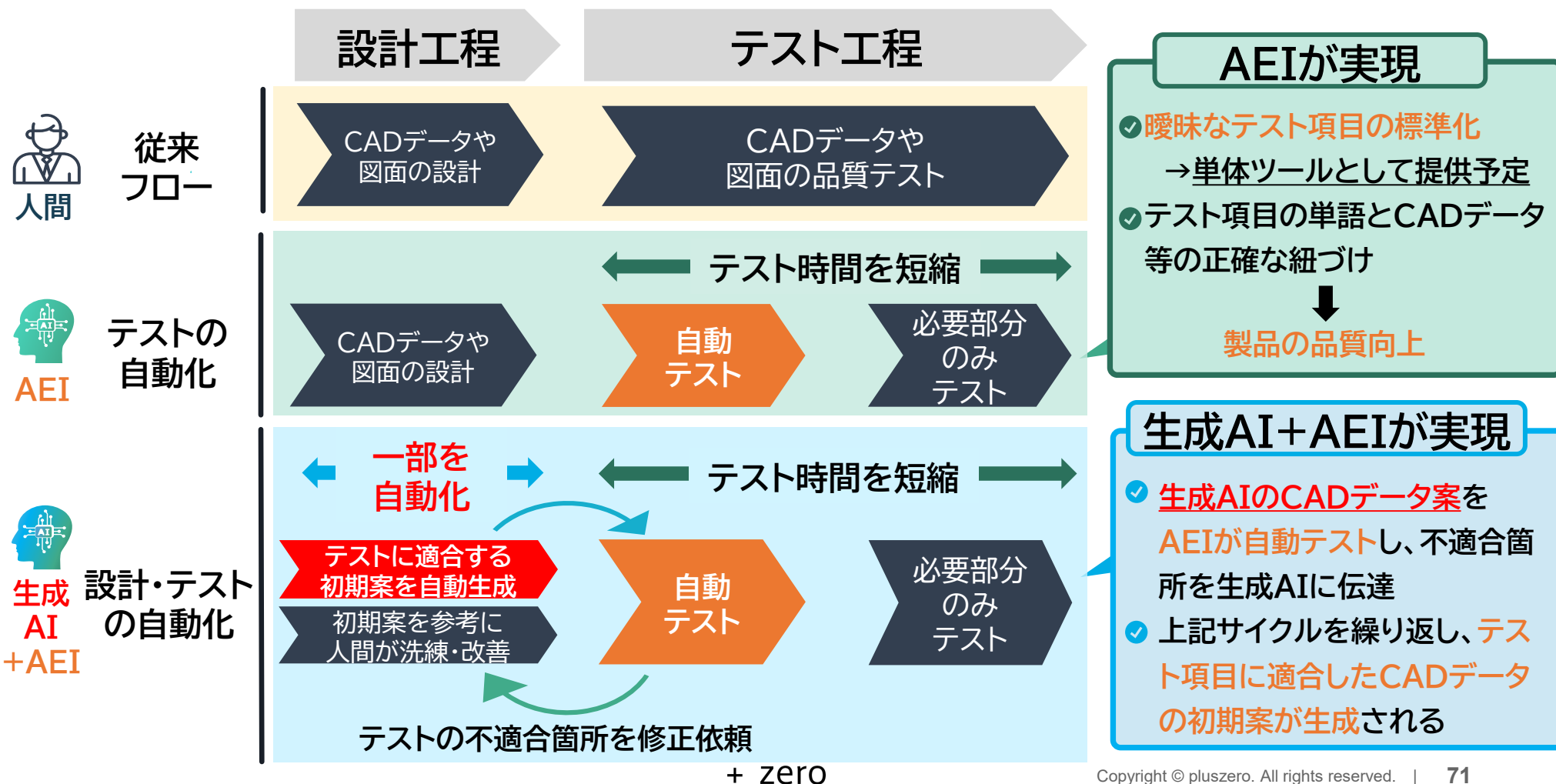
理想のイメージ

イメージとして、人間の作業者が1人でさばいていた業務を人間の作業者1人に加えAEI5人でさばくことで、対応できるキャパシティが5倍になるような状態を創り出すことが理想だと考えている。
この場合、「人間一人あたりの生産性」は5倍になったと考えることができ、労働人口不足に対応可能。



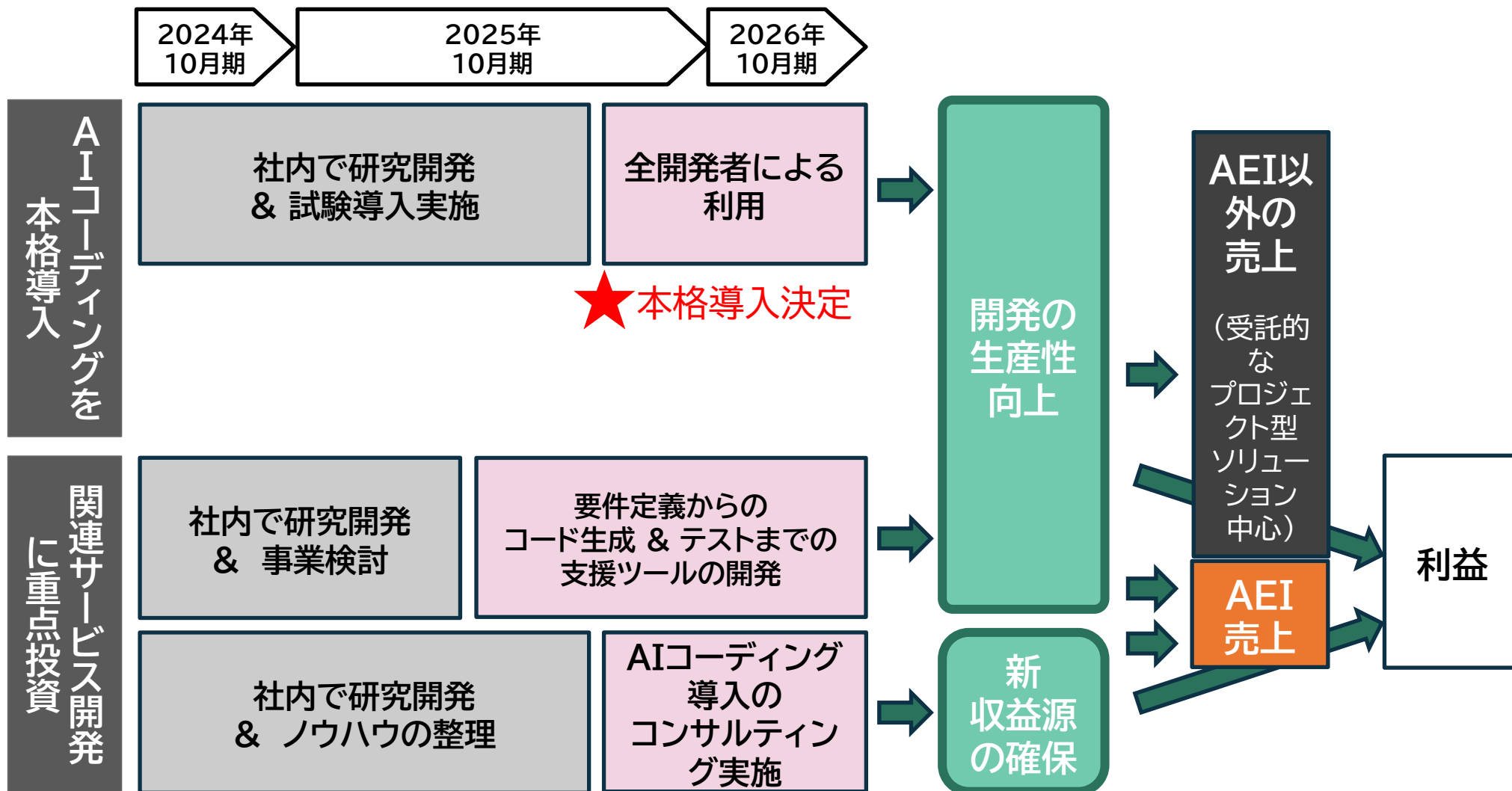
業務提携:アビストと生成AI+AEIで目指す製造業の生産性・品質向上

- アビスト社とAEIを活用したCADデータ等の自動テスト実現による生産性・品質向上を目指している。
- 自動テストは実証実験の中で一部実用化され、生産性・品質向上の成果が出ている。
- 最終的には生成AIと組み合わせ、テスト項目に適合したCADデータ等の自動生成を目指す。



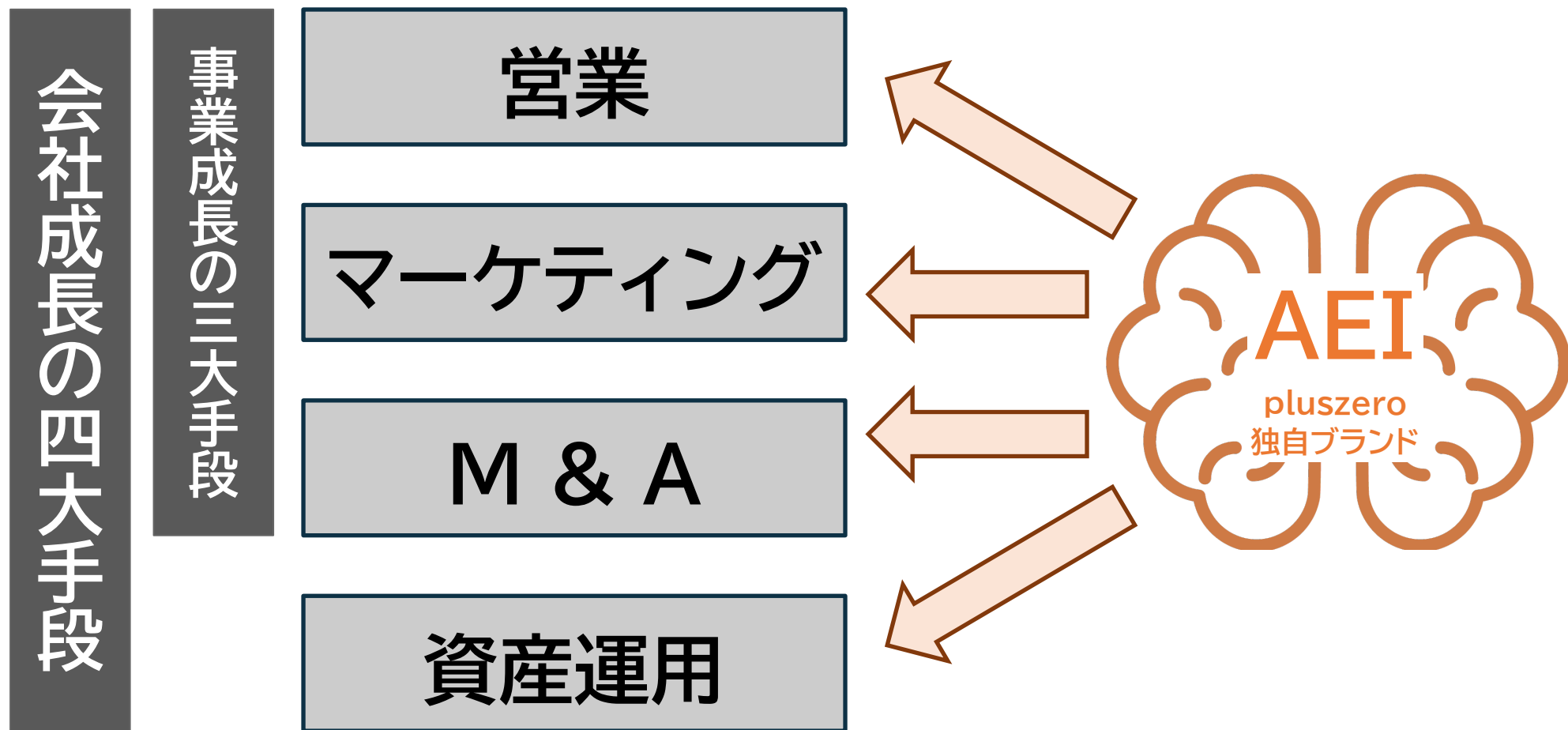
AIコーディングに対する取組み

開発生産性の向上や新収益源の確保に寄与し、全社売上の大部分を占めるAEI以外のプロジェクトへの影響が大きく、売上・利益の両面で、全社業績への寄与度が極めて高くなることが想定される。



高戦略性AIエージェントのサービス開発の本格開始

会社や事業の成長へのインパクトが大きい4分野に対して、AEIを本格導入。各分野毎に戦略的なパートナーとAEIによる事業開発・展開を実施中。

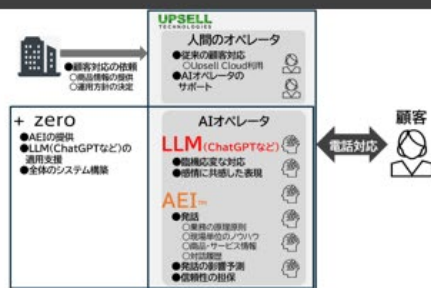


AEIの取組状況のまとめ

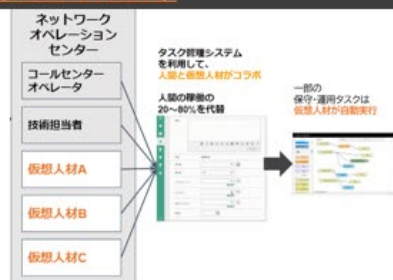
中期経営目標の最終年度である2026年10月期における売上・利益の両面で特にインパクトのある対象は、AIオペレータ、AIコーディング、営業関連のAEIサービスとなります。

重点対象

①コールセンター型のAEIの洗練・拡販(AIオペレータ)



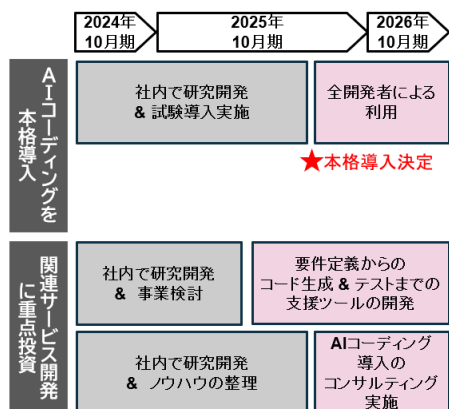
②AIと人間の協働プラットフォームの産業適用(AEI Desk)



③生成AIを用いた製造業の設計の効率化



AIコーディング



高戦略性AI

会社成長の四大手段

事業成長の三大手段

営業

マーケティング

M & A

資産運用

その他

未公開

Appendix

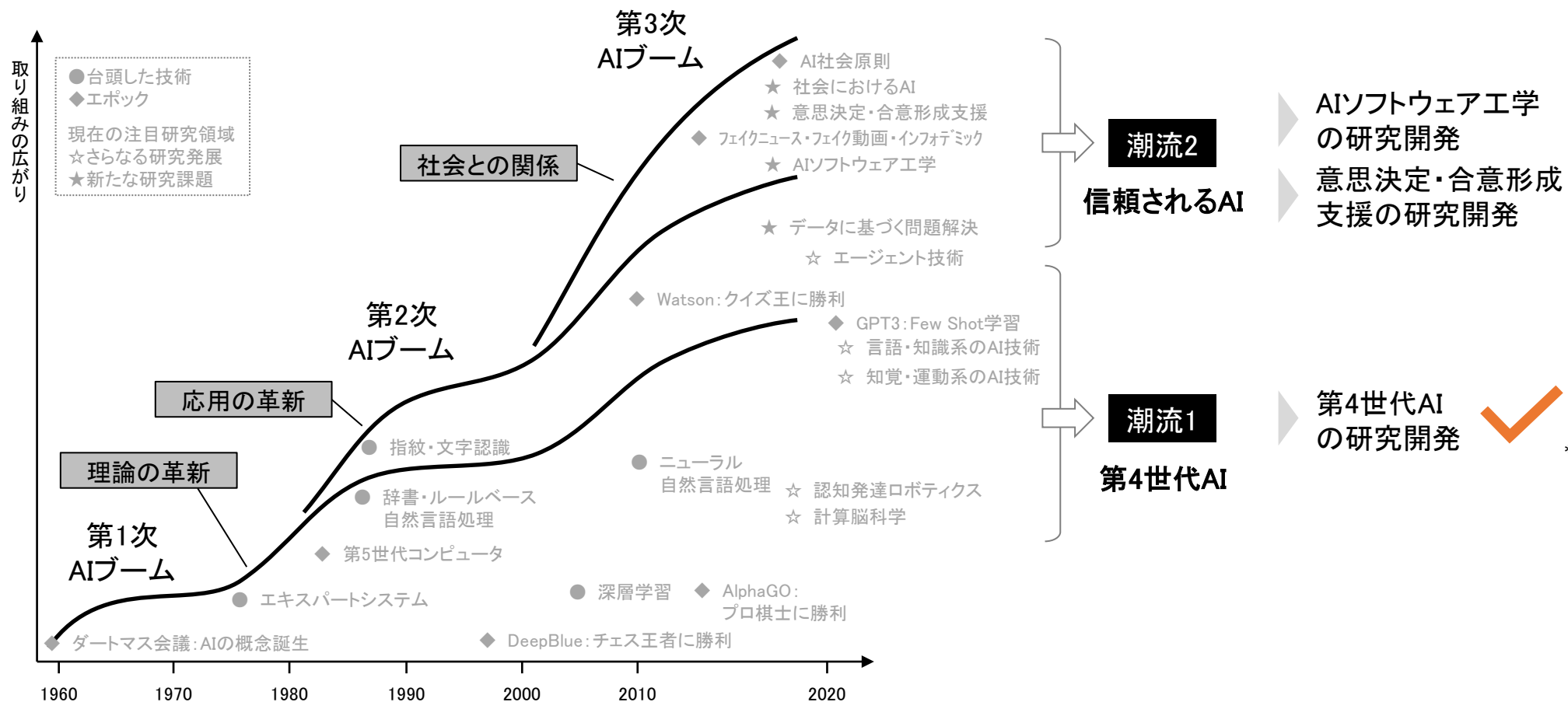
④事業環境

第4世代AIへの注目の高まり(1/2):文科省系シンクタンクの見方

政府系シンクタンクであるCRDSでは、AI研究の新潮流の一つとして「第4世代AI」を捉えており、また、「第4世代AIの研究開発」を戦略プロポーザルの一つとして提言。

人工知能技術の俯瞰図

戦略プロポーザル



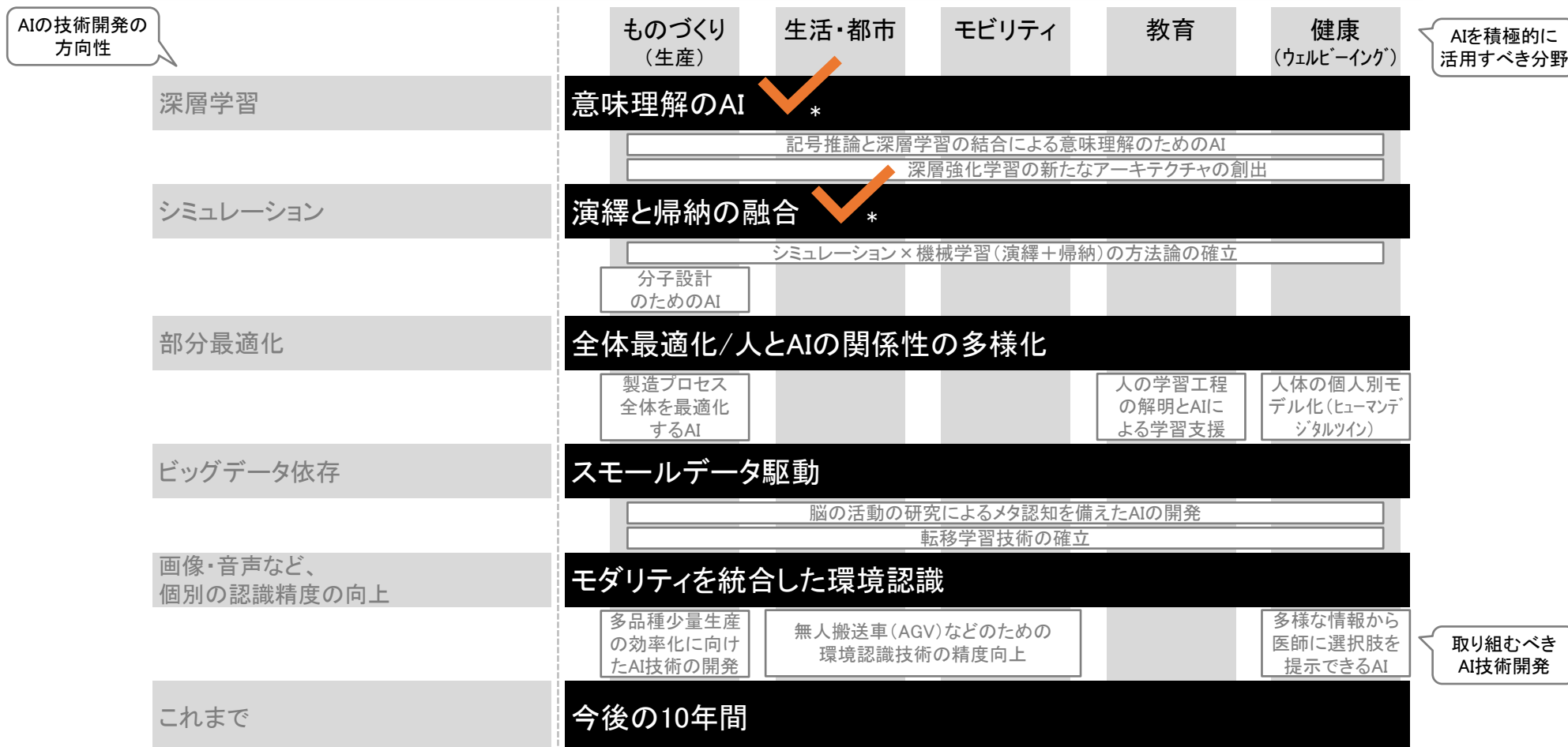
(出典) 国立研究開発法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター(CRDS)
「人工知能研究の新潮流～日本の勝ち筋～」(2021年)

* 図中のオレンジ色のレ点は当社により追記したものです。

第4世代AIへの注目の高まり(2/2):経産省系機関の見方

NEDOによる今後10年間のAIアクションプランの中でも、
取り組むべきAI技術開発として意味理解のAI等が挙げられている。

人とAIの共進化に向けた今後10年間のAIアクションプラン



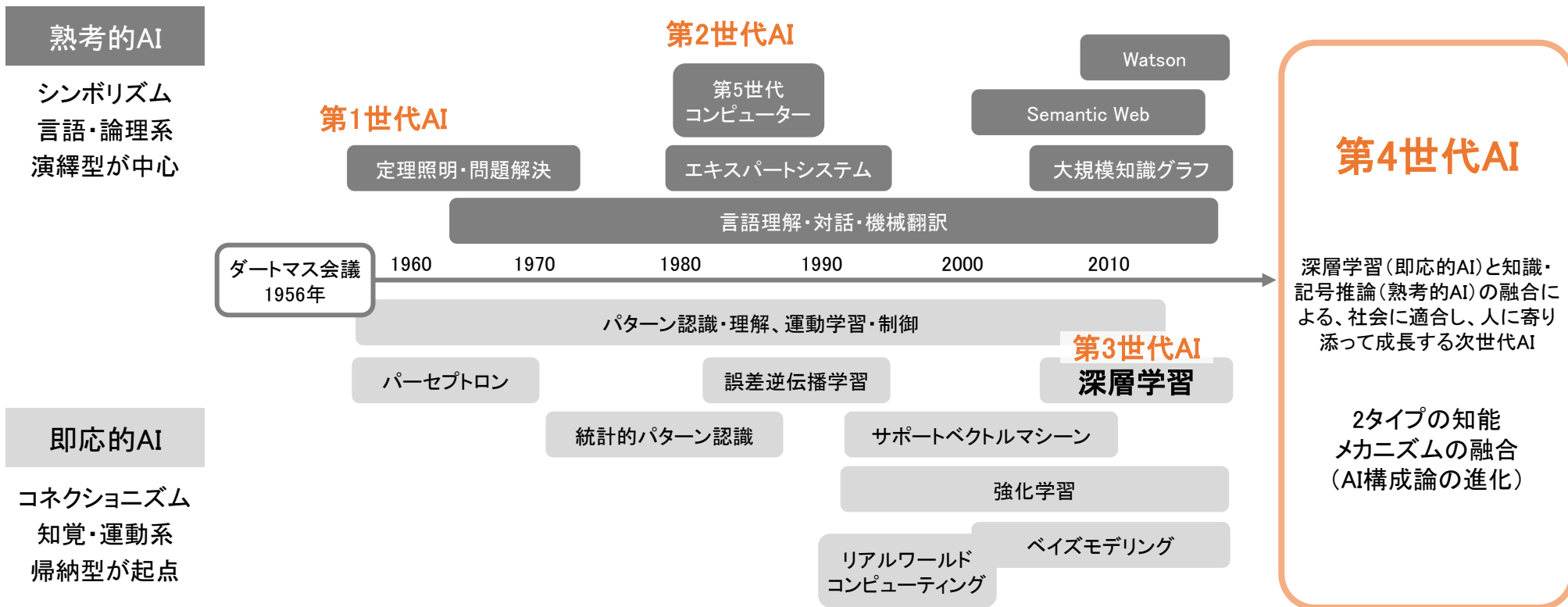
(出典) 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)
「人工知能(AI)技術分野における大局的な研究開発のアクションプラン」(2021年)

* 図中のオレンジ色のレ点は当社により追記したものです。

CRDSによる第4世代AIの定義

CRDSでは「第4世代AI」を、深層学習を中心とする現在の「第3世代AI」の次の世代のAIを意味するものとし、「**深層学習(即応的AI)と知識・記号推論(熟考的AI)の融合による、社会に適合し、人に寄り添って成長する次世代AI**」であるとの方向性を示している。

AI研究の2つの流れと次なる進化



AEIとChatGPTの関係性

ChatGPTはAEIにとって強烈な追い風になる

I ChatGPTとAEIは相互補完関係

- ① AEIはChatGPTの信頼性を向上させる
- ② ChatGPTはAEIの開発を加速させる

II ChatGPTは、AEIが戦う「言語系AI」の市場の可能性の高さを世の中に認知^{*1*2}させた



*1: Microsoft社による10億ドルの出資(Bloomberg)

*2: 文科省による国内での教育現場への活用の検討(日本経済新聞)

※: ChatGPTはサービス名、GPT4はChatGPTで使用されている大規模言語モデルになります。本資料においてChatGPTは大規模言語モデル含んだ類似のサービス全てを指します。

AEIとChatGPTの比較

		ChatGPT	AEI	AEI+ChatGPT
AIの対応範囲		広範	業界特化 *業界拡大は26年10月期以降加速	
AIの性能	精度	○	$\Delta \rightarrow \odot$ *23/10期～26/10期に向上	$\bigcirc \rightarrow \odot$ *23/10期～26/10期に向上
	信頼性	$\Delta \rightarrow ?$ *デバッグ・ラーニングの外部機能次第	◎	
	現場適用力	$\Delta \rightarrow ?$ *現場依存・プラグインの進化次第	◎	
AIの開発難易度	費用面	△	○	$\odot$ *知能の整備効率向上
	人材面	理系人材中心 *高等数学、計算機科学など	文理融合人材中心	
	技術面	大規模言語モデル	意味の見える化	意味の見える化 +大規模言語モデル

pluszeroが定義するAIの性能評価軸

- 当社はAIの性能評価の軸として、**精度と信頼性**の2軸があると考えている。

① 精度

AIの出した答えがどれだけ正解かを示した指標

② 信頼性

AIの出した答えをどれだけ信用できるかを示した指標

- 具体的な課題に対しての対応能力に分解することが可能
- 文科省系研究機関である**CRDS定義の「信頼されるAI」**に示されている5つの要素
- セキュリティ/プライバシー/著作権等の情報管理対策

対応すべき具体的な課題

- ブラックボックス・解釈性対策 AIがなぜそう判定したのか、人間に理解可能な形で説明できるか
- 脆弱性・堅牢性対策 悪意のある学習外データが入力されたり、悪意のある追加学習が実施された場合でも、適切に判定できるか
- バイアス・公平性対策 バイアス(偏り)があるデータを用いて学習しても判定を正しく行えるか
- 品質保証・結果責任対策 AIの判定結果に対してどこまで品質保証できるのか
- フェイク対策 AIが生成したフェイク動画・画像・音声・テキストの悪用をどう防ぐか
- 情報管理対策 AIの判定結果を開示する範囲を状況に応じて限定できるか
(セキュリティ、プライバシー、著作権等)

ChatGPTは穴埋め問題のスペシャリスト

- ある文章があったときに、次に続く単語(厳密にはトークン)を誰よりも上手く予測するもの。
- 例えて言うと、文章の末尾の穴を埋める穴埋め問題のスペシャリスト

穴埋め問題のスペシャリスト

たまに間違える物知り博士

何でも答えられる

精度
○

事実でも架空の話でも、とにかく穴をそれらしく埋めることができる。
穴埋めをするときに、統計的・確率的観点で尤もらしいもので埋める。
ある意味、たまに間違える物知り博士といえる。

あらゆる話題に対して自然な回答ができる*3。

思考回路が読めない

信頼性
(説明可能性)
△

自己教師あり学習を中心としたディープラーニングベースの技術である。
だから、「ブラックボックスで中身が見えない」という問題がある*4。

自信満々に間違える

信頼性
(品質保証)
△

答えがないものや曖昧なものにも適当に答えてしまう場合があるので、
正確に答えることも多いが、時には「自信満々に間違える」傾向がある*5。

*3: 様々な試験問題や研究ベンチマークで高スコアを達成しています。(OpenAI公式ブログ)

*4: 入力クエリにstep by stepといれるとある程度の思考過程は見ることができます。(Chain of thought prompting elicits reasoning in large language models)

*5: hallucinationの問題は解決していません。(OpenAI公式ブログ)

ChatGPTの信頼性向上の試みと依然として残る課題

ChatGPTは、信頼性を高めるための独自の取組みを行っている。

しかし、ディープラーニングという根本の技術に起因して、「自信満々に間違える」傾向や「思考回路が読めない」傾向があるので、信頼性の解決の難易度は極めて高い。

ChatGPTの取組み

人間視点で良い出力

人間にとって、より受け入れられやすい応答になるように学習している*6

有害なコンテンツの
フィルタリング

出力にフィルタをかけることによって、有害なコンテンツが含まれているかを評価して、アプリケーションの有害な動作を防ぐ*7*8*9

主な残課題

思考回路が読めない

自信満々に間違える

信頼性(説明可能性) △

信頼性(品質保証) △

*6: 様々な話題で人間の好む回答になるように学習しています。(Training language models to follow instructions with human feedback)

*7: フィルターは回避される場合があります。(GPT-4 Technical Report)

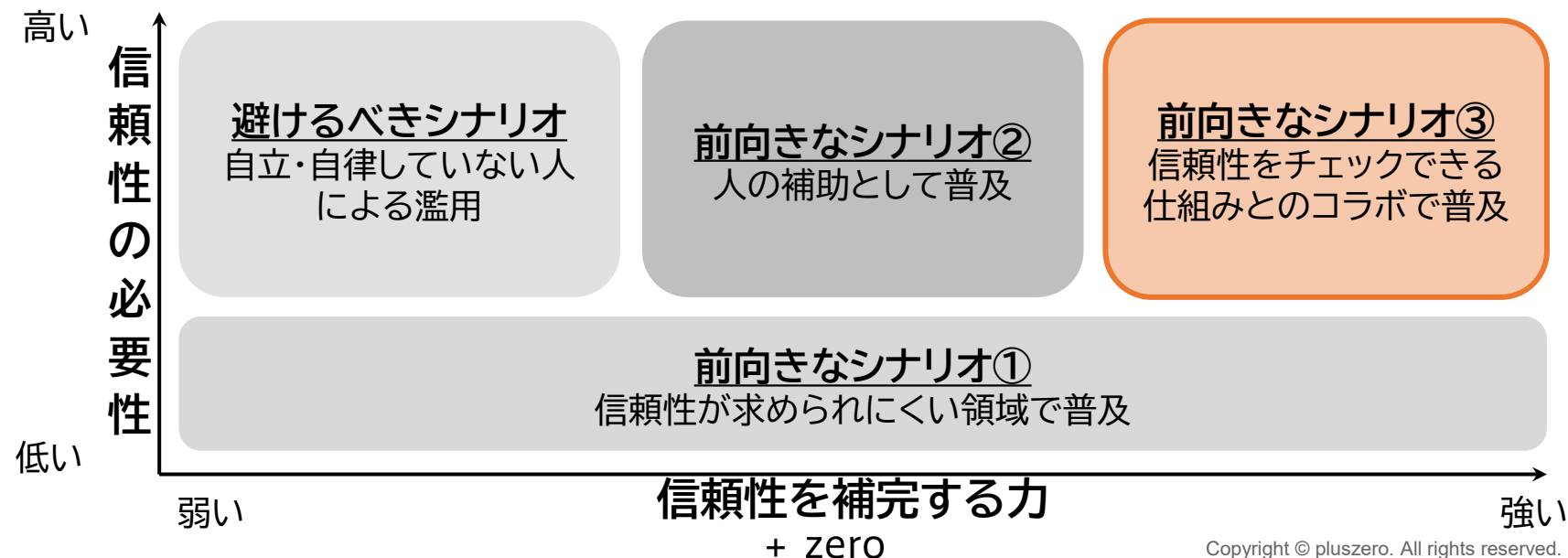
*8: クエリに有害なコンテンツが含まれているかどうかを検知する仕組みも含まれます。(OpenAI公式ブログ)

*9: 学習時に有害な出力を避けるように学習する工夫を実施しています。(GPT-4 System Card)

ChatGPTの未来は信頼性によって予測できる

ChatGPTの普及の道筋は信頼性が決める

- 前向きなシナリオ① 信頼性が求められにくい領域で普及する
エンタメなどのクリエイティブ領域や説明責任が問われにくい課題など
- 前向きなシナリオ② 信頼性を自らチェックできる人を補助する役割として普及する
検索、要約、プログラミングの補助、資料の叩き台、ブレストの相手など
- 前向きなシナリオ③ 信頼性を自動でチェックできる仕組み(AEIなど)と組み合わせることで普及する
信頼性のチェックも任せられれば、全体の自動化率が向上する
- 避けるべきシナリオ 信頼性を自らチェックできない人が結果を鵜呑みにして濫用する



信頼性が求められるにくい領域 ～前向きなシナリオ①の補足説明～

①アウトプットが出ることに自体に価値があるもの
(明確な精度の定義が難しいもの)

②説明責任(解釈性)・結果責任が問われにくい課題

クリエイティブ領域

芸術・デザイン・エンターテインメント

➡ 動画・画像・音声・音楽・テキスト生成

アイデア

➡ ブレインストーミング

※ 著作権、プライバシーなどは考慮する必要がある

社会に悪影響が無い範囲で使う

個人で閉じる場合

➡ 個人の趣味嗜好の中で用いるなど

社会と接点がある場合*10

➡ 間違った答えが含まれることを織込済のケース
例：ネット検索など

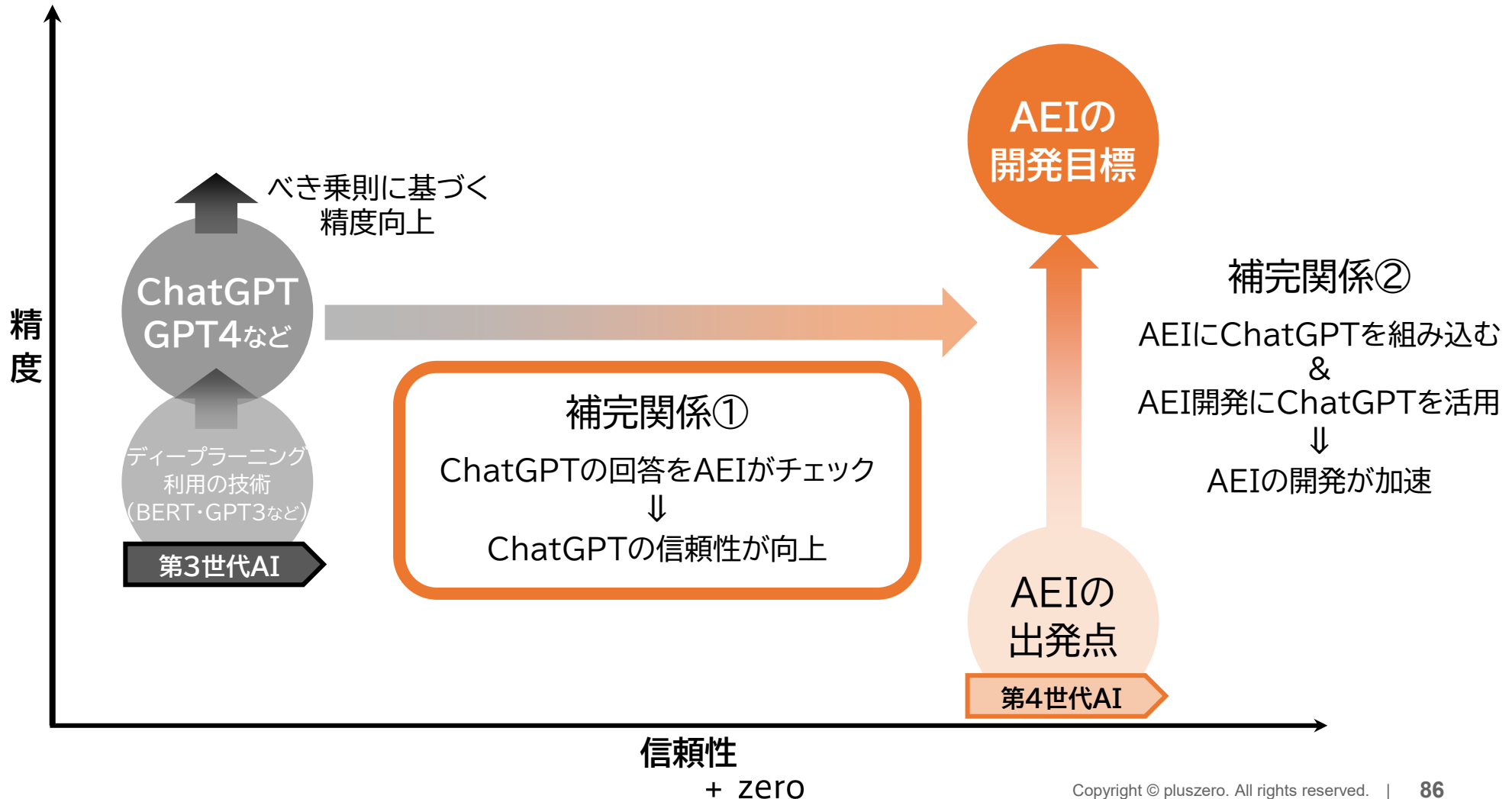
➡ 精度が一定以上に高ければ、解釈性は問われにくいケース
例：画像認識、OCRなど

*10: ChatGPTの利用規約は一部上記の内容を踏まえて設定されています。

※: ①②以外にも、ある分野においてChatGPTの精度がほぼ100%となった場合は、その精度自体が信頼性を生み、ChatGPT単体で利用できる可能性があります。

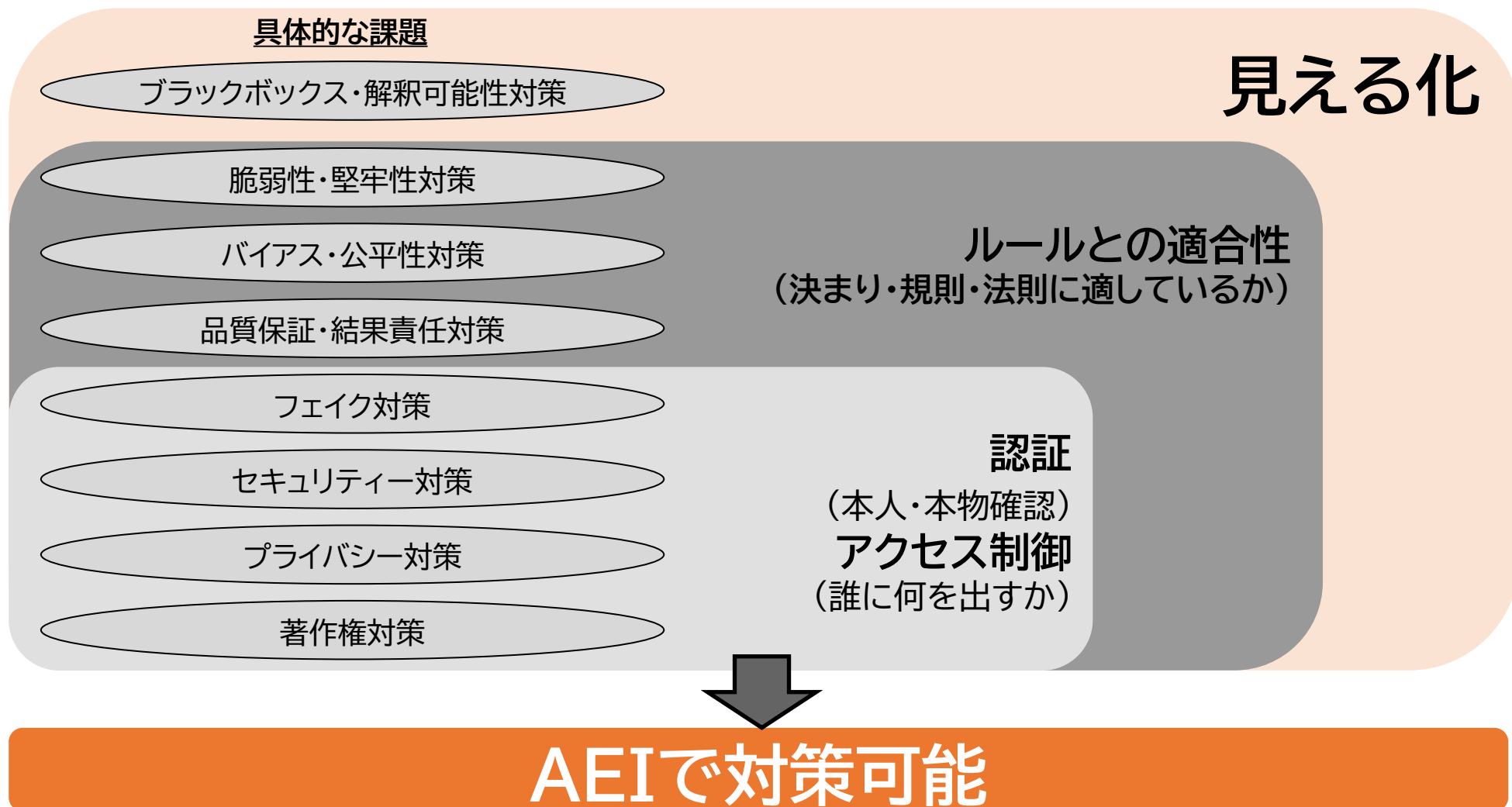
AEIはChatGPTの信頼性を向上させる

- ChatGPTの回答をAEIがチェック
- ChatGPTの信頼性を高めることができる



信頼性を高めるために必要なこと

信頼性に関係する具体的な課題を解決するためには、
「見える化」と「ルールとの適合性」と「認証・アクセス制御」が有効であり、AEIで対策可能である。



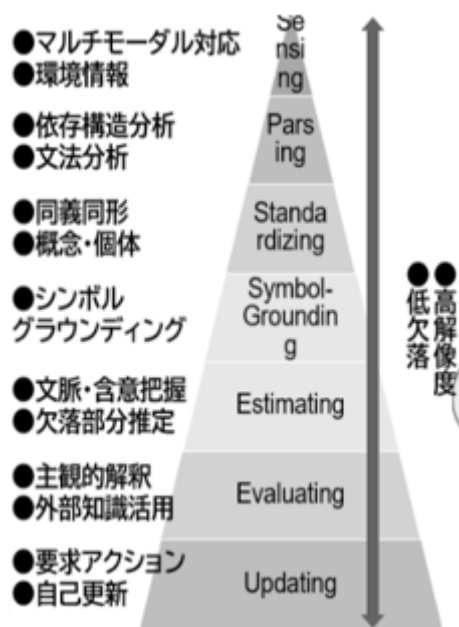
AEIは見える化を追求した技術である

意味と知能の見える化

意味の見える化

言葉が含む意味を機械(AI)が扱う形式にする

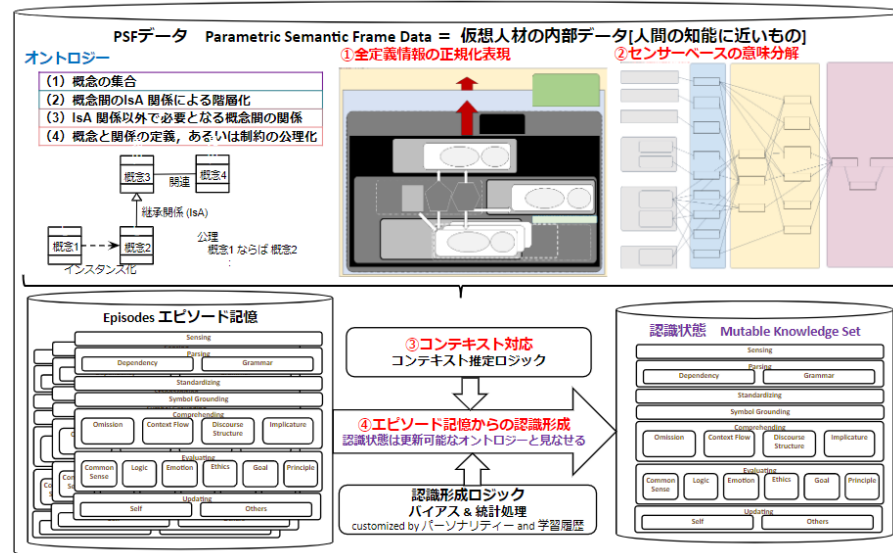
→ N4で実現



知能の見える化

一人一人の頭の中の違いをモデル化する

→PSFデータで実現



AEIは「見える化」により「ルールとの適合性」を実現する

見える化したからこそ、ルールとの適合性をチェックできる。

見える化の効果

ルールとの適合性のチェックは、品質保証・説明責任に直結する

脆弱性・堅牢性、バイアス・公平性対策の面

重要なルールに最低限従っていることで業務適用時の影響をコントロールできる

AEI

情報をN4に変換して
見える化したもの



適合性
チェック

ルールの例

- 法廷のルール（憲法、法令など）
 - セキュリティ、プライバシー、著作権、その他各種法律
- 民間で普及しているルール（常識・業界標準・規約など）
 - 世間一般
 - 倫理観、一般慣習
 - 業界一般
 - 業界基準・ガイドライン
- 現場のルール（社内や組織でのローカルルールなど）
 - 会社のルール・基準
 - 組織のルール・基準
- 社会生活の中で意識すべきルール（感情・心理など）
 - 感情面への配慮
- その他の一般的に成り立つもの（自然法則など）

AEIは「見える化」により「認証&アクセス制限」を実現する

見える化したからこそ、認証&アクセス制限をチェックできる。

コンテンツ自体の見える化 & 認証

コンテンツの流通経路の見える化 & 認証

コンテンツの発信元 → コンテンツの伝達者 & メディア → コンテンツの利用者

コンテンツ、流通経路、利用者を認証した上で、

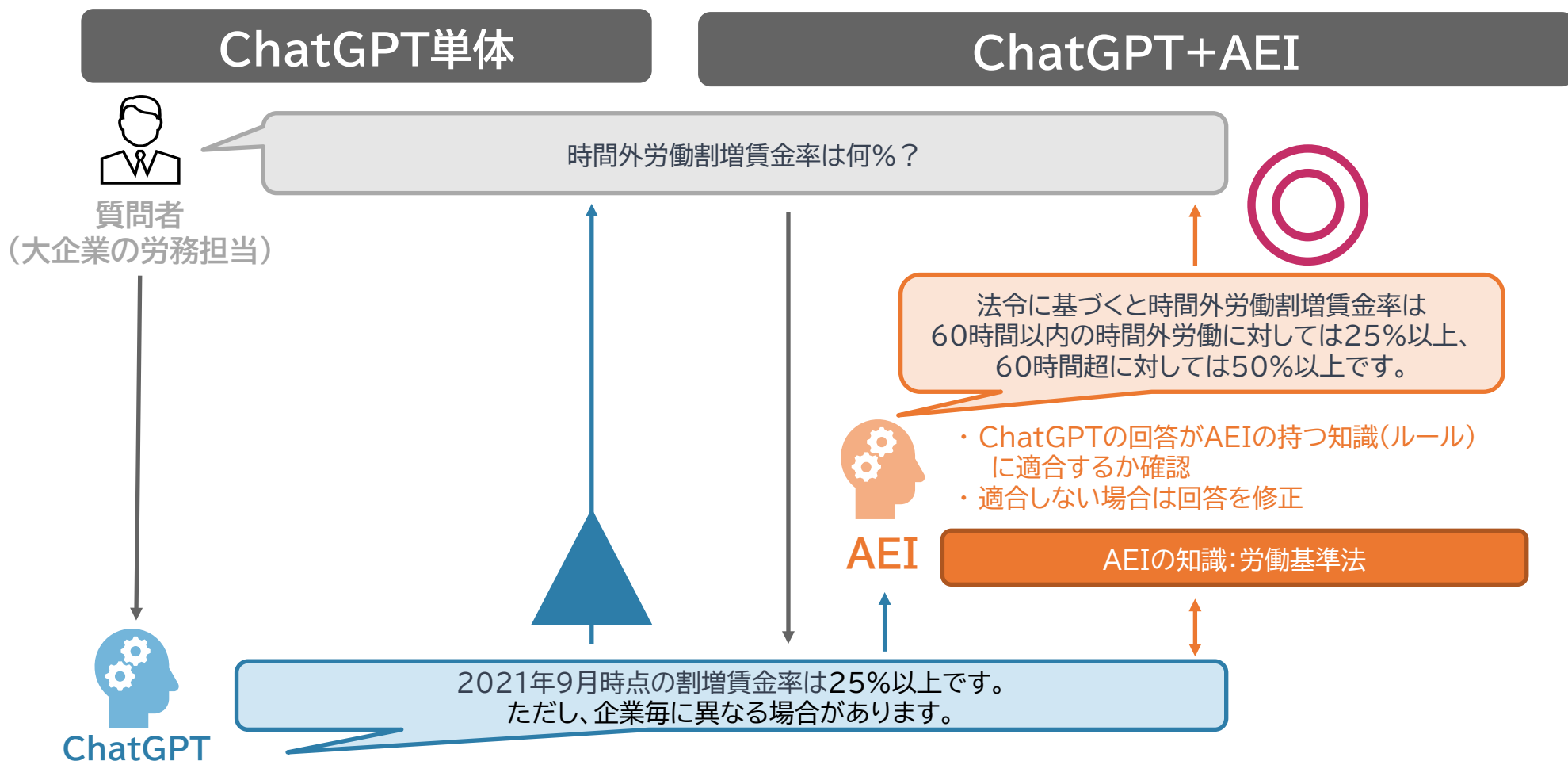
何に対して誰がどのレベルでアクセスできるかをコントロールすることができる。

プライバシー、セキュリティー、著作権の問題は、認証&アクセス制限の仕組みがないと解消できない



AEIが法律とのルール適合性チェックを行う例

- AEIがChatGPTの解答と法律とのルール適合性チェックを行い、解答を修正。



※: 2023年4月11日時点でChatGPT Mar 23 Ver(GPT4搭載)に対して質問した際の解答を抜粋したものです。

AEIが法律だけでなく規程を含めたルール適合性チェックを行う例

- AEIは言葉や知識をグラフ構造に見える化することでルールの適合性チェックを実施

法令に基づくと時間外労働割増賃金率は
60時間以内の時間外労働に対しては25%以上、
60時間超に対しては50%以上です。

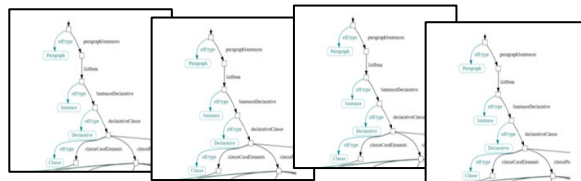
ですが、当社の場合は、就業規則により、
時間外労働割増賃金率は
60時間以内の時間外労働に対しては30%、
60時間超に対しては60%です。



AEI

AEIの知識
労働基準法・就業規則

	労働基準法	就業規則
60h超	50%以上	60%
60h以内	25%以上	30%



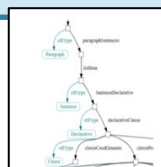
- AEIは労働基準法・就業規則の情報を
予めグラフ構造に変換の上保持

- グラフ構造のChatGPTの回答とAEIの知識を比較
- 法令・規程を基にChatGPTの解答が誤っていると判断、修正

2021年9月時点の割増賃金率は25%以上です。
ただし、企業毎に異なる場合があります。



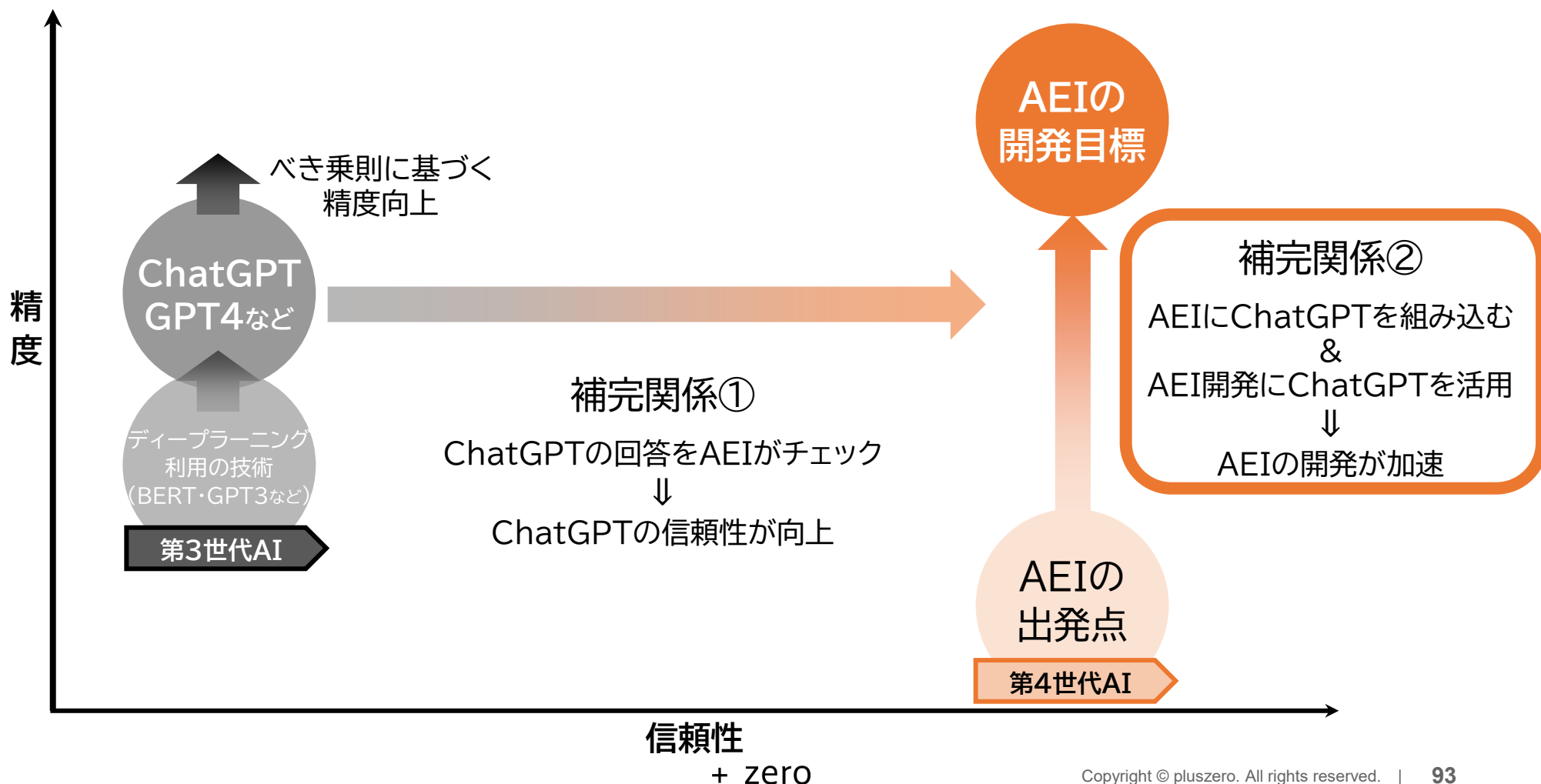
ChatGPT



- ChatGPTの回答をグラフ構造に変換

ChatGPTはAEIの開発を加速させる

- ChatGPTはAEIに組込可能
- AEI開発においてChatGPTを活用
- ChatGPTはAEIの開発を加速させることができる



ChatGPTはAEIの開発を加速させる

AEIはChatGPTを二つの観点で活用して、AEIの実現確率・精度を向上させる。

①対話のエンジンとしての利用

13の発話ロジックの一つとして活用

[2023年4月時点]

ディープラーニング
利用の技術
(ChatGPT、
GPT4など)

発話ロジックの一つ
として活用

13の発話ロジック

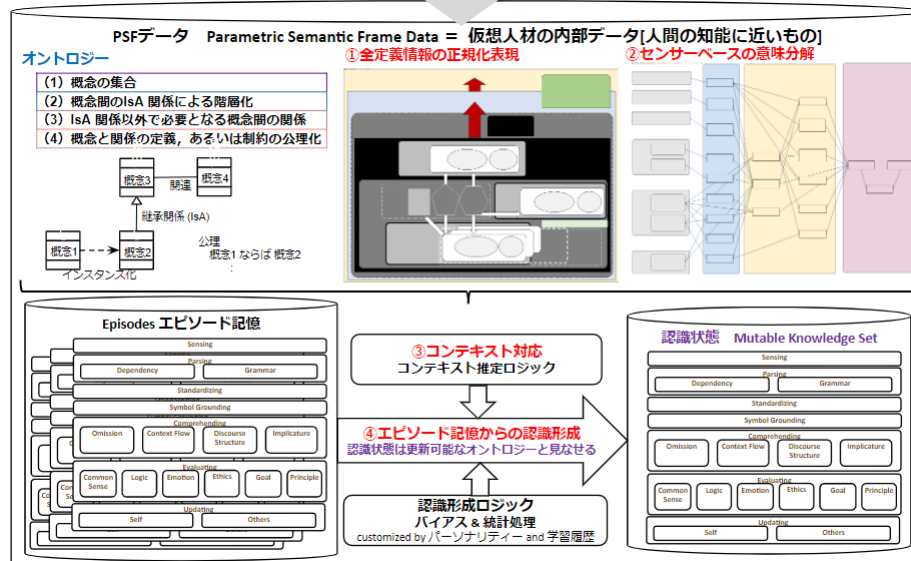
AEI
Artificial Elastic
Intelligence

②PSFデータ整備の効率向上

知能に見える化したPSFデータのデータ整備のために活用する。各サービス・モデルの利用規約等に即して大規模言語モデル全般の活用を前提。

ディープラーニング利用の技術
(ChatGPT、GPT4など)

PSFデータの整備に活用



AEIは運用すればするほど、効率的に賢くなれる

見える化の効能

見える化された情報に基づいて

局所的に動的更新できる

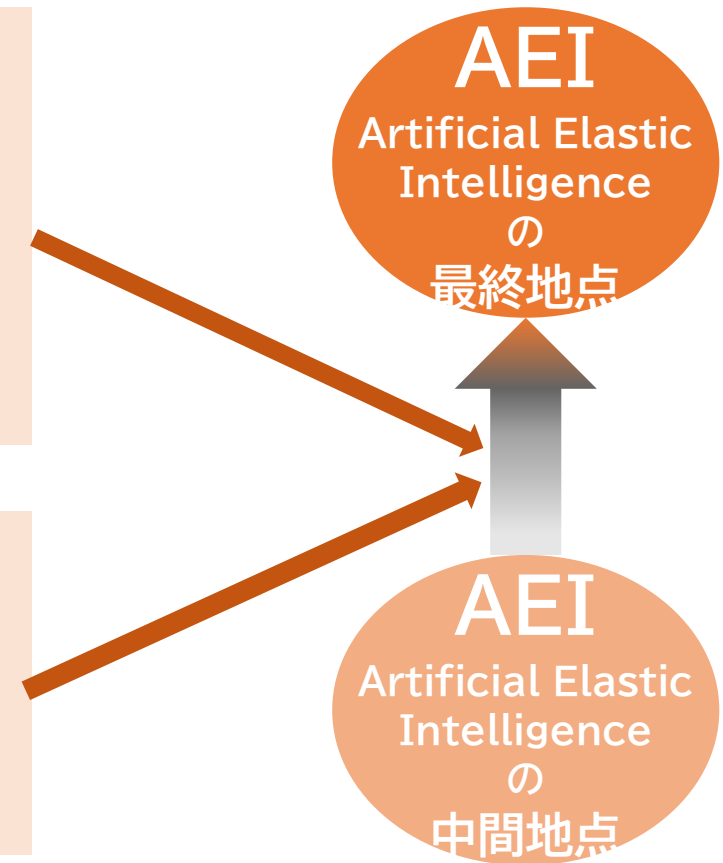
明示的に推論できる

- 動的更新

- 知識の獲得・更新
 - 事物・人物・抽象概念
 - それらの状態
 - それらが関わるイベント
- ルールの獲得・更新
 - OK・NG行動
 - OK・NG状態

- 各種推論

- 抽象⇄具体
 - 帰納・演繹・仮説推論
- 決定度合い
 - 決定論的・確率論的・統計論的



AEIとChatGPTの関係性説明に関する参考文献

*1: Bloomberg. “Microsoft Invests \$10 Billion in ChatGPT Maker OpenAI”.

<https://www.bloomberg.com/news/articles/2023-01-23/microsoft-makes-multibillion-dollar-investment-in-openai?leadSource=uverify%20wall>, (参照 2023-04-11)

*2: 日本経済新聞. 「学校のChatGPT指針、「文科省が策定」 松野官房長官」.

https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA062FS0W3A400C2000000/?n_cid=SNSTW006&n_tw=1680752661, (参照 2023-04-11)

*3: OpenAI. “GPT-4”.

<https://openai.com/research/gpt-4>, (参照 2023-04-11)

*4: Wei, J., Wang, X., Schuurmans, D., Bosma, M., Chi, E., Le, Q., & Zhou, D. (2022). Chain of thought prompting elicits reasoning in large language models. arXiv preprint arXiv:2201.11903.

*5: OpenAI. “GPT-4”.

<https://openai.com/research/gpt-4>, (参照 2023-04-11)

*6: Ouyang, L., Wu, J., Jiang, X., Almeida, D., Wainwright, C., Mishkin, P., ... & Lowe, R. (2022). Training language models to follow instructions with human feedback. Advances in Neural Information Processing Systems, 35, 27730-27744.

*7: OpenAI. “GPT-4 Technical Report”

<https://arxiv.org/abs/2303.08774>, (参照 2023-04-11)

*8: OpenAI. “New and improved content moderation tooling”

<https://openai.com/blog/new-and-improved-content-moderation-tooling>, (参照 2023-04-11)

*9: OpenAI. “GPT-4 System Card”.

<https://cdn.openai.com/papers/gpt-4-system-card.pdf>, (参照 2023-04-11)

*10: OpenAI. “Terms of use”.

<https://openai.com/policies/terms-of-use>, (参照 2023-04-11)

AIの技術動向とAEIの位置付け(1/3) 精度と解釈性の2つが大切

AIモデルの評価は、2つのポイントがある。

- ①タスクへの有効性を示す「**モデルの精度**」
- ②出力に対する説明可能性を表す「**モデルの解釈性**」

「**精度**」と「**解釈性**」にはトレードオフの関係がある。

- ・ディープラーニングは精度は高いが、解釈性が低い
- ・ナレッジグラフは解釈性は高いが、精度が低い

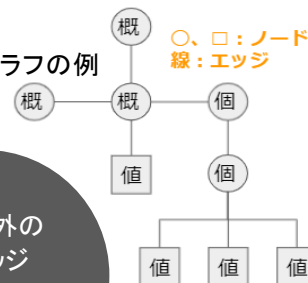
モデルの精度(意味理解のレベル)

ディープラーニング利用の技術
(BERT・GPT3など)

第3次AIブーム

解釈性を上げようとする
点線の曲線に沿って
精度が落ちていくイメージ*

※ ナレッジグラフの例



AEI以外の
ナレッジ
グラフ
(知識グラフ)

第1次AIブーム

第2次AIブーム

モデルの解釈性(意味の説明可能レベル)

+ ZERO

* Explainable Artificial Intelligence (XAI): Concepts, Taxonomies, Opportunities and Challenges toward Responsible AI, arXiv:1910.10045v2 [cs.AI], 26 Dec 2019, P.31を参考に当社作成

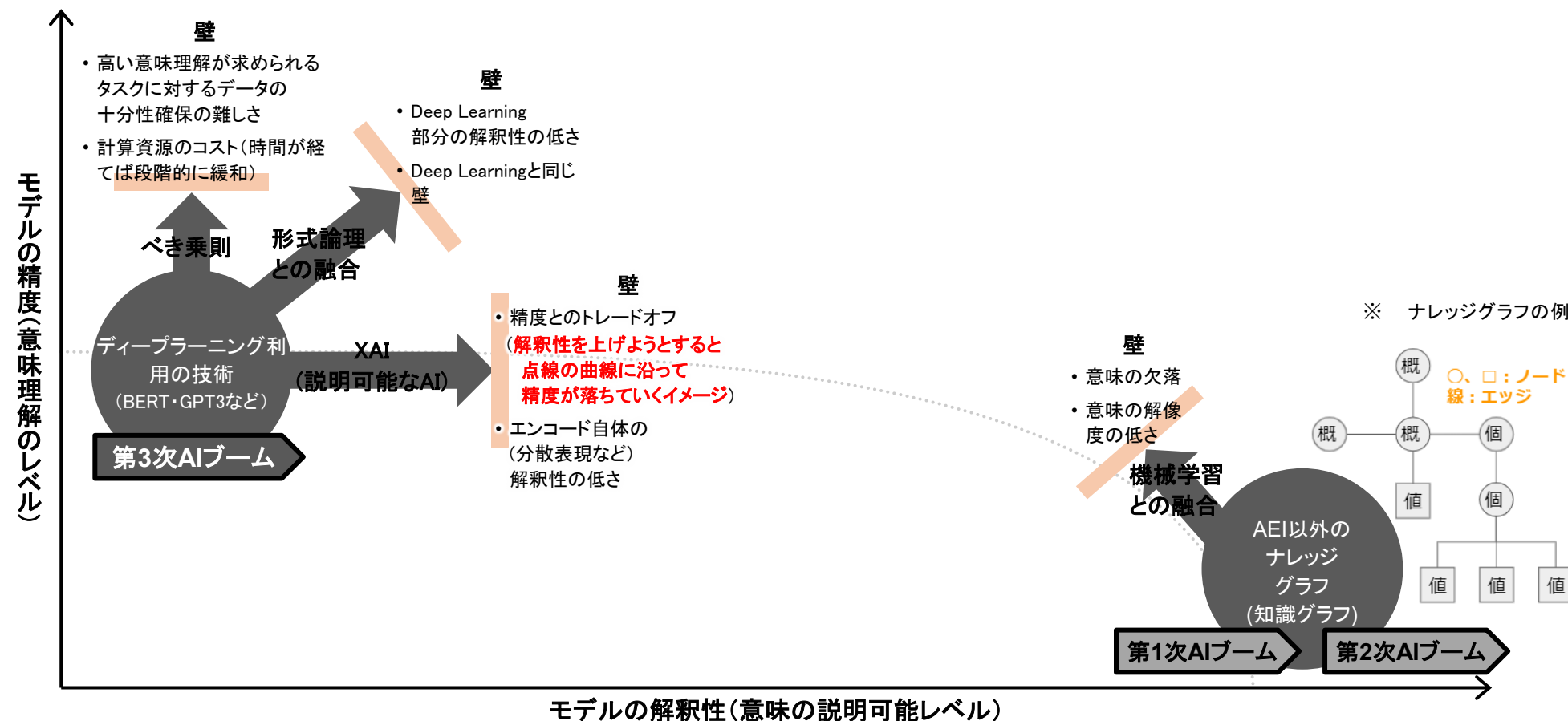
AIの技術動向とAEIの位置付け(2/3) 現在の主要技術の流れと課

ディープラーニング利用の技術のトレンドは主に三つである。

①べき乗則、②形式論理との融合、③XAI(説明可能なAI)

ナレッジグラフの技術のトレンドは主に一つである。

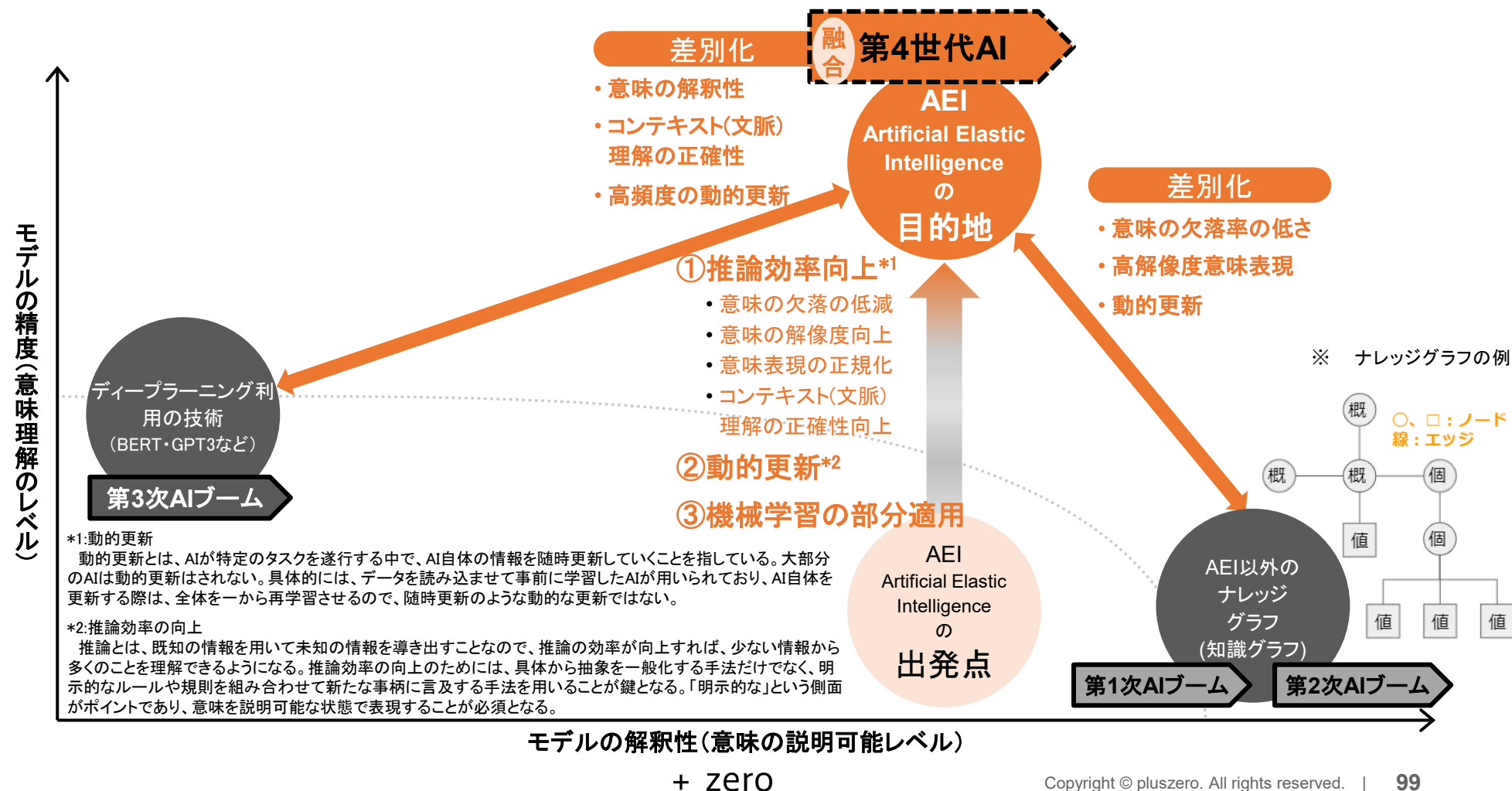
①機械学習との融合



AIの技術動向とAEIの位置付け(3/3) AEIの独自工夫のポイント

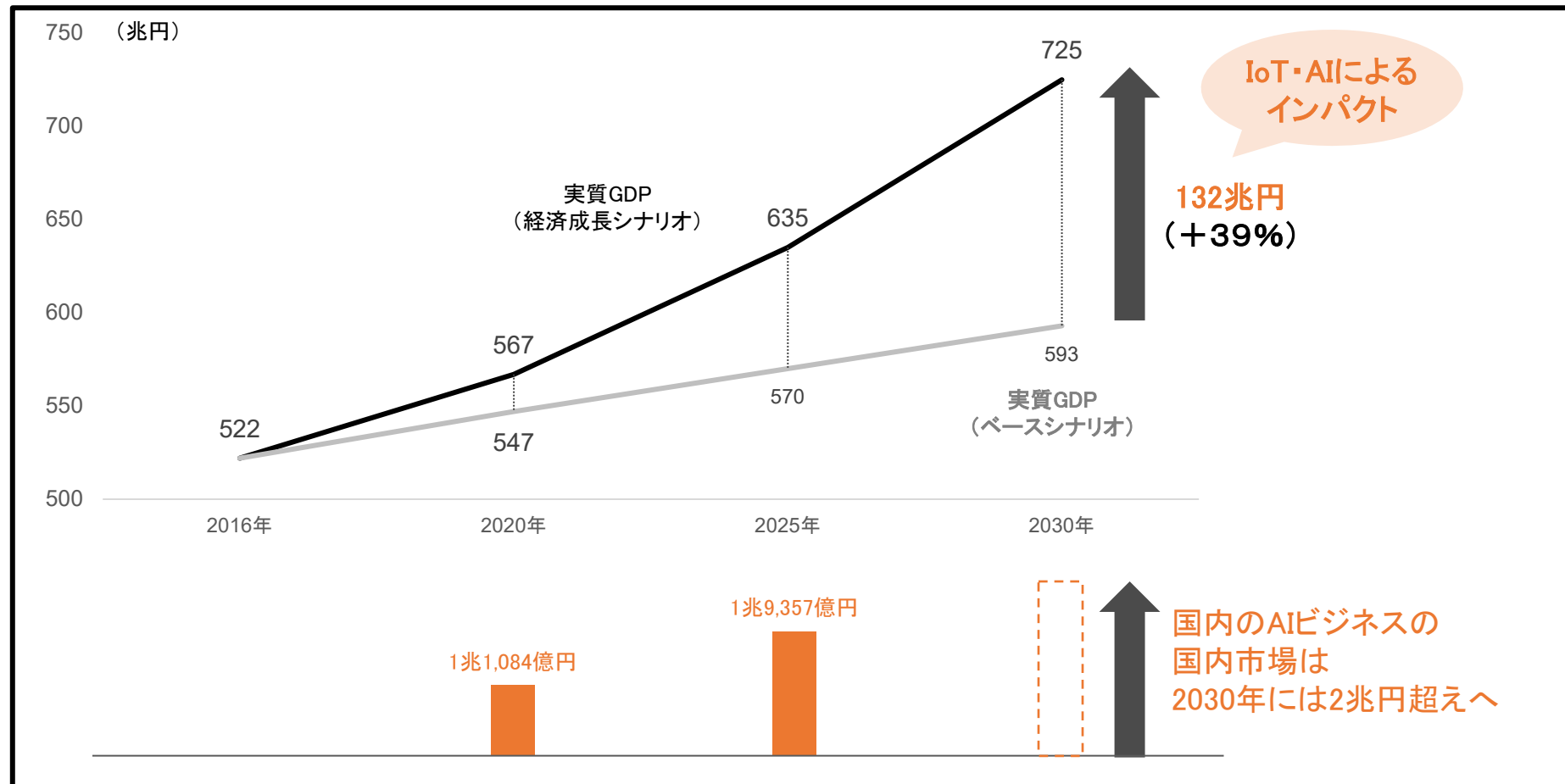
AEIは、「ナレッジグラフ」の技術をベースとして、高い解釈性を実現し、独自の工夫により精度向上を目指す技術である。AEIの工夫点は、主に以下の三つである。

①推論効率向上、②動的更新、③機械学習の部分適用



当社事業に対する社会的ニーズ

IoT・AIの経済成長へのインパクトとして、**2030年には132兆円**(実質GDPベース)の経済的効果を生むと予測されており、当社のAI技術等に対して潜在的に大きな社会的ニーズが存在。そして、国内の**AI市場は2025年にはほぼ2兆円になり、2030年には2兆円を超える規模に成長が期待**される。



*(出典1)総務省「IoT時代におけるICT経済の諸課題に関する調査研究」(平成29年)を基に当社作成

*(出典2)富士キメラ総研「2020 人工ビジネス総調査」を基に当社作成

AEIが狙う市場①: 技術的に困難である分、代替できる市場は巨大

AEIは今後10～20年で起こる1,000万人規模の人材不足の救世主となり得る。

職業分類で言うと、AEIの高い相互理解が価値を発揮し、物理的な身体を持たなくても業務を完結しやすい情報通信業と教育、学習支援業の専門的・技術的職業従事者と、全産業の事務従事者と販売従事者がターゲットとなる。

TAM

– Total Addressable Market

ある市場の中で獲得できる可能性のある最大の市場規模、つまり商品・サービスの総需要

約94兆円

■ 専門的・技術的職業従事者 小計 12.7兆円

■ 情報通信業 4.1兆円

■ 教育、学習支援業 8.6兆円

■ 事務従事者

■ 全産業 48.9兆円

■ 販売従事者

■ 全産業 32.3兆円

※市場規模は、職業分類×産業分類に応じた人数に対して平均年収を乗じて計算

人数の出典

国勢調査 平成27年国勢調査 就業状態等基本集計(労働力状態, 就業者の産業・職業など)

平均年収の出典

2019年度国税庁 民間給与実態統計調査の数字を利用)

※専門的・技術的職業従事者には他にも対象にできるものがあるが、産業単位で特定することが難しく、対象外とした
※AEIは日本語だけでなく、英語、並びに各国語対応もするが、各語圏の市場全体の概算が難しく、対象外とした

AEIが狙う市場②: SAMレベルでも市場は巨大

AEIは第4世代AIの技術コンセプトであり、仮想人材派遣はその具現的イメージである。特許も取得している革新的技術により、物理的な身体を持たなくても業務を完結しやすい職種においては、**技術ベースでは業務のほとんど全てを実行可能になる想定**である。しかし、**労働力の補完・代替は規制・心理的障壁**などから容易に進むわけではないので、**今後5年間のスパンでは派遣・パートなどの補完的雇用形態の人材リソース部分をターゲットとして想定**。

今後5年間の 想定SAM

— Servicable Available Market

TAMの中で
ターゲティングした部分の需要

約25.7兆円

■ 専門的・技術的職業従事者 小計 2.2兆円（補完可能比率17.1%）

■ 情報通信業 0.7兆円

■ 教育、学習支援業 1.5兆円

■ 事務従事者

■ 全産業 13.3兆円（補完可能比率27.2%）

■ 販売従事者

■ 全産業 10.3兆円（補完可能比率31.8%）

※TAMからSAMへ換算

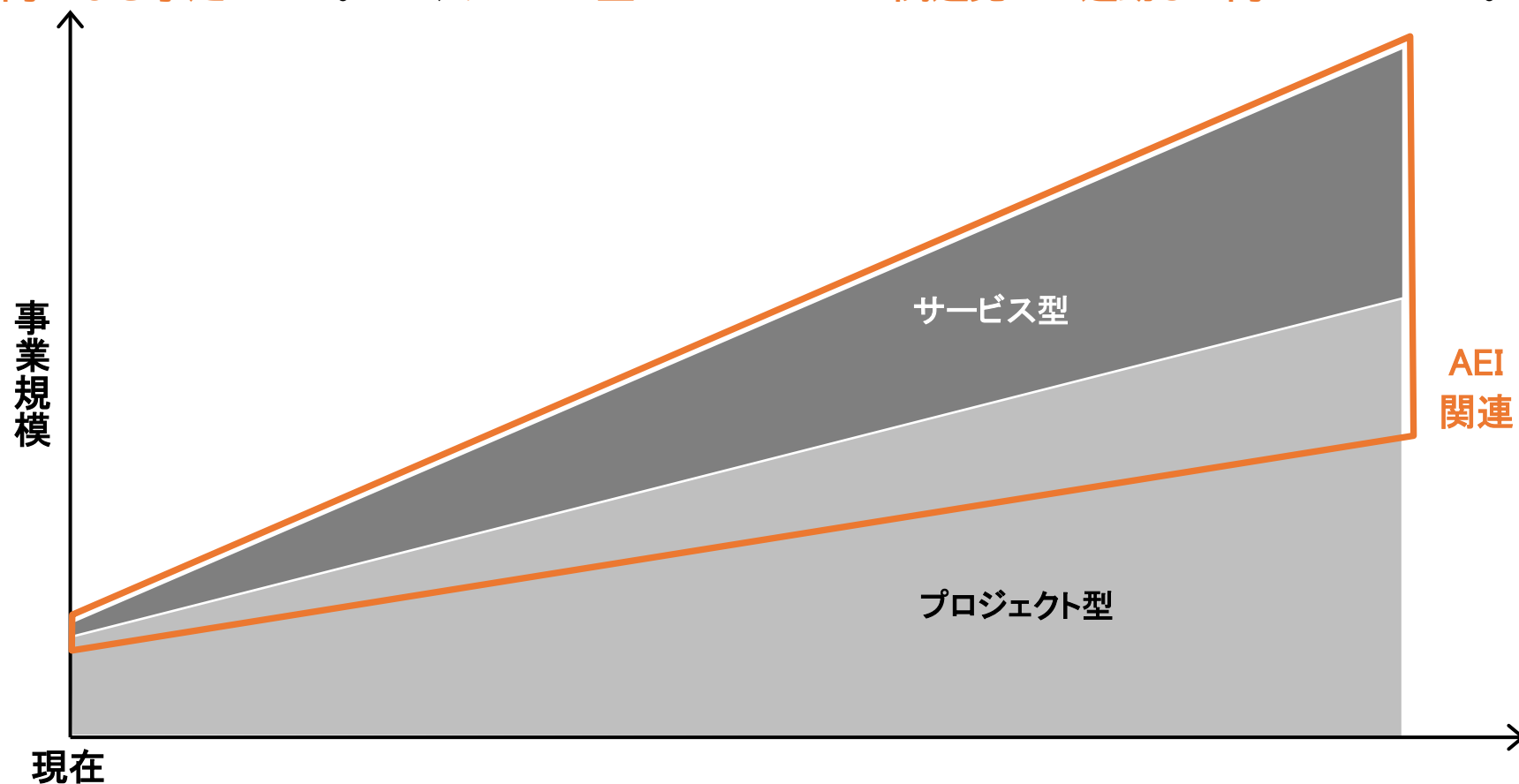
国勢調査 平成27年国勢調査 就業状態等基本集計(労働力状態, 就業者の産業・職業など)
こちらの国勢調査の結果の従業上の地位(8区分)、職業(大分類)の数字に基づいて、
「労働者派遣事業所の派遣社員」と「雇用者 パート・アルバイト・その他」の合計により、
補完的雇用形態の比率を出し、それをTAMの数字に乗じて計算した。

Appendix

⑤成長戦略

中長期的な成長イメージ

スケーラビリティが高い仮想人材派遣などのAEI関連サービスの積極展開により、AEI関連売上高が向上。2025年10月期時点でのAEI関連売上高は全体の24%であり、今後は、更に上昇傾向になる予定である。また、サービス型についてもAEI関連売上と連動して向上させていく。



(注) 中長期的な成長イメージは、あくまで経営上の目標を示したものであり、その実現を保証するものではなく、また実現の時期を示唆するものでもありません。

KPIの定義

「継続性」と「高成長性」を重視

- ①既存顧客の比率を一定以上に維持しながら、「売上高成長率」を一定以上にし、「継続性」、「高成長性」の水準を一定レベル以上に維持
- ②「売上総利益率」の水準を維持しながらAEIへの投資を継続することで、「AEI関連売上比率」、「サービス型売上比率」を向上させ、中長期的に「高成長性」を実現
- ③「営業利益」に関しては、額・率ともに中長期的な最大化を目標とし、短期的にはAEIへの投資計画に合わせて柔軟に対応

中期	重要指標	営業利益成長率(CAGR)	中長期における「高成長性」の結果水準のモニタリング
常時		売上高成長率(CAGR)	全期間に亘る「高成長性」の結果水準のモニタリング
		売上総利益率	中長期の「高成長性」、「継続性」のための投資余力のモニタリング
	参考指標	AEI関連売上比率	中長期の「高成長性」と「継続性」の結果水準のモニタリング
サービス型売上比率			

(注) CAGR(年平均成長率)とは、複数年にわたる成長率から、1年あたりの幾何平均を求めたもの。

2026年10月期業績予想に基づくKPI

実績と推移

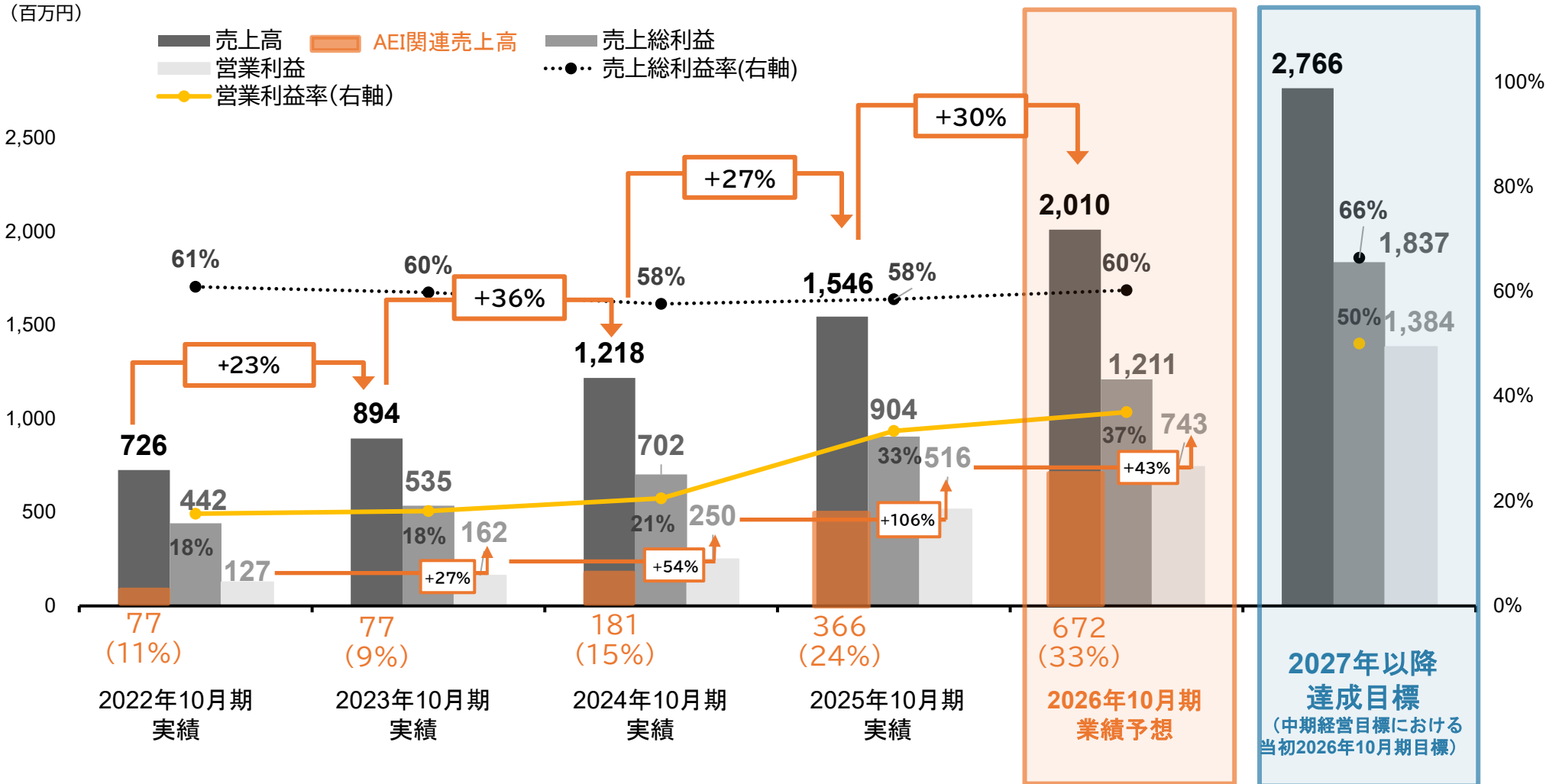
- ①既存顧客の比率を一定以上に維持しながら、「**売上高成長率**」を一定以上にし、「継続性」、「高成長性」の水準を一定レベル以上に維持
- ②「**売上総利益率**」の水準を維持しながらAEIへの投資を継続することで、「**AEI関連売上比率**」、「**サービス型売上比率**」を向上させ、中長期的に「高成長性」を実現

		22/10期	23/10期	24/10期	25/10期	26/10期予想
重要指標	売上高成長率	43%	23%	36%	27%	30%
	売上総利益率	61%	60%	58%	58%	60%
参考指標	AEI関連売上比率	11%	9%	15%	24%	33%
	サービス型売上比率	2%	3%	3%	2%	結果のみ 開示

2026年10月期業績予想と当初公表の業績目標について

- 業績予想の売上成長率は30%、営業利益の成長率は43%
- 営業利益率37%、売上総利益率60%は、経年で見ても順調に成長。

(百万円)



Appendix

⑥その他

事業とのリスクと対応方針

以下には、当社が事業展開その他に関してリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項について記載しております。その他のリスクは、有価証券報告書の「事業等のリスク」をご参照ください。なお、文中の将来に関する事項は、現在において当社が判断したものであり、将来において発生する可能性があるすべてのリスクを網羅するものではありません。また、当社のコントロールできない外部要因や必ずしもリスク要因に該当しない事項についても記載しております。

項目	リスク概要	発生可能性	影響度	当社の対応方針
イノベーションへの対応	予想以上の急速なイノベーションにより新規受注の減少や顧客契約継続率の低下	中	大	自然言語処理、機械学習、ITシステム開発と当社の独自データを組み合わせることにより、今後も競争力のあるサービスを提供できるように取り組んでいく
法的規制	法令の新設により、当社の事業が制約される	中	大	顧問弁護士や弁護士である社外監査役と連携し、法令状況をモニタリングしつつ、必要に応じて柔軟な対応を実施
事業開発の確実性	新規事業の拡大・成長が当初の予測どおりに進まない	中	大	プロジェクト型におけるノウハウを始めとしたドメイン知識を強化する他、新規事業のシリーズ展開を実施することでコスト効率良く事業展開を目指す
人材確保	事業規模の拡大に応じた当社内における人材育成、外部からの優秀な人材の採用等が計画どおりに進まず、必要な人材を確保することができない	中	大	従業員の働きやすさを重視した業務環境の整備(テレワーク等)やインターン生の囲い込みの強化
知的財産権	当社が認識せずに他社の特許を侵害してしまう	低	大	当社のコア技術に関しては特許を取得した他、調査可能な範囲で対応を実施

SDGsへの貢献

AEIをはじめとする当社技術・ソリューションにより、社会に貢献

3 すべての人に健康と福祉を 	「仮想人材」	人+「仮想人材」、ロボットとの連携による きめ細やかな パーソナライズ対応
4 質の高い教育をみんなに 	「仮想人材」 「パーソナライズ要約」 「啓林館プロジェクト」	人+「仮想人材」、「パーソナライズ要約」の様々な産業適用による きめ細やかな パーソナライズ対応
8 働きがいも経済成長も 	「仮想人材」 「プロジェクト型全般」	人がやりたがらない仕事を「仮想人材」が担うこと、 および、 「プロジェクト型全般」のAI/DX展開活動による 人の満足度向上
9 産業と技術革新の基盤をつくろう 	「仮想人材」 「シェパードシリーズ」 「プロジェクト型全般」	「仮想人材」の積極的な普及・「シェパードシリーズ」の各業界への展開 および、 「プロジェクト型全般」のAI/DX推進活動による 業務の生産性向上

資料の取り扱いについて

本資料には、将来の見通しに関する記述が含まれています。これらの将来の見通しに関する記述は、本資料の日付時点の情報に基づいて作成されています。これらの記述は、将来の結果や業績を保証するものではありません。このような将来予想に関する記述には、必ずしも既知および未知のリスクや不確実性が含まれており、その結果、将来の実際の業績や財務状況は、将来予想に関する記述によって明示的または黙示的に示された将来の業績や結果の予測とは大きく異なる可能性があります。

これらの記述に記載された結果と大きく異なる可能性のある要因には、国内および国際的な経済状況の変化や、当社が事業を展開する業界の動向などが含まれますが、これらに限定されるものではありません。

また、当社以外の事項・組織に関する情報は、一般に公開されている情報に基づいており、当社はそのような一般に公開されている情報の正確性や適切性を検証しておらず、保証していません。